

# 佐良山古墳群の研究

第 1 冊

1952

津 山 市

正 通 數

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
はし 22	はかならはい	はかならない		59	左 8	前方円後墳	前方後円墳
はし 2	名位	各位		59	右 16	對しは	對して
はし 21	古低窪古墳	福岡放古墳		60	四 17	第5段ハニワ頭丘四	第5段中宮第1号墳
はし 3	高に坪	高原に		62	左 28	上内の面	上の内面
はし 6	しのみで	したのみで		70	右 23	軸	軸
はし 6	坪井 3名	坪井の 3名		71	右 13-14	G塊は	G)は
はし 7	手合け	手分け		71	右 15	軸	軸
はし 13	なるべき	なるべき		75	左 9	軸	軸
はし 15	るうか?	ろうか?		79	左 30	壠円形	壠円形
はし 19	宮造	宮造		87	左 29	考えられ	考えられる
はし 21	宮廄	宮廄		90	右 15	そ)。のほか	)。そのほか
はし 22	があるが	あるが		92	右 25	ども保の存のよい	どもの保存のよい
はし 22	一方古墳	一方古墳群		92	右 28	それが	それと
はし 22	所存する	所在する		92	右 28	石棺の側係傾斜	石棺との関係の傾斜
はし 25	大ささは	大きさは		100	左 5	長く	長い
はし 25	右 17	第7号墳	第8号墳	100	左 23	比高は約90cm	比高は約90m
はし 25	右 21	第8号墳	第9号墳	101	左 2	11回版中央	11回版右下
はし 27	3~40m	30~40m		102	左 4	何段かにわかつて	何段かにわかつて
はし 27	山約1,4 m	山約1·4 m		102	左 18	墳床に破壊され	墳木とも破壊され
はし 27	台地上	台地状		102	右 31	指摘するのに	指摘するに
はし 27	7·0m	7·0 m		103	右 表	(遺2)	(遺3)
はし 29	道路の	渠道の		103	左 4	欠損	欠損
はし 31	右 2	中央中1号	中央の1号	103	右 5	第11回版下右)	第11回版上及び下左)
はし 31	右 12	調査參照	調査報告参照	104	左 2	第11回版下左)	第11回版右下)
はし 32	左 3	歴紀1号墳	細紀1号墳	105	左 10	1 cmの表	1 cm程
はし 32	右 31	正京茶晶古墳	正京茶晶古墳	106	右 12	欠損	欠損
はし 33	左 29	岡の岡2号墳	西の岡2号墳	106	右 32	欠ぐが	欠くが
はし 33	右 8	中宮古墳群	中宮古墳群	107	左 30	比較的	比較的
はし 34	左 16	横穴式が	横穴式石室が	108	左 22	(遺2)	(遺3)
はし 34	左 17	7·2 m	7·2 m	108	右 14-15	壠円形	壠円形
はし 34	右 1	同様大	同様の	112	右 18	中止線	止中線
はし 43	左 11	古備平野	吉備平野	(6)	2	Gron—one	Gion—one
はし 45	左 2	平的	平壠	(7)	9	Sarayama Tombs	Sarayama Tombs
はし 49	右 17	いるの家父長	いる家父長	(8)	11	has been	has been supposed
はし 51	左 35	失われることはない	失われるることはない			supposed -	
はし 51	註 12	神庭英朗	神原英朗	(9)	8-9	the scallop-like	the scallop-like
はし 52	左 35-36	遺物遺物	遺物遺跡			-- type with	type. With
はし 52	右 36	行ことうとする	行こうとする			the study the	the study of the
はし 53	左 7	佛教	佛教			offering	offering
はし 53	右 2	佛教	佛教			Department	Department
はし 58	左 16	north	north				

# 佐良山古墳群の研究

第 1 冊

1 9 5 2

津 山 市

## 序

わが郷土は、その美しい山河のたゞまいの中に、幾多の古墳を抱いている。しかもこれ等の古墳に対しては、相当古くから盗掘盜掘が行われた形跡があり、更に今後もその虞れがあることを思えば、今にしてこれら古文化財に対し保護を加えて学術的研究の途を確立しなければならないことが痛感されるのである。

本市に於いては、一昨年文化財保護法の施行を機に、いさゝか同法公布の趣旨に添うべく、岡山大学に委嘱して市内佐良山に遺る姫女古墳一基の完全発掘を行うことにした。時恰も嚴寒の頃とて、連日膚を刺すような風が吹き荒び粉雪のちらつく中を、二ヶ月に亘つて真摯な発掘作業が継続せられた。その間わが市民は挙つてこの事業に協力し、又同学の士も遠近から訪れてこれに援助の手をさしのべられた。

発掘の経過はフィルムに収められ出土品は残らず市立郷土館に展示し汎く公開されているが、この度その報告書を公刊する運びに至つたのである。

この事業によつて、本地方に於ける考古学に対する関心と古文化保護の熱意が湧然として高まりつゝあるを見て、ひそかに会心事としている次第であるが、更に本書の刊行によつて些かなりとも斯学の発展に寄与し得られるなら欣快これに過ぎるものはない。

最後に、本研究に従事せられた岡山大学、並びに御援助を頂いた各方面の方々に篤く感謝の意を表したい。

昭和27年3月

津山市長 中島琢之

## はしがき

曾つて長いあいだ、神話主義のはけ物にとりつかれていた日本の古代史は、その眞の姿を、今度は、底知れないノスタルギアの深淵に、落とし込まれようとしている。デイレツタントと『骨堂屋』の続出の前に、考古学は、はたと、立ちどまつているかのようにすら見える。新法令の下に、次から次と代替難い遺跡は破壊され、続々と貴重なるべき古墳墓は、盗掘の無残を、譲呈している。

すべて一連のものと、いつてよいであろうこのような潮の中で、地方々々の歴史は、所謂「郷土史」の偏狭と固陋の中に再び因習的な深いねむりにおちこもうとしている。眞の愛國心は、眞の歴史を知ることによつてのみ、獲得されるということが、眞実である限り、これは一つの危機であるといわなければならぬ。

このような状況の下に、1950年、津山市及び津山市民は、我々の前に、素晴らしい課題と、劃期的な計画とを提示した。美作國の古代史……その考古学的研究……の究明が、それである。それは、貸すに長時間の忍耐と深い理解を、加うるに我々自身の不断の方法論的反省を以つてすれば、美作古代史の眞の姿を再構成する端緒ともいべき第一歩を、踏み出すに足る構想であつた。貧弱な我々の力が、どこまでその目標に近づくことが出来るかを、絶えず顧慮しつつも、我々は積極的にその事業に参加した。その結果、1951年嚴冬、津山市民の好意と理解の下に、先づ調査対象に浮び上つた佐良山古墳群の調査に着手した。

本書は、この第一回の調査の忠実な記録であり、加えて、今後長期間に亘つて續続されるべき調査に備えての、問題の提起と見透しの若干を、その内容に有つものである。我々の方法論的具体化は、極めて貧しい形をもつて、後者に、現われるであろう。しかるにあえて発掘報告の各章に、「考察」乃至「結び」の項を設けることをしなかつたのは、これがただ單なるresumeに限ることえの懸念と、より以上に、今後数年間の調査の進行によつて得られるであろうより全般的な見透なり年代観なりえの期待とを、有つたがゆえにほかならぬ。我々の調査に、点々と現われた幾多の欠陥と不備とは、やがて実施される第二次・第三次の調査研究において、克服されるであろうと、ひそかに企圖しつつ、とりあえず、この第一番を送り出す。諸賢の忌憚ない批判と理解ある叱正とを、心から望むものである。

調査・整理・研究に際しては、多くの人々の援助と好意を受けた。終始一貫して、我々の調査の円滑な進行に、援助を與え、協力を示した全津山市民、津山市議会、津山市当局に、矢張心からの感謝を、捧げたい。中でも、直接その局にあたられた………津山市和田義一・國政

輝郎・吉元宗・須江武雄・川端克己・柳内健治・岡五十二・白石哲その他の諸氏、吉村茂氏をはじめとする佐良山小学校教員各位、田外達・日下元榮兩氏を中心とする佐良山古墳保存会の有志、我々を常に激励された医師江原猪知郎博士・江原昌平博士、及び発掘を快く承諾された地主山本稔・津高仲江の兩氏、宿舎の世話を頼つた畠野氏御一家、等々……に對しては、特に御礼申し上げたい。

発掘調査に際しては、遠路來援され、困難な中宮第一号墳発掘を我々と共に遂行された名古屋大学文学部猪崎彰一氏、発掘の全過程に亘つて、我々を助けた岡山大学法文学部学生福武彦三氏、倉敷考古館館長木義昌氏、黒川浩氏、更に、前橋英夫教授をリーダーとする成美高等学校郷土史部の生徒諸君……特に山田清之・神原英朗・今井亮・數見保幸の諸君……津山市南中学生徒山田英輔・坪井宏祐・河本清・河本昌質の諸君、金川高等学校教官江坂進氏、森綾子氏、岡山大学学生藤井伸・西本達二の兩君、その他多くの方々の援助を受けた。厚く感謝の意を表明したい。又、我々は、辛抱強く我々と行動を共にしたカメラマン宇野眞佐男氏の努力に、大きな敬意を、拂わなければならぬ。発掘後の整理研究に関しては、京都大學考古學教室梅原末治博士の御教示をはじめとし、岡山大学学生福武彦三・新庄幸夫・神原英朗の三君及び山田英輔君の不断の協力を得たことを記して、高質のそれに関する山田致知氏の好意と共に深甚なる謝意を表したい。特に出版に至るまでの難事の一切を、進んで引き受けられた神原英朗君の非常な努力と好意とは、忘れることが出来ない。

最後に、本書の出版に際して、快く序言の筆をとられ、我々を激励された、津山市長中島琢之氏の學術に對する深い理解に對しては、市会議員各位のこれに寄せられた好意と共に、感銘なきを得ないものがあることを申し述べなければならない。

このような多くの人々の協力によつて、本調査が遂行され、また本書が刊行されることを、我々は心から喜ぶものである。

岡山大学医学部第2解剖学教室人類学考古学研究室にて

調査委員	根 岸	博
1952年1月10日	浦 良	治
	中 島 寿	雄
	近 藤 義 郎	

目 次

序 言

はしがき

第 1 章・調査の経過.....	1
第 2 章・佐良山古墳群.....	9
A・久米のさら山	
B・歴史的背景	
C・各古墳の素描	
D・問題の所在	
第 3 章・中宮第 1 号墳発掘調査報告 .....	55
第 4 章・門の山第 1 号墳発掘調査報告 .....	89
第 5 章・祇園前古墳調査報告 .....	99
附 I・中宮第 1 号墳出土人骨について .....	109
II・英 文 抄 錄 .....	卷末

## 挿図・図版目次

### 挿 図

第 1 図	掛川市附近地形圖	1 2
第 2 図	佐良山古墳群分布圖(近藤)	2 2
第 3 図	中宮第1号横穴式石室(横崎・福武・近藤)	5 7
第 4 図	中宮第1号横穴式石室(近藤)	5 9
第 5 図	中宮第1号横穴式石室(近藤)	6 0
第 6 図	中宮第1号横穴式石室(近藤)	6 1
第 7 図	中宮第1号横穴式石室(横崎・福武・近藤)	6 3
第 8 図	中宮第1号横穴式石室(横崎・近藤)	6 4
第 9 図	中宮第1号横穴式石室内発見四つ重ね盃状出土状況(横崎・近藤)	6 7
第 10 図	中宮第1号横穴式石室内発見状況(横崎・近藤)	6 8
第 11 図	中宮第1号横穴式石室外発見土器類(近藤)	7 1
第 12 図	中宮第1号横穴式石室内発見土器類(タ)	7 2
第 13 図	中宮第1号横穴式石室内発見鐵器 1 (タ)	7 3
第 14 図	中宮第1号横穴式石室内発見鐵器 2 (タ)	7 4
第 15 図	中宮第1号横穴式石室内発見四つ重ね土器(タ)	7 5
第 16 図	中宮第1号横穴式石室内発見土器類(タ)	7 6
第 17 図	中宮第1号横穴式石室内発見鐵器 1 (タ)	7 7
第 18 図	中宮第1号横穴式石室内発見鐵器 2 (タ)	7 7
第 19 図	中宮第1号横穴式石室内発見鐵器 3 (タ)	7 8
第 20 図	中宮第1号横穴式石室内発見刀子(タ)	7 8
第 21 図	中宮第1号横穴式石室内発見刀子(タ)	7 9
第 22 図	中宮第1号横穴式石室内発見アブミ 1 (タ)	8 1
第 23 図	中宮第1号横穴式石室内発見アブミ 2 (タ)	8 1
第 24 図	中宮第1号横穴式石室内発見クツワ 1 (タ)	8 2
第 25 図	中宮第1号横穴式石室内発見クツワ 2 (タ)	8 3
第 26 図	中宮第1号横穴式石室内発見クツワ 3 (タ)	8 3
第 27 図	中宮第1号横穴式石室内発見鉄錐 1 (タ)	8 4
第 28 図	中宮第1号横穴式石室内発見鉄錐 2 (タ)	8 5
第 29 図	中宮第1号横穴式石室内発見金具付銀具(タ)	8 5
第 30 図	中宮第1号横穴式石室内発見銀具(タ)	8 5
第 31 図	中宮第1号横穴式石室内発見鉄斧(タ)	8 6

第 32 図	中宮第1号横穴式石室内部見込み (タ)	8 6
第 23 図	中宮第1号横穴式石室内部見込み (タ)	8 7
第 24 図	中宮第1号横穴式石室内部見込み及その他 (タ)	8 8
第 35 図	門の山道1号埴地地形測量図 (福武・中島・近藤)	9 1
第 36 図	門の山道1号埴地石及石棺配慮図 (福武・森木・中島・近藤)	9 2
第 37 図	門の山道1号埴見石A石棺 (近藤)	9 4
第 38 図	門の山道1号埴見石B石棺 (福武・森木・近藤)	9 5
第 39 図	門の山道1号埴見石C石棺 (福武・森木・近藤)	9 6
第 40 図	門の山道1号埴見土器片 (近藤)	9 7
第 41 図	戸越塚古墳地形測量図 (福武)	10 0
第 42 図	抵御塚2号横石室 (福武・近藤)	10 1
第 43 図	抵御塚2号横石室平面図 (近藤)	10 3
第 44 図	抵御塚古墳埴見陶棺 (近藤)	10 4
第 45 図	抵御塚吉接埴見土空頭 (タ)	10 5
第 46 図	抵御塚2号埴見金環及玉 (タ)	10 8

## 圖 版

第 1 図 版	中宮第1号横全景 (宇野)	5 7
第 2 図 版	中宮第1号横前部石棺及び埴輪出土状況 (宇野)	6 1
第 3 図 版	中宮第1号横穴式石室天井部及び狪門閉鎖装置 (宇野)	6 3
第 4 図 版	中宮第1号横穴式石室内部 (宇野)	6 3
第 5 図 版	中宮第1号横穴式石室内部出土状況 (宇野)	6 7
第 6 図 版	中宮第1号横穴式石室出土土器内供物残存 (山田)	7 5
第 7 図 版	中宮第1号横出土土器物 (中島)	7 7
第 8 図 版	門の山道1号埴命形 (中島)	9 1
第 9 図 版	門の山道1号埴石棺配置及び砾石錦呈状況 (中島)	9 3
第 10 図 版	門の山道1号埴見石棺 (宇野・中島)	9 7
第 11 図 版	抵御塚1号及び2号横陶棺埴見状態 (中島)	10 3
第 12 図 版	抵御塚2号横石室・遺物出土状況及び遺物 (中島)	10 5

◆カッコ内の入名は、調査者は撮影者を示す。

◆等回はすべて近藤が行つた。



カット I・中宮I号旗窓  
四ツ重ね高杯出土状況  
(cut I)

第 1 章

調査の経過

申 近 島 藤 寿 義 雄



カット2 中宮第1号墳頂にて (cut 2)

## 調査の経過

墓場を含めて、現地における今回の調査は1951年1月20日から、1951年4月8日のあいだ、略々繼續して行われ、若干の中止日を除いて、総計47日間を費した。各発掘古墳毎に、「経過」の項を設ける頃を避け、此處に括して、全調査の行程を記録する。但し、1950年末における豫備的調査は、一切、省略に附すこととする。(本章散稱略)

**1月20日。** 午後2時30分、浦良治・大森誠一・橋崎彰一・福武彦三・近藤義郎の5名岡山を出発。佐良山にて、一端下車し、中宮1号墳附近並びに、門の山古墳群の一部を、豫察する。中宮1号墳後川部東北麥畠中より埴輪円筒及び祝部式土器の若干の破片を発見する。夜、津山市江原猪知郎邸に、先輩の根岸博・江原猪知郎・吉元宗・岡五十二・鎌木義昌・中島壽雄、並びに、上記5名が、集合し、中宮1号墳を、最初に、即ち明日から調査すること、及び宇野眞依男を、カメラマンとして招請することを決定する。

**1月21日。** 午前中、中島を主として、中宮1号墳の電気探査を行う。後円部頂を通つて東西に、測線を張り、中心法及び同深法を試みた結果、中心法により墳頂下方4~4.50mにおいて、若干の変化が認められたが後述の如き都合により充分の時間を得ず、石室の存在・方向・規模を確認するまでに至らなかつた。正午、前橋英夫が神官として、キヨメを行う。晝食後、根岸・浦・大森・中島は、勝田郡豊田村御崎野住居址豫察に出発する。午後下車、及び灌木を切り扱い、橋崎・福武・近藤の3名、簡易トランシットを使用して、

測量を行う。夕刻5時30分までに、3.5m等高線を終了し、本日の作業を終る。尚、除草木の結果、本古墳が、所謂帆立貝式の前方後円墳であることが判明した。又、墳の東西草むら中に、半壊した陶棺が発見された。これは、古墳東側の開墾の際、出土したものと地主山本は語つた。

**1月22日。** 前日に引きついで、橋崎・福武・近藤は、雪の中を終日測量に、従事する。附近一帯の灌木類を、切り拂つて、字野による16mm撮影を開始する。夕刻までに等高線4mまで、完了する。

**1月23日。** 測量は、トランシットを、2号墳頂に移動して、續行される。2号墳西斜面の破壊痕から、祝部式土器小破片を発見したほか、同墳北側の烟燭から、人物象形埴輪の腕と考えられる小片を採集した。午前9時から、後円部頂に、3m巾のトレンチを入れる。深さ10~20cmの箇所(主として頂中央部及びその南邊)から、口縁部を含む、祝部式土器破片若干及び、土器片1片出土、又、墳頂西側の深さ50cmの所から、土器皿半欠を発見する。土が可成柔かであるため排土は、急速にすみ、午後2時30分、北西隅附近において、天井石と考えられる、巨石に到達する。4時頃までに、北東部においても、天井石と考えられるものを発見。墳頂から、北西部発見の巨石の深さは、1.1mを測つた。直ちに、トレンチの巾を擴大し、5時発掘作業中止までに、略々1mの深さまで、排土する。測量は、午後5時30分まで繼續、池の東邊附近を除いて、略々完了する。

1月24日。測量は午前中、すべて完了する。午前中、石室天井石の西半部を、午後、その東半部を、露呈する作業を行う。その略々全面にわたって、厚さ10~15cmの黄褐色の粘土の被覆が、認められたほか、石と石との隙間及び部分的に石の上に、灰黄色の粘土が充填または、配置されているのを、発見する。又、天井石に接して、数ヶ所より土師器片が、発見された。その他、トレンチを大きく擴大した結果、表土下数十cmより観部式土器片及土師器片數片が出土した。

1月25日。午前中から、午後の一帯にかけて、側壁上部を含め、天井石全面の拂土、清掃を行う。前日と同じく、若干の箇所から、土師器片が出土。拂を組んで、宇野による天井石の撮影を行つた後、橋崎及び福武が主となつて、その實測を開始する。別に、黒川浩・近藤は、成美高等学校生徒及び南中学校生徒の協力を受け、前方部から、後円中央部に向つて、浅いトレンチを入れた結果、葺石とともに考えられる人頭大の石の散在及び、ハニワの圍繞を発見した。ハニワは、先づ最初に前方部との右側のクビレ部において、発見され、續いて左側クビレ部においても、見出された。ハニワは數十cmの間隔を置き、後円部をとりまいて、配置されていることが、推測された。午後5時半作業中止までに、向つて右側に13本、左側に7本が、検出された。

1月26日。午前中は、前日にひきついで、ハニワの検出作業と、石室天井部の實測を行う。正午に近く、石室西端の天井石を除去して、内部を観察する。外面からの観察及び墳形の所謂帆立貝式をなしている状態から考へて、はじめ、我々は、壺穴式石室を内部主体とする類の古墳と、想定していたが、そ

の後、特に本日の内部観察によつて、それが全く誤りであることが、判明した。内部は、長年月の間、徐々に流れこんだ細土が、可成り堆積していたが、充分入ることが出来た。観察及びボーリングの結果、羨道が西方に、その口を開く、横穴式石室であることが、判つた。羨道部は、明日、拂土露呈することとして、玄室内部の流落土の排除を行つた。その際、玄室西北隅において、底面とは、全く考えられない浅い地点から、壺形觀部式土器にのつたまゝ倒している土師器完存品が発見された。これは、後述する巨大高に坪のつた一組の土器中の上2個であることが、後に判明した。夕刻までに、極く一部の拂土を完了したのみ。ハニワの検出作業は、順調に進行し、夕刻までに、計40余個が、発見された。又、前方部と後円部との境界にも、一列に、ハニワの存在が、確認された。昨日我々が、葺石状のものとして、想定しておいた石の散在の中に、略々前方部の中央邊にあたつて、乱雑ではあるが、確實に2列に、石が並んでいるのを、注意した結果、これが、後述の前方部石室ではないか、と考えるに至つた。フタ石の如きものが、全く見当らないことが、我々の疑問ではあつたが……。この日から天幕を張つて、作業員交代で、宿泊することにする。

1月27日。昨日確認した、羨道部の露呈作業を行い、午後中に、愈々、石室の全貌が、露呈した。羨道は、西に開口し、巨大な板状の石を、最外側の閉鎖用に、使用してあつた。玄室及び内側からする羨道部の拂土は、昨日に引つづいて、行われた。昨日発見された觀部式土器及土師器は、更にその下に續く觀部式高坪の上に乗つた大型の觀部式壺上に

のせられたものであることが、判つたほか、この巨大な高壙から約70cm 奥壁よりで、右側壁より 50cm 南の所から、鉄鎌が出土した。これは、可成りの高位の土中に存したため、シャベルの尖にあたつて、三分した。高杯の全体を、露呈できないうちに、日没。昨日想定した前方部の2列の石が、やはり、石室であることが、午前中の排土作業の結果明らかとなつた。しかし、依然として、フク石のないことが、疑問として残つた。日没までに、畳々全体の排土を終了した結果、比較的粗に置かれた敷石の上、石室東壁に接して観部式土器壙が2個底部を上にして、発見された。ハニワの検出は、本日も續行され、美道部入口の周辺を除いて、後円部全体に圍繞していることが、判明した。尚、前方部に、無秩序に散在している草石かと、想定された石は、今のところ、前方部石室の側壁の一部が、散乱したものではないかと、想像されている。

**1月28日。** 午前中は、主として楕崎及び、福武が、後円部主体の美道部の外側の質調を行う。近藤は、成美高校生、南中生の協力によつて、前方部石室の完全排土及び清掃を行つた後、後円部主体の玄室の排土を行う。成美高校郷土部及南中生山田英輔、坪井宏祐は、昨日まで検出されたハニワ円筒の完全露呈作業に従事する。午後、撮影の後、美道入口の閉鎖直石を取り除く。入口は、更に嚴重に閉鎖、即ち、該直石の内部に、尺大の石をぎつしりとつめていることが、判明した。玄室の排土は、順調に行われ、夕刻、奥壁に接する箇所から、壺アブミ・観部式提瓶・土器片等が、また、北西隅において、土器片・観部式土器及び、鉄片が、それぞれ発見され

た。夕刻に至つて、玄室西北部の一部において、底石の蹠が、見出された。尚、午後、前方部の石室の質調が、開始された。

**1月29日。** 終日、後円部石室の排土を行う。玄室の北東部の北側壁にそつて、掘り進めた結果、例の大高壙から數 10cm はなれて、先づ観部式壙、續いてその横に 20cm ほどへだてて、土師器壙が発見された。奥壁附近の排土は、畳々として進まなかつたが、日没までに、昨日の露見品に接して、観部式壙が数箇、續いてその南側に観部式の壙及び、それに接して、1本の鉄鎌が発見された。更に、北側壁に近く、それと平行に、3口の直刀が検出された。前方部石室の一帯を質測する。

**1月30日。** 終日、石室内の排土・遺物露呈作業を行う。楕崎・黒川・岡・前橋及び近藤が、交代に從事する。午前中、玄室中央附近から、クツワ、續いてその南側に、観部式土器壙を、奥壁附近からは、観部式土器數箇及び各種鉄製品を発見する。また、29日・28日発見された土師器小片（これはおそらく天井石上から、落下したものらしい。）及び遊離した壺アブミの残片を、質測の上、取り上げる。午後、玄室中央よりや、美道に寄つた地点から、観部式土器の壙が、畳々と検出された。それに東接して鏡板1枚、その他鉄器具數点も、発見された。奥壁附近においては遺骸の下顎骨・歯が、発見されたほか、ツボアブミの右側に、10枚ケの鏡が、整然と出土した。また南東部からは、鉄鎌の數十本の塊が、見出され、その北側から、大型の鉄鎌數本、更に、南壁に沿つて、直刀が、発見された。

**1月31日。** 午前・午後を通じて、石室内の遺物調査作業を行う。各部遺物検出の外、被葬者遺骸を、発見。玄室は、全面に亘り、略々鶴卵大乃至それ以上の河原石を、敷きつめてあることが、判明する。夕刻から、内部に電燈を入れ、7時まで作業を継続した結果大体において、遺物の全体を露呈させる。

**2月1日。** 中島が本日、豊田村から、急行し、人骨埋葬状態を調査する。質測及び寫真撮影の都合で、終日、遺物及び散石の清掃・露呈を行く。鏡面口閉鎖石を取り除く。

**2月2日。** 石室内の遺物出土状況、即ち石室内プラン質測を行う。日没迄に、半分終了する。又、別に午前中、トランシットによるハニワの位置測量、午後は、ハニワ圓錐状態を $\frac{1}{10}$ 縮尺で、質測する。尚、石室に配電して、宇野が、撮影を行う。

**2月3日。** 午前中を費して、玄室遺物出土状況プラン質測を終了する。別に、昨日に續いてのハニワ $\frac{1}{10}$ 質測を行い、その $\frac{2}{3}$ を終了する。午後、遺物出土状況のセクション質測を行つた後、遺物の取り上げを、開始する。橋崎・福武・岡・白石・山田(清)・神原英朗・散見保幸・山田(英)・坪井・國政・岩佐等の協力により、夜7時30分までに、悉く取り出すことが出来た。またハニワは、前方部との境界の部分を除いて、45番までを、取り上げる。全員、寒さと忙しさ、それに不自由な姿勢での終日の作業のため、甚だしく困憊したが、発掘の半ばが、無事終了出来たことを、心から、喜び合う。尚、午前11時30分宿舎に使用していたテントの内から失火し、テントが全焼した。遺物は直ちに、トラックで、津山郷土館に運送する。

ハニワは一時、地主山本の縁下に置くことと

する。

**2月4日。** 初から大雪、加えて豊田村御崎野住居址の発掘が、数日後に打ち切られるとの報を受けたので、本日は、作業を中止して豊田村に出かけることにした。岡山大学教育学部からの見学バスに、橋崎・福武及び近藤が乗車して、御崎野住居址に向う。住居址発掘に協力。そのまゝ、本日は、豊田村芦田資夫方に宿泊。

**2月5日。** 早朝、佐良山に戻り、前方部石室及び、後円部石室の質測を行う。別に、福武は、ハニワの廻廊の質測を行う。前方部石室では、側壁及び、前後壁の質測を完了させる。後円部石室では、右側壁の質測の約 $\frac{1}{3}$ を終了する。夕刻、残りのハニワを、すべて取り上げる。

**2月6日。** 都合により、午後2時から、作業開始、前日に引きついで、質測。後円部石室側壁の約半分及び玄室中央部にてのセクション、前方部石室のプランを、完成する。山田(清)・山田(英)・坪井の3名が、玄室南北東部において、練玉及び、ガラス製小玉を10枚発見する。

**2月7日。** 橋崎は、本日10時の汽車で、津山を去り、名古屋に向う。既述の豊田村御崎野住居址の発掘を、どうしても、本日中に切り上げねばならず、加えて、入手が不足であるとの報を受け、近藤は、豊田村に急行する。その日は、豊田村に泊る。

**2月8日。** 福武及び近藤は、佐良山に戻り山田(英)・坪井の協力をうけ、前日に引きついで、石室の質測に、従事する。福武、夕刻歸る。

**2月9日。** 近藤は終日、後円部石室の質測に、専念したが、完成せず、奥壁及び側壁の

大半を終了し、のみであつた。山田(清)・山田(英)・坪井の3名が、午後になつて、現場に到り、前日の同じ箇所から、ガラス製小玉6ヶ・練玉2ヶ・鐵錫片を、發見する。

**2月10日。** 近藤は、森・山田兄弟・坪井の協力を得て、終日、石室の實測を行う。若干の練玉・ガラス製小玉を發見する。

**2月11日。** 山田兄弟・坪井の協力で、午前中石室内の實測の總てを、終了することが出来た。又、若干の練玉・ガラス製小玉を發見する。本日で、中宮1号墳調査の大体が、完了したので、午後は、上記3名とともに、近藤は、福田の古墳を、視察して廻る。

**2月26日。** 第2回目の調査のため、病中の近藤を除き、根岸・浦・中島、12時50分のバスに乗り、津山に向う。夜、江原邸にて、津山市企画係長柿内健治を交え、準備打合せを行ふ。

**2月27日。** 浦・中島は、雨の中を、現地視察。ふりしきる雨のため、作業不可能となり。本日は、豫察のみにとどめ、3月1日から、発掘にかかることとする。

**3月1日。** 福武及近藤は、午前10時に岡山を出発。午前2時から、第2回の門の山1号墳の調査を開始する。雨に妨害されながら、測量を行う。5時10分作業中止まで、全体の約 $\frac{1}{3}$ を測量したる。

**3月2日。** 午前から、午後2時までに、測量を完成する。その際、墳頂及墳斜面に、葺石ではないか、と考えられる人頭大的石が、散布しているのに氣付く。雨のため、午後2時、測量終了と同時に、作業を中止する。別に夕刻、福武及近藤は、中宮1号墳に至り、坪井の協力を得て、後円部石室内から見た天井部のプランを、實測する。

**3月3日。** 午前中、神官が来て、キヨメを行う。それより前、神官米場前を利用して、近藤は、附近の古墳の分布・現況を、観察する。12時15分から、墳頂に、トレンチを入れる。夕刻までに、墳頂東側のA石室のフタ石の全体及び、北側のB石室の一部分が、露呈された。尚、墳中央辺から、土師器細片2片の出土を見た。

**3月4日。** 午前中は、A石室の全貌を、排土露呈させ、プラン及び、継のセクションの實測を行つたほか、B石室の全体を露呈させ、更に、墳頂西側にA石室と併行して、C石室を發見した。午後、A石室の横断セクションの實測を終了させた後、フタ石を取り除く。内部には、土が充満、その一部を排土しプランを畫く。土師器の小片2ヶが、フタ石の直下から、出土した。B室の全貌のプランを、午後到着した鎌木義昌が、C石室のプランを福武がそれぞれ實測、日没近くまでに界々終了する。別に、墳丘を南北において、縦断するトレンチを、先づ北方から、入れた結果、斜面において現表土から、可成りの深さに、葺石列を、発見する。午前4時、名古屋から橋崎が到着した。

**3月5日。** 午前、A石室内の排土を行う。遺物・遺骸は全く發見されず、土師器細片1ヶが見出されたのみであつた。午後は、B石室及びC石室それぞれのフタ石を、除去して充満している土の排除を行い、夕刻までに終了した。Aと同様にB・C兩石室ともに、若干の土師器細片が見出された以外、見るべきものはなかつた。葺石の露呈も順調に進行し夕刻までには、北側及び西側の半分を、露出させることが出來た。

**3月6日。** 雨中を、近藤のみ、現場に至り

A石室内部プラン實測を完了する。雨が激しくなつたので、正午中止する。検討は、早朝佐良山を去り、名古屋に向う。

**3月7日。** 午前中、A石室内部セクションの實測を終了した後、底石を取り除いた結果石室南半部には、更にその下に、小砂利が、敷ききつめられているのを發見。午後は、C石室内部のプラン實測を行う。別に、葺石の露呈作業を進めた結果、墳丘を圓錐していることが、判明したほか、面白いことは、西側に2辺を有つ、5角形—野球の本壘ベース形を呈していることが判つた。遺物は、A石室の附近の封土内から、2片の土師器が出土したのみである。

**3月8日。** 午前中、B・C兩石室の實測を鎌木、福武及び近藤が、手合して行い、正午までに、完成する。午後は、全員して、葺石の露呈作業を行う。夕刻までに完了する。

**3月9日。** 蔷石の $\frac{1}{10}$ 縮尺の實測を、手分けして行う。東側を福武、北側鎌木、西側を中島、南側を近藤がそれぞれ分擔する。午後6時近くに、終了する。本日をもつて、門の山1号墳の發掘が、完了した。

**3月13日。** 本日から、祇園故古墳の調査にかかる。祇園故における古墳は、2基ともに數次に亘る、盜掘が行われており、その結果封土は切り崩され、陶棺は大きく破壊され、墳頂寸前の状態であつた。特に、我々が1号墳と呼稱している1基は、殆んど、全墳と云つてよい位の、損傷を蒙つていた。そのため先づ1号墳の排土を行つた。 $\frac{3}{4}$ ほど残存している陶棺身のまわりに、申し譲の様に石室の一部が、見出され、陶棺内からは、粉々に破壊された、蓋の部分の破片が、棺脚下からは、若干の範部武士器片と、鐵らしい鉄の小

片が発見されたのみである。實測の後、午後4時頃から、2号墳の方にとりかかる。6時頃作業中止。

**3月14日。** 2号墳も、陶棺が首を出してゐるので、その周囲を約3.0mの巾で、南北に掘り進めて行く。やがて、南側にもう1棺安置されているのを發見する。正午頃までに此等2棺をかこんで、各々南北に長く南に開口する、しかも天井石と考えられる施設の全く見当らない横穴式石室が、存在することが判明した。南棺は、蓋部が身部の中にくずれ落ちている上に、極めて脆弱であるために、作業は次第に困難となる。石室底に達しない内、日没す。尚午後3時頃から、兩墳にかけて1縮尺で、地形測量を行う。

**3月15日。** 午前中、陶棺周囲の排土を行う。北棺の脚下及び脚下附近から、範部武士器が、續々と發見された。午後、排土を更に續行し、石室底の各々全面を露呈させ、陶棺と壁面及び底面との関係位置を、實測圖に画いた後、南棺も搬出する。甚しく脆弱であるため、搬出中、大小の破片となつて丁つた。その後、北棺周囲の土器類の全貌を、清掃説呈させ、撮影の後、北棺も、搬出する。夕刻に至つて土器類出土状態の實測圖をとつたのち、取上げを行う。

**3月16日。** 午前中から午後2時まで、祇園故2号墳の石室を實測する。その間、西北山麓に所在する三ツ塚古墳3基を観察する。午後2時30分から、一昨年、成美高校等の手によつて、發掘の行われた附近の平塚塚を調査する。残存していた1個の、内部に土が充していた陶棺身上に置かれてあつた頭骨一部を、根岸が調査する。その後、福武及び近藤は祇園故2号墳に至り、實測を完了する。

**3月17日。** 昨日に引き続き、雨中を、平佐塚の調査に従事する。午前中、簡単に、地形測量を行う。成美高校発掘の際に、残された1個の陶棺は、数十年前に、破壊されたものと覺しく、身の一部のみが、完存するだけであった。昨日見出された頭骨の外に、大腸骨が発見されたが、これら遺骸が、この陶棺と関係あるのもか、否か、大いに疑問である。陶棺は、取り出すことなく、現場にとどめ、被土を行う。別に、浦及び近藤は、門の山1号墳の葺石調査に赴く。夕刻、津山市からのトラックで、祇園跡1・2号墳出土陶棺及び土器類、並びに中宮1号墳のハニワを、郷土館に運搬する。

**3月18日。** 平佐塚の、幸うして残存している石室及び半壇の陶棺について、実測を行い、午前中終了する。本日をもつて、第一次佐良山古墳群発掘は、無事終了した。

**3月24日。** 近藤、午前11時、佐良山に赴く。佐良山古墳保存会副会長日下元榮の案内のものとに、山田(清)・山田(英)・坪井・河本(昌)・河本(清)・太田の諸君の協力を得て、

宇都山地区内の古墳を、踏査する。

**3月25日。** 今日は、佐良山保存会長の田外連の案内で、昨日のメンバーが、宇高尾地区内の古墳調査を行った。午前中、東半分を終了。午後雨のため、中止する。

**4月5日。** 西本謙二・山田(英)・河本清の協力を得、坂手輝夫の先導によつて、近藤は高尾西半の古墳の現状調査を行う。午後は、平福の嵯峨山東面の古墳群の現状調査。

**4月6日。** 西本・山田(清)と共に、近藤は一方の古墳を調査する。雨激しいため、正午中止。

**4月7日。** 再び、近藤は、一方の近藤保を訪れ、案内を請ひ、一方より、且、種に至る地区内の古墳の現状調査を、日没まで行う。

**4月8日。** 午前、山田(英)・河本(清)と共に、近藤は、宇凱地盤内の寺山古墳群を、調査する。堅穴式石室を持つ古墳群を発見した。本日をもつて佐良山地区内の古墳現状調査を終了すると共に、今回の第1次佐良山古墳群調査を、打ち切ることにした。

## 第 2 章

### 佐 良 山 古 墳 群

近 藤 義 郎

A ..... 久 米 の さ ら 山

B ..... 歴 史 的 背 景

C ..... 各 古 墳 の 紹 描

D ..... 間 廻 の 所 在

## A. 久米のさら山

### (1)

作州は、山又山の國である。中尾山脈のバクボーンを境に、瀬戸内へ向う南面の山地である。瀬戸内に面する地域の豊沃な平野に比すべきものは、ありようはずがない。そこには、無数の小河川によつて沖積される猶額大の谷間平地と、那岐山・藤山その他の麓下に形成された扇状地とが、僅かに、見出されるに過ぎない。農業が、そして恐らくより正確には、水稻栽培が、生産の第一義的部門を占めていた古代においても、こうした状況は、同様であつたことは、いうまでもないであろう。小川が流れるか、潤水があるかすれば、何處の谷頭も、作州の祖先達の手によつて、むさぼるように、切り開かれていつたに違いない。作州の現実は、このような自然的環境にとりまかれたその祖先達が、種々な社会的休制の経済の下に、歩み進んで來た歴史の中に、はじめてその眞の姿を、示すであろう。

こうしたみじめな自然環境の中において、現在の津山市を中心とした津山盆地は、たとえそれが山中に僅かに開けた小盆地であるとしても、現在もそうであるように、往古においても、特異な、そして中心的な位置を、占めていたであろうことは、想像に難くないところである。勝田郡・吉田郡・久米郡等の山塊に源を発する、小河川…加茂川・廣戸川・宮川・菅ヶ美川・久米川・鳳川等…は、津山盆地に向つて、西方から流れ込み、中尾山脈の分水嶺を起点とし、盆地を東西に貫流して南下する吉井川に、合流する。従つて、そ

こには、小規模ながらも肥沃な沖積低地が、隨所に、生ずることになつた。菅ヶ美川がその西端を南下する菅ヶ美盆地、吉井川流域の芳野村、鷹村の平地、同じく院庄平野、鳳川が貢流する三保村及び佐良山の沖積低地、宮川が南北に走る一宮村苦田の平野、加茂川の流れに沿ふ高野平野、國分寺周邊、等々…方1里にもはるかに満たない群れの谷間流域平地が、盆地中心部を取りまくようにして存在する。正に作州の中心部と云つてもよいであろう。従つて、和銅6年分國によつて誕生した美作國の國府及び天平13年の勅令に基く美作國分寺が、この盆地内に、建設されたことは、決して過誤ではなかつた。その有つ自然的環境の優越さが強調される所以である。しかし、自然的環境の優越さは、そこに文化を、醸成させる可然的條件となることが出来ても、それのみでは、文化を生み出すことは出来ない。更にまして、自然的條件の優劣は、所與の社会の持つ諸條件によつて、強く規定される。むしろ、それは、社会的従つて歴史的諸條件によつて、變化し、あるいは変革されるとするであらう。我々は、單に、津山盆地の恵まれた自然のみから、その歴史を語ることは、出來ない。國分寺の建立も、國府の設置も、それまでの長い歴史的背景を、無視しては、容易に理解し難い所であろう。

現在、津山盆地の周邊には、無数の古墳墓が見出される。國分寺を中心として附近の低小丘陵地帯に数百基を数える河邊古墳群、加茂川右岸の台地上に点々と散在する高野の古墳群、神樂尾山東南方の総社古墳群、院庄

平野を臨んで巨大な前方後円墳を含む二宮の古墳群、香ヶ美・芳野・郷にかけてのうねうねとした低い丘陵に立地する古墳群、帶状に狭く長く走る佐良山の手地周邊の山々に見出される夥しい古墳群。主要な密集地帯を除げただけでも、その夥しい、恐らくは千を越える古墳墓の營造は、驚異的ですらある。内海平野に存するそれに比すべき古墳群の築造である。これらの、このような多數の古墳墓が、如何なる歴史的な進程を経て山間の小盆地周辺に、營造されるに至つたかという問題及びこれらの古墳墓自身の示すその時代の社会の實体が如何なるものであつたかという問題こそ、津山盆地の、ひいては、作州一円の古代史において、先づ最初に取りあげられなければならない事柄に違いない。こゝに、その概要を報告しようとする佐良山古墳群の調査は、その是れりとでも式るべき第一歩に過ぎないものである。

## (2)

「炎作やくめのさら山さらさらにわがなは立てしよろづよまでに」古く延喜5年紀實之等の勅撰にかかる古今和歌集に歌われ、以後、その静かなる秀麗な山の起伏と四時の美しい景觀とが、様々な人々によつて、吟詠の對象となつたさら山は、また更に遡く、古代歌家發展途上の作州の山野に活躍した多くの無名の人々の舞台でもあつた。是々と、山麓山腹に連なる夥しい数の古墳墓の群は、點々と、その事實を、示している。

さて、古歌に吟ぜられた「さら山」が、佐良山内のどの山に比定されるかどうかは論外として、我々が、こゝに調査對象として、佐良山と呼ぶ地域は、津山盆地の西南方、鳳川流域の狹隘な不地及び、それを囲繞する山々

を、包括しております、行政的には、昭和16年津山市への合併前の久米郡「佐良山村」を總稱する。北は吉井川をへだてて二宮・院庄と、東は舊久米郡福岡村と、西は久米郡三保村と、南は久米郡加美町と、それぞれ境を接する。東西約3,500m、南北約5,000m前後の小さなムラである。津山盆地を構成する一要地であると共に、近世に至るまでの東西交通の要地でもあつた。その概略の地形を述べれば、先づ、久米郡西部に源を発する皿川は、倭文村、三保村の小盆地を貢流して後、佐良山へ入り、原田川・小屋谷川・市場川等の幾つかの溪流を合流しながら、緩やかな蛇行を行つて、更に北上し、吉井川に合流している。その流域の平地は、吉井川との合流点附近のやや廣くなつている部分を除いては、約300~500m前後の巾を以つて、南北に細長くのびている地域のみである。「久米郡誌」の著者は、「本平野（佐良山の手地のこと）……近藤註）は、本村の主要部であるのみならず、本郡の主要平野である」と述べておるが、それにもしても、僅かな、正に狹長な沖積平地ではある。従つて、やはり、「佐良山村」の大部分は、炎作の他の多くの地域と同じように山及びその間を無数に縦つて走つている大小の谷によつて、占められているといつてよいであろう。第1圖の10万分1地形圖によつて理解されるように、鳳川の東側には、北部に神奈備山（地形圖には佐良山として記載されている）竜の宮山…寺山連山、更に市場川の谷を越えた南に、猿山…高鉢山の連山、西北辺には、三保村にその西斜面をのぼしている嶺崎山山塊、その南面鳳川をへだてて、同じく三保村にまたがる大平山を最高峯とする蓮山等、標高300~400mを算える山

々がその周囲を取りまいている。しかし、これらの山々は、中央の平地に向つて、そそり立つているような部分は少く、概して、ゆるやかな台地を伸ばしつゝ、平地に接している

のが、常である。特にそれは、神奈備山—寺山西面・嵯峨山東斜面・高鉢山西面の一部等において、特徴的である。現在、聚落の多くは、こうした山々の麓下に數十戸づゝ点在



第1図 津山盆地地形図(10万分の1) (Fig. 1)

し、その耕地を、前記の平地及び、山間にのび擴がつている大小の谷頭に、求めている。

こうした地形的環境を有つている佐良山が津山盆地の中でも最も古墳墓の密集する地の一つであることは、先に述べた如くである。それは、盆地東南にあたる、國分寺を中心と

した河麗古墳群、國府の跡と稱せられる総社背後の山々に見出される総社古墳群に、まさるとも、劣らない地域である。あの狹小な地域に、200基にも達しようとする古墳が、ひしめき合ひ様にして存在している事實は、ともかく注目すべき事である。このことは、こ

の地が、石材に便利な流紋岩の産出に恵まれているとか、東西交通の要衝になつていては、その單純な理由のみからは、考へきれるものではないであろう。今、この佐良山古墳群について、1基1基の素描を始める前に、直接佐良山古墳群に關係ないかも知れないが、津山盆地の、ひいては作州地方一帯の古墳墓誕生の歴史的背景となるべさ農耕社会の成立と発展を、特に山間地方といふ特異な條件の下に若干、考へて見たいと思う。

## 註

- 1) 矢吹金一郎著「新訂作岡誌」『西作誌中巻』18頁——21頁。
- 2) 同上 18頁。
- 3) 津山市丸の合併以前の「佐良山村」については、「久米郡誌」第1章沿革参照。
- 4) 「久米郡誌」87頁——89頁。
- 5) 同上 4頁。
- 6) 特に、神領山——笛山——高跡に亘つて流紋岩が分布し、山頂山腹の墳墓に、露岩を見せている。江坂准氏の教示を得た。



カット3 津山市沼住尾址(弥生式)断面露呈写真 (cut 3)

## B 歴 史 的 背 景

いうまでもなく政治的・社会成立の基本的なモーメントとなつたものは、日本列島においては、農耕の開始であり、農耕社会の誕生であつた。従つて、我々もまた、初期農耕社会=彌生式文化の成立から、語り始めなければならない。

佐良山にも、この時代の人々の存在を示す3、4の遺跡が発見されている。大字皿寺池東方の谷斜面において、小數の後期及び中期(?)彌生式土器片と共に石斧丁が、同じく皿市場のやや急峻な谷傾斜面に、後期彌生式の明らかなる包含層が、更に、大字高尾御笠尖の標高200mの台地上において、若干の後期彌生式と考えられる土器片が、又大字福田劍戸の西面丘陵上に、微細な土器片と共に蛤壳石斧と、石鏟が、その他、正確な出土地点は明らかでないが、蛤壳石斧、石庖丁、抉入石斧等が発見されている。何れも、現在の集落とは、或る程度へだつた丘陵又は谷斜面であることが注意される。ともかく、そこには明らかに石器を用いた人々が、農耕を営みながら住んでいた。

### (1)

「彌生式文化における集落立地の性格は、つねに低地性といふ言葉を遁して強調される」。彌生式文化を語るものは、例外なしに、縄文式のそれとの対比の上に、その遺跡立地の低地=沖積地進出性を、語り綴けて來た。彌生式の社会が、農業を、恐らくは水稻耕作を、その基本的な生産部門としようとして努力し、又は基調としていた事が、明らかである以上、その立地の低地性は、当然のこととしてうなづかれなければならない。事実、藤岡謙二郎氏によつて語られた如く、日本各地における主要彌生式遺跡の殆んどが、以上を裏書きしていることは、我々のよく知る所であつて、作州に程近い、瀬戸内の諸地方においても、或は、山陰地方においても、暗々明らかな実際である。しかし、この「低地」とは、そもそも、どういう意味を持つてゐるのであらうか?それは單に標高が低いということであろうか?作州における低地とは、一体どこであつたろうか? 我々は、その前に、彌生式文化成立の地形的基礎について考えて見よう。少くとも、自立的には水稻耕作に全く無経験であつたと考えられる人達にとつては、その耕地、というより播種地に、一つの限界があつたということが、考えられる。恐らく彼等にとつては、自然灌漑可能な新成沖積低地=低湿地を、それに求める以外には、進んで灌漑排水の土木工事を行なうなどは、出来なかつたに相違ない。技術的な未熟さと、それに基く社會的な諸條件とは、少くともそのはじめのあいだ、彼等に一定の耕地のみより外に、與えることをしなかつたであろう。通常我々が、遠賀川式の名で呼んでいる、初期彌生式文化の前半の全部の遺跡及び後半の大部分の遺跡は、このことを裏書きするように、一つの地形的環境を同じくする土地に、所在している。その地形的環境とは何かというと、それは、單に標高が低いといつてもそのものでなく、その周辺又は周邊の一部に、自然灌漑可能な、即ち多大の人力=強固な社會的統制力の奔動による灌漑乃至排水などの必要の全く

ない又は、殆んどない温潤な低地—沖積地が、続つているということである。中期・後期の遺跡が、往々山間部に（この作州においてもそうであるように）見出されるのに引きかえ、前期、特にその前半の遺跡の殆どすべてが、この様な地形的環境の中にのみ、見出されることは、こゝでクドクドいうまでもなく、初期農耕社会成立の際の、必然的な現象であつたろう。彼等は、「山高くえ人力の斧を揮う」<sup>3</sup>のには、あまりにも未熟で且つ無経験であつた。作州において数十に達する彌生式遺跡の発見が、確認されているにかゝらず、初期後半の小規模な遺跡を除いては、すべて、中期又は後期彌生式の遺跡であることも、この点から、理解されなければならない。事実、作州には、海岸平野や廣大な盆地平野に見出されるような、自然灌漑可能な低湿地など、その當時においても、殆んど存在しなかつたのにちがいない。その持つ山間地域の特質からして、backmarsh の成立すら、殆ど不可能である。とすると、作州における農耕社会は、如何にして成立したかということになる。作州の山間部地方は、備中備前の平野地方で低湿地に水稻を植えつつあつた時、依然として繩文式の段階であつたのであろうか？言いかえれば第2次的な波及という形で、一度海邊低地における人々によつてダイジエストされたものを、山の人々は、受け入れたのであろうか？はじめ、人々が、沖積平野に初期彌生式文化を残しつつあつた時、依然として山間に居住し、狩獵を行つていた人が、やがて、平地の多くの部分に擴大しつつあつた農耕の文化に刺戟され、その生活を、農耕のそれへと、轉化させていつたのであろうか？しかも彼等は、石器においても、土器においても、

吉備平野、山陰の海岸平野に見出されるものとされて變りのないものを、残している。速賀川式を先行形態として通過しなければ、誕生し得ないような製作・器形文様を有つ、初期末から後期にかけての彌生式土器が、果して山間に狩猟した人々によつて、直ちに、製作され得たであろうか？こゝに問題がある。

## （2）

作州における彌生式遺跡の中、前期前半に屬するものは皆無であり、津山市山北遺跡を除いては、すべて中期から後期にかけてのそれであることは、先に述べた。たとえば、勝田郡岐山扇狀地に夥しく所在する数十の遺跡のすべてが、中期から後期にかけてのそれであることを等。繩文式晩期の遺跡はどうであるか？これまた皆無である。晩期はおろか、繩文式の遺跡自体、確認されているものではなく、僅かに2、<sup>4</sup> 3の土地からその出土が傳えられているのみである。恐らくは100をはるかにこえる、彌生式の遺跡に比べて、あまりに、貧弱である。調査の不備と、一がいに、いえないものがあるのではないか？それに對して、例えは、吉備の内海地方は、どうであつたろうか？そこでは、註記したように、20ヶ所近くを数える繩文式晩期の遺跡が、當時廣大な干潟を眼前に展開させたに遙かない丘陵段傾斜面乃至丘端麓上に、立地している。そして、その間に、前期の彌生式遺跡が、暗々同様な立地をもつて、点在している。このような現象は、單に、兩備・美作地方のみの現象ではない。その他の内海地方、山陰・北九州・畿内等の諸地方においても、微細なちがいは存しようとも、畧々同じ状況であつたことが、考へられる。即ち、繩文式晩期の遺跡も、彌生式初期の遺跡も、地

方々の特性は存するけれども、その集落立地において尚それをこえて、それぞれ一つの共通性を有つていることが、考えられる。

これらの材料から、作州の山間地域における農耕社会の、成立をどのように考えることが出来るであろうか？極めて大膽な考え方かも知れないが、一つの試考として、次のように考えることは、出来ないであろうか？<sup>19</sup> 繩文式晩期の時期において、作州山間地方、（これは必ずしも作州のみでなく、備中備前の大深い山中であつてもよい）には、人々は定住的な居を、かまえていかつた。集団は殆んどすべて、海岸平地の縁邊、山の幸と海の幸とを共にとり入れることが出来る地域に、居を占めていたのではなかろうか？漸進的にではあつても、徐々に進行した繩文式社会の進歩は、その集落立地を、より生産性の豊かな土地と、絶えず向けていくに、相違ない。その間の事情は、今は觸れないとしてとにかく、その最末期に至つて、新しい文化の刺戟の下に、人々は、附近一帯に生成しつつあつた地形的な基礎（=新成沖積地における自然灌漑可能な低湿地の誕生）に巧みに適応し、直ちに稻作の技術を、獲得していくに違いない。その場合、同様な生産技術、同じ社会体制、加えて同様な地形的環境の下において、或る集団=集落のみが、長時間に亘り、果して依然たる生活を、繼續し得たであろうか？備中備前等内海の縁邊に居を占めていた彼等は、絶対時間の若干のズレはあつたであろうが、昇々一齊に、稻作及びそれに随伴する耕種の技術を、獲得して行つたに違いない。<sup>20</sup>

繩文式末期から、創生式の時代にかけて、海退と共に河川による沖積化は、可成りの勢

で進み、處々に湿润な低地を、形成していくのである。<sup>21</sup> 最初期農耕民にとつては、附近に生成しつつあつた所の、灌漑も干拓も必要としない耕地、即ち繰り返し述べた自然的灌漑可能な土地を、その耕地として求めざるを得なかつたであろう。彼等の社会的條件は、彼等に、このような形態の耕地を、もたらした。しかし、それが如何に、貧弱なものであつたろうと、ここから創生式文化の新しい前進は、開始される。経験の蓄積と技術の進歩は、徐々とではあつたが、前代と比べて格段の急テンポを有つて進行した。沖積化は徐々と進行し、次々と湿润な土地（その多くが、backmarsh という形で）を生み出して行つたであろう。社会は前代に比して、その相對的安定と共に、著しく内部的に、増大を遂げて行つたに違いない。耕地は、地形的な基礎の新たなる提供と漸次行われはじめた技術の発展とによつて、徐々と増加していくであらう。

しかしその限界は、あくまで厳然と存在していた。彼等の漸くにして達し得た社会の能力…その技術的経験と社会的体制…條件…において、その耕地は、著しく限界されなければならなかつた。それにもかかわらず、彼等は発展し、前進をねばならなかつた。貧弱な体制の下に、低平地に横に擴がつて行く努力を懸命に試みたと共に初期農耕民は、ようやくにして、新しい價值=土地を見出した。沖積平野に形成された自然灌漑可能な湿润地以外に、彼等にとって、残された所は、ただ一つであり、それは、山と山との、丘陵と丘陵との間の谷、谷頭利用の耕地であつた。<sup>22</sup> 彼等が、ようやくにして発見したのは、これであつたにちがいない。收穫量の点にお

いて、低湿地に比べて格段の差は、あつたであろうが、僅かの能力によつて、容易に、しかも、至るところに求めることが出来る。谷間に流れる水（小川である場合も、湧水である場合もあるであろう）は、水温が極度に冷寒である場合を除いて、多少の労力によつて灌漑水に轉化する。平地に灌漑するとは、話にならぬほどの小さな労力をもつて、多少の堰を設ければ、更に好条件に恵まれたであろう。現在至る所の山間に見られる谷頭利用の段々式の水田は、それとして完成された姿である。先づ、低平地周辺において試みられたと考えられるこの形態の耕地は、増大しつつあつた人口の一帯と共に、漸次に河川を通り「山高き」方向へ、擴つていつたものであろう。我々が、作州において、山間や、開拓扇状地帯に見出す初期末乃至中期初頭以降の彌生式の集落は、このようにして、誕生していつたものと、考えられる。成程、それは森本氏の云ふ様に「ネガティーヴ」であるかも知れない。<sup>15</sup>しかし、それは、貧弱な社会の發展段階において、地形的な制約を受けつつ、彼等の到達した必然の方向でもあつたのではないかろうか？ 主として、吉井川と旭川にそつて、北上していつた彌生式の集落は、藤山・那岐山の山麓に、津山盆地の縁辺に、勝間田・林野附近の丘陵に、久世・落合・勝山の谷頭に、次第次第と擴がつていつた。

### -(3)

このようにして、誕生していつたと考えられる作州の初期農耕社会は、その有つ自然的環境の劣悪さというハンディキャップの下にも尚内海・山陰の諸地域におけると同様、より確固とした社会の体制へ向つて、より大いなる政治的社會へ向つて、擴大發展していく

た。貧しい谷頭水田を耕作する人々の間にも何時しか、銅鐸が、現われるようすになつた。<sup>16</sup>そこには、銅鐸を獲得し得るほどの「豊かさ」と社会的な要求とが、生じていた。鉱長剣が、急速に伸展しはじつた。稻作の技術も、種々の他の技術と共に、着々と、蓄積する経験に、増われていつた。現在の知見では、この当時、作州における先進的な地域はむしろ那岐山、藤山等の、無数の谷とゆるやかにのびる丘陵とを抱いた扇状地であつたようと思われる。河川の合流する津山盆地の中心部は、一つのウシルタヌーであつたかを知れない。

しかし間もなく、様相は、徐々に變つてくる。彼等の社会的條件の發展と共に、集団と集団との間に、地域地域をめぐつての、激しい競争が、ようやくにして、行はれはじつたにちがいない。そして、その絶えざる過程の内に、より大なる地域集団→政治的社會が誕生してゆく。そこにはまた、他の地方からする、激しい壓力も加つたであろう。大和を中心とする畿内の「集團」と、北九州のそれとの間に存在して、たとえそれが山間地域であつたとも、その政治的成长には、見るべきものがわかつたであろう。一方、生産技術は着々と進歩をとげ、それに相應して発達していく社会的諸條件とマツチして、著しい生産力の飛躍が、なされたことであろう。即ち、今まで、谷頭を主として耕作していた人々にとつて、平地→盆地が、斬られた耕地として重大な意味を、持つて來た。山間に開けた僅かな平地、津山周辺の小さな盆地平野、それは、たとえ方一里にも満たないものであつても、狭小な谷頭とは比べることの出来ない豊かさを、持つたことが、考えられる。内海地

方においては、平野のと眞中に、後期製造式の大集落が、どしどしと、進出している。技術の進展と究極にはそれに基く社会の発展とが、前提されなければ、考えることは出来ない。作州においても、傾斜地の多い山間地方のこととて、灌溉の技術の進歩と共に、可成りの池の築堤すらも、はじめられたかも知れない。盆地内の平地の耕地化は、幾多の政治的な諸條件とからみ合いつつ、谷頭利用の耕地を、壘倒させる力を、生み出していった。

小河川がそぞろに、そこに小さい乍らも幾多の流域平野と小盆地とに恵まれた津山盆地が、ようやくにして、大きく、歴史の舞台に、浮き上つて來た。平野に恵まれない作州の中心的な存在として、その雄姿を、示してきた。ぐいぐいと、強力な政治的の社会が、そこに成長して來たことは、当然である。直接間接の大和國家の壓力と影響との下に、やがて、その社会の「有力者」の間に、奥津城としての古墳を營造する風習=必要が、擴がつていつたであろう。津山盆地の眞の歴史は、ここから始まる。

## 註

- 1) 森本六助『弥生式文化』「ドルメン」4號6号89頁 1935年。
- 2) 須崎謙二郎『地盤と古代文化』第4章第2節 1946年。
- 3) 森本六助 同上 98頁。
- 4) 最近発見された遺跡で、津山市山北一丁目にある。球状円筒式土器小部の数個が出土している。從而附近からは、他に中期後期の弥生式土器及び石沼類が、何處か採集されている。(齊藤安夫氏蔵)
- 5) この点、西本浦二氏の教示を得た。
- 6) 那岐山地形状地の一帶である勝田郡豊郷村、幾

田村、北山内村の3村において、日本原産豆茶の手で、現在3ヶ所の弥生式遺跡が、発見されている。近くは田畠地帯によつて、その詳細が、発表される予定である。資料使用に際しての好意を、深く感謝する。

### 7) 勝田郡一宮村中山神社

吉庭御美和利余の上

吉庭御美和村日本

吉庭御河東村四限

以上鐵木良氏の教示によるが、なお、開氏によれば、前3者は、水野吉太郎氏の資料で、遺跡のはつきりした所在地點は、不明のようである。最後者の複数は、鐵木氏が採集しており、中津式七割1片のみである。開氏の教示に感謝する。なお、「日本原石器時代地名表」(新編)の野村敏太郎「日本社會經濟史」第1卷等に所載の「樂樂(奈良時代遺跡)」は弥生式遺跡又は、作州特産の埴輪陶(瓦石器)の発見地である。稿成後、落合義高(吉庭御河東村)において吉庭御河東村山崎山高校周辺内出土と伝えられる縄文式後期の土器一片に接することができたので、別記附する。

### 8) 「縄文式鉄器」に因する土器を出土している遺跡を列挙すれば、次の通りである。

この点に向て、鐵木良氏の教示にまつたところが多い。

岡山県久米郡太田村大字酒窓 黒和賀塚

岡山県邑久郡牛之瀬町大字美島 黃鳥貝塚

岡山県上道郡浮田野村大字南 貝殻墓塚

岡山県上道郡角山村竹原 下竹原貝塚

岡山県邑久郡吹田村東横江 細縄貝塚

岡山県児島郡御前田町古城 古城貝塚

岡山県都窪郡御前町大内田 宮後貝塚

岡山県都窪郡御前町八幡 墓地貝塚

岡山県都窪郡御前町屋守 中津貝塚

岡山県都窪郡人島村西人島 雄琴貝塚

岡山県小豆郡神島外村高島 黒土遺跡

岡山県小豆郡神島外村高島 王泊御跡

香川県小豆郡舞鶴村 沙子瀬遺跡

香川県小豆郡舞鶴村 伊藤木遺跡

これらのお跡は、その大部分が貝塚遺跡であることをから察測されるように、その多くが、標高10m以下4.5mの低地に立地し、附近一帯に広くやがて被覆化される父は沖積化されつつあつた土地を望んで、営なされている。

### 9) 九州では今、誇張なデータがないけれども、縄文式銅器土器の出土する遺跡の発見は逐次報ぜられており、その何れも低平地又はその近くに造出していることが、知られている。最新の

出版にかかる「北九州古文化図鑑」第1編解説書[1]によれば、曉原の先形土器を出土している筑前国遠賀郡中間町近井野字下大張の遺跡は「遠賀川と木床の荒地に広く遺物の散布を見る。有名な立張敷造跡（ここからも遠賀川式弥生式土器に混じて縄文式陶器の片手片の土器片が検出されている。←近藤）の上流である。」とし、更に松浦川流域の低平地に立地する「肥前東松浦郡久里村柏崎貝塚においては遠賀川式土器に伴う筒形（鹿井野の土器と同形←近藤）のものがあり……。傑出したつばの土器の破片は、遠賀川式土器の追跡で既存方面での類例があるので、北九州では弥生文化系の実況問題の解決の鍵となるものゝ一つであろう」と述べており、特に、弥生式初期の遺跡と推定している箇所の強い点が、むしろ注目される。山陰地方の縄文式遺跡は、一般に、低地又はその周辺に発見されることが多く、中には河床底に見出されることも少くない。曉原のはつきりした遺跡は比較的少ないが、松江市法吉町遺跡や米子市日置遺跡等にみられるように、何れも現海岸線に近い低平地（西伊豆外江町西瀬遺跡などは海岸底にある）に立地して、これまた、弥生式初期の遺跡と直視していることが多い。（法吉日置の各遺跡から、遠賀川式土器が出土している。）近畿においては、若干事情が異なるが、河内下貝塚・紀伊鷹神貝塚にしても、前者は「河内平野の低地に移らんとする……谷口崩壊状地の末端部を、聚落立地として利用し」後者は「篠原川低地に接する畠山の低い丘陵間に立地」しており、近江遺寶坐遺跡は、現摂取湖水間より比高数mの低地に存在し、岡山郡山田町杉沢遺跡は、伊吹山南麓面下に発達している谷口崩壊状地の末端部附近に立地し、更に大須賀原遺跡は標高にしては高位であるけれども、盆地床との比高20m強、奈良盆地南部の沖積平地を一帯にのぞむ低い丘陵の末端部に位置している。有名な諸古遺跡から、曉明に属すと考えら

れる縄文式土器が出土していることは、衆別の事柄である。貴重遺跡等の1、2の例外とも云うべきものを除いて、縄文式晩期に属すると考えられる遺跡の殆んどは、低平地又は低平地に臨む丘陵端乃至崩壊地盤に立地していることが、考案される。

「北九州古文化図鑑」第1編解説書[1]（1950年）

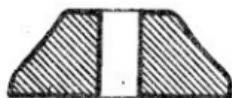
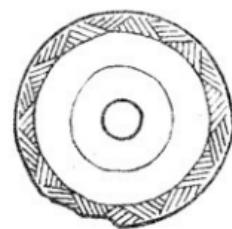
藤岡謙二郎「地理と古代文化」85頁88回

小林・藤岡・中村「近江國坂田郡照村杉沢遺跡」『考古学』9卷5号：1938年

末永雅雄「官衙の遺跡」1944年

山陰に関しては、佐々木康氏に負う所が大である。

- 10) この問題に向っては、瀬戸内海総合研究会個人研究テーマとして、別に他の形で發表の予定である。
- 11) 藤岡謙二郎「前略」第4章第2節。
- 12) かくして弥生文化の急テンポな歴史、北九州から瀬戸内・山陰・畿内・伊勢湾に亘る該地方の弥生式文化の急速な転換は、より具体的に理解されるであろう。
- 13) 藤岡「前略」第4章第2節。
- 14) いわゆる「谷底水田」に関しては、岡田大母講「五百石塚氏の表示」による所が大である。
- 15) 齋本六朝「前略」83頁。
- 16) 挿稿（大作型須月村金佐屋出土の剣狀）「吉備考古」83号。
- 17) 弥生式後期の頃になると、貝塚遺跡の數が、相対的にも劇的に減少して、前期中期には見られなかつた大規模な集落…………例えば、岡山県在芦原郡庄村上東一一中島遺跡、岡山市上伊福遺跡など…………が、平野の中に、主として河川による自然堤防をその立地として利用しながら、出現してくる。距離は遠くなっているが、勝利県鹽山遺跡においても見られるような、耕地といふものに對する積極的な設備と工作が、当然考えられてよいのであろう。



— 2 cm —

カット4 寺山1号墳採集 紋鏡形石製品 (cut 4)

## C 各 古 墳 の 素 様

舊「佐良山村」にあるから、單純に佐良山古墳群といふのではなく、この地域は、先にその地形を概観した様に北は吉井川、東は神奈備山……（地形圖には佐良山と記されている）笠山……高鉢の蓮山、西は嵯峨山山塊、大平連山、南は大平連山と高鉢山の蓮山とが溪谷をなしている地帶、という具合に、それぞれ四方において、一應他と切りはなされた単位地域を、なしている。この単位地域内に在る古墳を、總稱して、佐良山古墳群と呼んだのである。であるから、僅少な例であるが、行政的単位である「佐良山村」に屬していない古墳も、当然含まれた。

本項では、一つの基礎史料として、この地域内に管轄された、退屈になる程の衆の古墳について、一基一基の状況を、記載してゆく。便宜上、地形に従つて4つの地域に大別し、更にそれぞれを幾つかの群に、必要に応じて更に細群に、分けて見た。元來、どの古墳から、どの古墳までが、××古墳群、山の裡にあるから、××古墳群と定めることは、嚴密には甚だ模倣の薄いことがあるが、それが記述の便宜に加えて、多かれ少かれ、実際の一面对して示しているので、ここにおいても、舊例にならつて、一應一つの案として、下のように分けることにした。

神奈備山四方地城（神奈備山古墳群）	65基
1. 方古墳群	11基
A群	7基
B群	4基
2. 寺山古墳群	8基
A群	5基
B群	1基
C群	2基

3. 門の山古墳群	13基
4. 鶴嶺附近古墳群	8基
5. 守屋山古墳群	18基
6. カキ谷古墳群	7基
A群	4基
B群	3基
鷲山東面地城（鷲山東西古墳群）	30基
7. 鷲山東面古墳群	30基
鷲山東面山腰南北面地城（鷲山古墳群）	50基
8. 鹿籠美古墳群	13基
A群	2基
B群	11基
9. 鶴ノ古墳群	28基
A丸山古墳群	2基
B中宮古墳群	8基
C高根山根古墳群	4基
D鶴戸古墳群	14基
10. 小屋谷古墳群	5基
11. 孤立古墳群	4基
大平山東面地城（大平山東面古墳群）	23基
12. 老林古墳群	7基
13. 三ツ塚古墳群	9基
14. その他	7基
計	1686

## 神奈備山古墳群

數的にいえば、最大の古墳密集地帯であり、その大多数が、寺池及び市場川附近の、複雑に入りこんでいる谷頭水田に面する斜面又はそれを見下ろす台地上に、立地している。しかし、また、神奈備山塊北面の山腹、山頂上、あるいは、市場川の狹小な溪谷地帯に、点々と存しているなど、先に述べたように、更により小単位の、しかしより特色の鮮明な幾つかの古墳群の集合によつて成立している。

## 一方古墳群

神奈備山塊西側の北端の、山麓、山腹、山頂に、点在する古墳を、ここで一括して、假に一方古墳と呼んだ。此等はすべて、所調佐良山の狹小な低地帯には所せず、舊津山市内方面に而して、營造されていることが、特徴的である。從つて恐らく、これらの墳墓は、佐良山の狹小な平地に、居を構えた人々の奥津城といふより、むしろその住む方向が示す地域の人々によつて、營造されたものと推定されるかも知れない。筑築の伎錠と被葬者の所屬していた集落乃至土地一整地との関係については、後に若干觸れる推定である。記述の便宜上、一方古墳群を、更にA群及びB群に、分けて見た。第1号墳から第7号墳までは、A群に属し、井口より竪に向つて上る道路周辺に所在する。第8号墳から第11号墳までは、B群に属し、大下の部落裏附近から、谷沿いに、南に覺りつめる山腰にそつて所在する。第何号墳の数字は原則として山麓から山頂へ向つて順次付せられてゐる。( ) 内の数字は古墳連續番号。

### A群。

第1号墳。(1) (一方) 亂川右岸河道に而して、山麓の長方寺の竹林中に、所在するが、今その封土のすべては、ハカイ消失し去つておりその形態規模は、全く不明である。同じくハカイされた残骸をとどめている横穴式石室は、天井石などの殆どを、散失しているが、壁下部は、比較的よく残つており、細長い玄室を持ち、襖道が片袖式に作り出され、北々東に開口したものであることを、示してゐる。現存石室長 5・16m 支室巾 1・2m 美道巾 0・85m を測る。奥壁に近く、右側壁に沿つて、土師燒龜甲型の陶棺が、安置されていた

ものので、現在棺半身のみが、原位置と考えられる個所に存在しているほか、その蓋身の残片が多く散乱している。陥棺は、半身の長さ 1・05m 高さ 0・7m 内底巾 0・62m を測る。

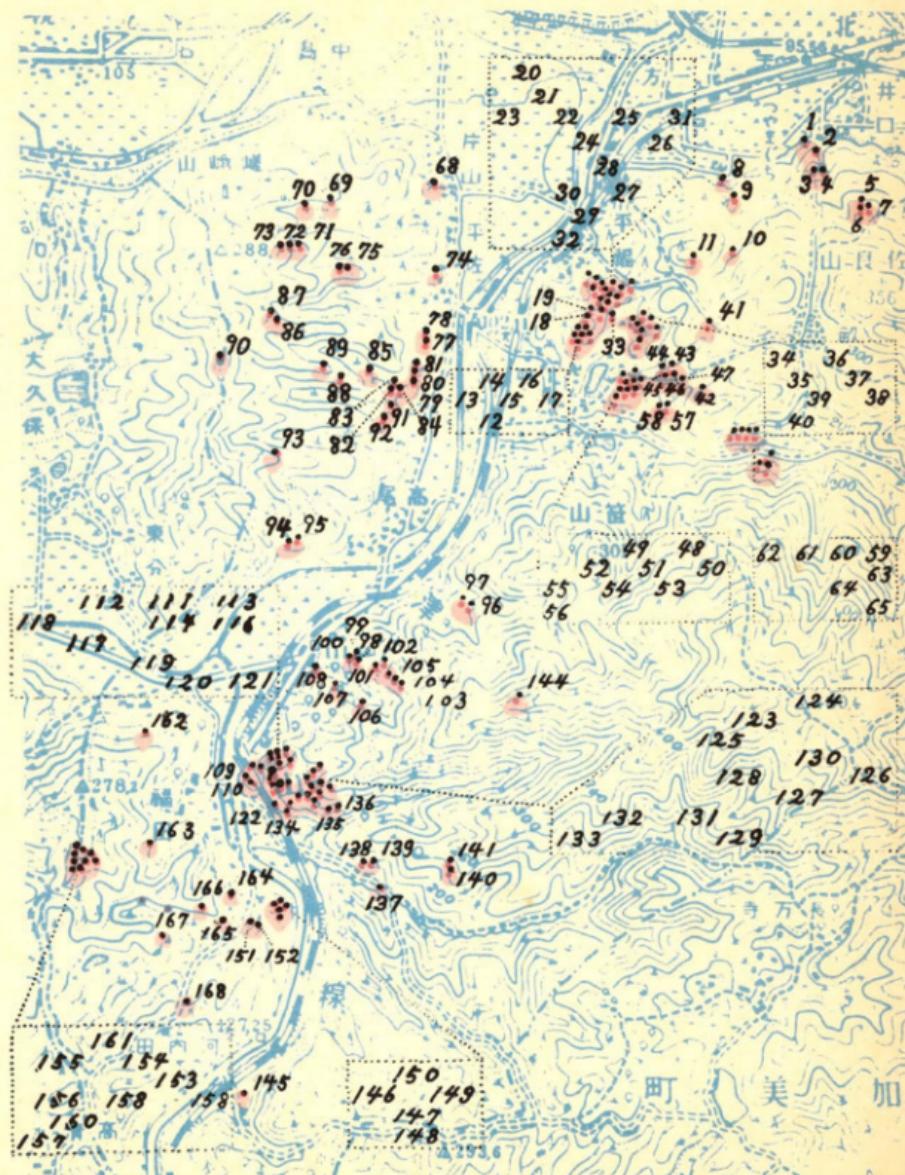
第2号墳。(2) (一方) 1号よりやや上つた斜面に、所存する。封土殆ど流出して、徑その他不明であるが、小円墳と推定される。今、奥壁を含む石室の一部が残る。北東方向へ開口した横穴式石室で、内部に土師燒陶棺片が僅かに残存している。

第3号墳。(3) (一方) 2号より更に上方の斜面にある。道路工事によつて、中央部の大部切断。今、道の両側に、僅かに封土を残している。推定径 10・4m 高約 2m 程の小円墳。石室はハカイ消失しているが、若干の尺大の割り石が、残存封土内に、認められる。

第4号墳。(4) (一方) 3号に隣接して存したましく、今、ハカイ消失して全く不明。(近藤保氏教示)

第5号墳。(5) (一方) 5号-6号-7号は、井口……畠頂道路の東側にある標高 240m 前後の台状をなし頂部に、所在したと、いわれる類(近藤保氏)で、今、その跡形らしい石材、土器片が散見されるのみである。5号は、その台頂部の中央辺に所在したものと、推定され、現にその部が、周囲より、やや高まりを見せていることが、注意される。頂部一帯の開口コンの折、ハカイされたものであろう。今附近に、横穴式石室の構造を想わせるような板状の割り石が、無数に散乱している。因みに、この地は、津山盆地の大部分を、一望することが出来る絶好の場所である。

第6号墳。(6) (一方) 台頂部の東側に位置し



第 2 図

佐賀山古墳群分布図 (Fig. 2)

数字…古墳番号。併し、66・67・142・143は欠番

同じく開墾のために、ハカイされたものらしい。封土の骨つて存在した様が、僅かに認められる。近藤保氏によれば、ハカイの折土師焼の陶棺が、出土したといふ。附近に土師器散見。

第7号墳。(7) (一方) 6号に隣接して所在し、同じく、ハカイ消失したと稱せられてゐるが、現在封土の痕跡は、全く見られない。近藤氏によれば、ハカイの折、石室(?)が、あつた由。今、廻溝に若干の割り石、附近に土師片散見。

### B 群。

第8号墳。(8) (一方) 山麓斜面上に、位置する円墳で、道路工事によつて、中央及び北側の封土が、ハカイ除去されている。推定徑(以下推徴)10m 推定高(以下推高)2.0mの小墳。石室もハカイ消失して、今若干の石材を残すのみ。山田清之氏の調べによれば、ハカイの際、陶棺、鉢器、土器が、出土した由。第9号墳。(9) (一方) 8号の上方、谷間斜面上の山林中に所在する円墳で、徑約12~13m、推高2.5m。墳頂はハカイ除去され、横穴式石室天井石と推定される巨石の一部が、露出。

第10号墳。(10) (一方) 更に高位の、峰に近くなつて、近東方の山林中斜面に所在する。封土は、完全に消失しているが、石室から見て小墳と推定される。石室は、横穴式で、これまた、ハカイされ、天井石2枚と、側壁の一部とが、残存。現存長4.8m。西北に開口している。

第11号墳。(11) (一方) 峰附近の斜面に所在し、開コンによつて、ハカイ消失したもの。附近に、石材散乱し、もと横穴式石室があつたことを、想像させる。又、附近に土師焼陶

片が、散見される。

### 寺山古墳群

大字皿小字寺山に屬し、寺池の北側にあたる、なだらかな尾根がある。神奈備山塊が、西方に向つて、ずっと下降し、この寺池北側で、僅かに高まつてゐるが、(標高180m比高80m)、それは再び長昌寺の方向(略々南方)にむけて、徐々に低くなり、皿の水田に連結する。寺山古墳群は、この標高180mの寺山附近から、南々西面にかけての、なだらかな山腹に所在する。1952年度から、この地の開墾が始まり、豊潤な果樹園となる日も近いが、朝日夕日をその全面に浴びるこの地は、往昔、奥津城の地としても、いち早く選定されたに違ひなく、現に、所在する8基の古墳の内、2基は、略々確實に、他の2基も恐らく、堅穴式石室を、その内部構造としていることが、考えられる。立地及び構造から上の8基を、更に、ABCの3グループに、分けて記述しよう。

### A 群。

第1号墳。(12)(皿・市場寺谷) 8基内、最下位に位置する円墳で、その徑約14.0m 高約3mを数える。墳頂には、ハカイ痕があり、石室の一部が、露呈している。明らかに堅穴式石室の割をとり、その横は、粗雑ではあるが薄い板状の割り石で、構築されている。蓋石は、それらしい一二を除いては、附近に見出されないが、ハカイされた側壁は、頂部に散乱している。石室の主軸は、略々東西である。尚石室内の土中から、山田英輔君によつて、紡錘車型石製模造品(滑石製)が1個発見されているほか、墳頂に、蓋部式土器の細片が、若干散見される。

第2号墳。(13) (山・市場寺谷) 1号の西北側約3mの前に所在する2号墳は、徑約12.5m高約3mを測る円墳で、同じく埴頂が、大きくハカイされ、その底に、石室の極小部分が管見される。石材の多くは、散乱しているが、堅穴式石室の制をとるものと、考えられ、その主軸は、東西の方向。壁材は、1号のそれに比して、更に粗雑な割り石で、必ずしも板状を呈するものではなく、通常の塊状割り石を、可成り使用している。埴下から、石製の丸玉1個、埴頂のハカイ痕から、有柄尖根式の鐵鋤瘦片が、拾集されている。

第3号墳。(14) (山・市場寺谷) 前二者よりやや大きな円墳で、より北側の、少し高位に立地する。徑約14.1m 高約3.5mを測る。頂部には、東南から西北にかけての長方形のハカイ痕があり、石材が、若干散見される。石材その他からして、堅穴式石室と推定される。

第4号墳。(15) (山・市場寺谷) 寺池上古墳群中最大のもので、3号の京側跡をへだてて所在する円墳である。その徑約20m 高約6mを算える堂々たるものであるが、前3者と同様、埴頂に、ハカイ印が十文字に開き、石材若干が、散乱している。しかし全場は、していないらしい。石柱からみて、恐らく、堅穴式石室と推定される。

第5号墳。(16) (山・市場寺谷) 3号の北側にある徑約11.4m 高2.5~3mの円墳で、埴頂にハカイ痕があり、恐らく、堅穴式石室かと考えられる石室も、ハカイされている。

今、石室は、ハカイ部に、大きく被上をうけているので、判然とはしないが、東西に主軸を持つ、全长推定2.5m位と考えられる。蓋石の一部と思われる石材が、埴下に落してい

る。以上1号から5号までは、すべて、同じ傾斜面上に集団的に立地し、塗堀痕及びその結果現われている壁又は石材が、堅穴式石室を、確認又は想定させるなど、一連の共通性を有しているので、一つのグループとして、充分に取扱い得るであろう。佐良山古墳群中に現在見出される、唯一の比較的はつまれした堅穴式石室群であることは、注目されて然るべきもので、1952年度に、再調査が、豫定されている。

#### B 群。

第6号墳。(17) (山・市場寺谷) 4号の南東側に所在する。埴頂の封土の殆どが消失し、形体不明であるが、推定徑約9.0mの小形と、考えられる。今、横穴式石室の構造を想わせる2m角位の巨石が一ヶ隠出している。八瓣に接して、横穴式石室が、一基のみぼつんと存在するとすると、いささか奇異な現象と云ふねばならないが、との6号は、少くとも、我々の觀察の範囲では、堅穴式を示す何物も、認められていない。再調査を要するであろう。(稿成直前、ほかに4基の古墳が発見された。)

#### C 群。

第7号墳。(18) (山・市場寺谷) 第8号墳と共に、先の6基よりずつと離れた寺山の最高所附近に所在する。徑6.0m高0.5mに満たない小円墳で、埴頂にハカイ痕がある。石室の有無は不明であるが、埴上から、ガラス製の薄コバルト色を呈する丸玉及び鉄製刀子が、発見されている。

第8号墳。(19) (山・市場寺谷) 第7号と並んでその北側に位置する徑6.7m 高1m前後の小円墳で、處女墳と推定される。立地形状からして、7号と同様な類と考えられるの

で、この2基を合して、C群とした。

## 門の山古墳群

神奈備山塊の西端に近く、寺山古墳群と東に浅い谷一つへだつた、北西方向へ舌狀にのびる一支脈の尾根部にあたる極めて緩傾斜の舌狀部に所在する古墳を、假に、門の山古墳群と呼び、更に、その附近に所在する若干の古墳をも、便宜上同一群として、これに加えた。現在13基が、認められるが、内9基は舌狀台上に、3基は寺山との間の軸部に、他の1基はそれと反対側の尾根部に、立地する。軸部に立地する1基(第13号)を除いては、何れも大同小異の大きさ高さ形状を有つ小円墳が殆どで、その内部主体も、單なる推定ではあるが、横穴式のそれを示すとは思われず、むしろ、今回の発掘にかかる第1号墳に見た式の箱式棺であろうと、考えられる。約100m程の間に点在する。尚、第×号墳の番号は、おむね、舌狀部突端附近からはじめて、東南方向へ、順次附せられている。

第1号墳。(20)(平福・門の山) 発掘調査報告(後章) 参照。

第2号墳。(21)(平福・門の山) 1号から約10數mはなれて所在する。封土が著しく流失しているので、形状不明であるが、推定約8・5m程の小円墳であろう。高さは甚しく低い。内部構造は不明である。

第3号墳。(22)(平福門の山) 2号より10數m東南に所在する小墳で、これまた流土のため、墳形明瞭でなく、円墳かどうか不明。大きさは2号と略々同じ位で、高さ0・5m前後、處女墳と推定される。

第4号墳。(23)(平福・門の山) 3号の西南數mの側所に位置する徑約11・0m高さ2・5mの

小円墳。處女墳と推定されるが、石室のそれと寄せられる石材の一剖が、墳頂に、露頭している。

第5号墳。(24)(平福・門の山) 3号の東南側にあたる小円墳で、墳頂の封土は、可成り流出している。現在徑約9・3m高約1・2mを測る。盗掘によるものか、封土流出によるものか、石材(箱式棺と推定)の一剖が、露呈している。

第6号墳。(25)(平福・門の山) 舌狀部の東北側面に位置する、徑約9m高さ2~2・5mの小円墳で、未発掘と推定される。

第7号墳。(26)(平福・門の山) 赤~血斑路端に所在する 徑約10m 高約2~1・8mの小円墳で、封土の一部は、ハカイされているが處女墳と推定される。

第7号墳。(27)(平福・門の山) 舌狀部の西南面に位置する8号墳は、封土の多くが流失し形状定かではないが、徑約10mに満たない小円墳であろう。

第8号墳。(28)(平福・門の山) 8号の約10m西北に所在し、徑約8・0m 高約1・5mを測る。比較的保存のよい小円墳で、未発掘と推定。

第10号墳。(29)(皿・寺谷) 舌狀部の西側軸部に位置する完全な円墳で、徑約14m 高(斜面下方から測れば) 2m(斜面上方から測れば) 1m程度を、数える。谷を下降する猛のため、極く一部分が除去されているほか、完存している。

第11号墳。(30)(皿・寺谷) 10号に隣接して下方に所在する。推定約8・0m 高1・5mを測る小墳、内部構造は、不明であるが、ハカイ痕らしきものが、認められ、又、石材の一剖が、墳下に轉落している。この11号及び、前の10号は、軸部に所在するとはいえ、先の

1号～9号までの類と共に1グループと考えてよいであろう。

第12号墳。（31）（皿・寺谷） 舌沢郷東側の尾根に所在する。径8.4m 高1.5mの小円墳で、埴頂の一部が、ハカイされているが、内部主体の盗掘は、行われていないようである。

第13号墳。（32）（皿・寺谷） 10号の東西間にあたる同じ谷の、寺池上山側にある13号は、封土石室共に徹底的にハカイされて、現在僅かに、石室の一部（1m角の割り石若下）が残存しているのみである。墳丘の推定径12～13m

#### 豊嶽附近古墳群

古墳群と稱される程、まとまつた位置に所在するのではないが、寺池北方の谷傾斜面に位置する古墳を、總稱した。この谷傾斜面は古くから開墾が行はれ、水田化している部分が多く、從つて、若干の古墳は、ハカイ消失しているのではないかと、想像される。現在僅かに見出される古墳の殆んども、ハカイ又は盜掘によつて、大きく変形しているのが特徴的である。又、門の山、寺池上の古墳群と異つた立地を示し……山顛や尾根ではなく、谷頭を抱く傾斜面上である……で、古墳自体の様相も、可成り相異を、見せてゐる。尙、曾つて、多くの人々が、巨大な石室を持つ古墳として、注目していた所謂豊嶽古墳は、その現存する主要なる3基を点検した結果、それら3ヶとも、少くとも古墳の原形を、示すものでないという結論に、達した。又、既述のように、この谷傾斜面の北西部にあたる一部（第1号墳附近）からは、石庖丁及び鍬生式後期土器片の出土が、確認され

ている。

第1号墳。（33）（皿・寺谷） この谷傾斜面西北部にあたる南東斜面の草地に所在したこの古墳は1951年春、道路工事のため、ハカイされたことによつて、はじめて、發見されたもので、現在、封土の悉くが、消失しているため形状規模は全く不明であるが、村民の言や、附近地形を併せ考へて、低小な円墳であつたことが、想像される。石室は、横穴式石室で南々西に開口と推定される。今、奥壁一枚を残すのみ。ハカイの折、祝部式土器若干が、出土したとのことであるが、豊嶽の住人山崎氏が、壺形1個を所蔵しているのみで、他は、不明である。

第2号墳。（34）（皿・寺谷） 谷頭水田が、北方につくる所の中央附近に、次の3号と共に2基並んで存在する。墳形は、定かではないが、恐らく小円墳と推定される。南西水田に向する部分は、ハカイされている。内部主体は不明。

第3号墳。（35）（皿・寺谷） 2号の南隣に所在する。2号と夥々同じ状況。墳形、内部主体は不明。小墳。

第4号墳。（36）（皿・寺谷） 2号3号の東北側に所在する小円墳で、径4.7m 高約2.0mを測る。完好に保存され、虜女墳と推定される。

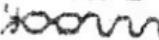
第5号墳。（37）（皿・寺谷） 2号3号の東方敷10mの南傾斜の山林中に所在する。現在甚しくハカイされて、封土全く残存せず、石室も亦ハカイされ、石材が散乱している。石材の其合からして、確實に、横穴式石室と推定される。斜面の方向から考へて、西南に開口していたものと推定される。尙、石材にまちつて、陶器が、1個体分、粉々になつて散見された。先の山崎氏によれば、こゝから

水晶製鏡子玉、勾玉、がらす製鏡工等が、採集されたとのことである。

第6号墳。(38)(皿・寺谷) 谷の東北端の北々西斜面の山林中に整造されている。その一部がハカイ除去されている上、墳形が、著しく變形しているらしい。今回調査を試みたが、中止した。その折、象形ハニワの残片及び、円筒ハニワの鏡片が、検出されている。墳径約11m、高さ3mを測る。

第7号墳。(39)(皿・寺谷) 2号・3号の南面の水田中に所在し、今、横穴式石室の天井部の石材を示す巨石のみが、残存する。

第8号墳。(40)(皿・寺谷) 6号から、西方に3~40mへだつた水田中に、石室のみ取り残されて存在する。封土は全く不明である。石室は、横穴式石室で、南々西に開口する。入口(といつても或る程度ハカイされているが)の巾約1.4m。蓋板が行はれ、陶棺が、入口附近に、残片となつて、散見される。残片からの判断であるが、少くとも、2棺が、安置されていたらしい。何れも土師焼のそれであることは、他と同様であるが、その内1棺は、縁とりの隆起帶の一帯に、羽状文が画かれており、更に他の1棺は、



の形を示す一單位の聖押文様が、その身部一帯にやゝ秩序を以つて、押捺されているという、極めて特異な文様で、飾られている。その大形破片は、今、吉備考古館に收藏されている。

### 寺池東古墳群

寺山附近一帯の地域と相対し、寺池北方谷斜面上の水田地帯を、はさむように、畠集落の通りから漸次下降しつゝ伸びている、神奈備山塊の支脈があり、その山嶺薄いに、歛か

り寺池東面え進する山岳が、聞かれている。この支脈(といつても、下階するに従い、幾つかに分岐していることは、勿論である)の標高200m附近から寺池へかけての山頂及び南側面にかけて、10数基の古墳が、見出される。假に今、寺池東古墳群と呼稱し、一括して取扱うことにする。以下大体において、標高の高低の順に、記述してゆくこととする。

第1号墳。(41)(皿・奥) 標高200m程の谷頭の山林中に存在する。現在完全に消失し附近に石塁の石材が、多數散見されるのみである。

第2号墳。(42)(皿・城平) これは、上記支脈の南側の、別の支脈上に位置する古墳で古地上となつた廻所の廻中に所在する。墳形は定かではないが、横穴式石室が露呈している。

内部は、土が充満しているため、測定不可能である。(近藤保氏教示)

第3号墳。(43)(皿・奥) 支脈の標高180m強の尾根部山林中に、位置する円墳で、その径15m、高約2m(最高4m)を、算える。墳頂は、大きくハカイされ、北に開口する横穴式石室を露呈している。石室の天井石及び側壁の一部は、ハカイ消失している。羨道がハカイ消失しているため、はつきりしない点があるが、玄室の推定長は5.0m、巾は1.8m。

第4号墳。(44)(皿・奥) 3号の西側数mの同じ立地に位置する円墳で、墳頂に大きなハカイ痕を有つ。徑約11m、高さ約2.5mを測る。天井石が完全に取り去られている横穴式石室。石室現存長7.0m、尚、石室内には、土師焼の陶棺片が、散乱している。恐らく龜甲型のそれと推定される。

第5号墳。(45)(皿・奥) 近藤保氏の教示

によれば、3号・4号所所在地の市面係跡地（現在畠及山林）に2基の塚があつた由で、現に石材と覺しきものが、散乱している。

第6号墳。（46）（皿・奥） 上の2基の内の1基。

第7号墳。（47）（皿・奥） 5号の更に南よりの谷頭斜面に所在する円墳で、径約8m高さ約2.5~3.0mを測る。墳頂はハカイ消失し、天井石が露呈している。

第8号墳。（48）（皿・奥） 3号・4号附近から寺池へ向けて、やや降つた側所の道路右側に位置し、眺望の極めてよい西南面を占めている。径約9.0mの円墳で、封土の多くが消失している。西方に開口する横穴式石室は、現在、奥壁近くの $\frac{1}{3}$ を、残すのみである。略々原位置と推定される側所に、陶棺身が、残存している。

第9号墳。（49）（皿・奥） 8号墳の西南方の水田中に、石室のみ残存している。横穴式と推定されるが、耕作者の言によれば、もと、中にはいれて、石室長約7m、高さ約1.6m程あつたといり。

第10号墳。（50）（皿・奥） 8号・9号の南側分岐した支脈上に路々東西に並んだ、3基の未発掘の円墳が、所在する。東端から、10号・11号・12号と呼稱したが、何れも保存頗る良好で、封土は、全く原狀を保つてゐる如くである。10号は、径11.0m 高約3.0m。

第11号墳。（51）（皿・奥） 10号及び次の12号と、それぞれ數mをへだてて存在する。径約10m 高約2mの円墳。

第12号墳。（52）（皿・奥） 3基の内、最大の円墳で、径14.5m 高約4.0mを測る。

第13号墳。（53）（皿・奥） 10号・11号に近接してその南側斜面上に、略々同様な形態

を示す4基の塚がある。東から、13・14・15・16号と名づけた。何れも低小な古墳で、暮石と思はれるものが、散見される。13号は、径約8m。處女墳と推定。

第14号墳。（54）（皿・奥） 13号から數mはなれて、その西側に所在する。方墳かとも考えられるが、形狀不明。斜面のため、流土が多いのであらう。推定10m、著しく低い。

第15号墳。（55）（皿・奥） 14号の西南側數mの側斜に立地する。14号と異々同大同巧。

第16号墳。（56）（皿・奥） 15号の南側に位置し、前三者と同大同巧。

第17号墳。（57）（皿・切池） 諏訪脇の南側谷斜面の山林中に所在する径約7m 高約2.5mの小円墳。南に開口する横穴式石室は、入口の若干部分がハカイされつつも、凡ね完存し現全長3.3mを測る。中央が廣く、奥に行くにつれて狭くなる式のもので、玄室の割は認められない。巾は奥にて0.8m、中央附近にて1.1m。高さは、中央附近にて1.3mを測る。石室内左側に沿つて、奥壁から約0.5mはなれた位置に、原位置を保持していると推定される陶棺身が、認められた。棺身の全長は2.25m、脚を除いた身の高さ0.57m、蓋の一側は、近藤保氏が、保存しているが、突帯をめぐらし、懸樋突起のある通有の土師燒陶棺で、後に報告する福岡県2号墳の北棺と同じ式である。

第18号墳。（58）（皿・切池） 17号の西南側に、同様な立地を示す18号墳がある。墳頂の一部が、ハカイされ、墳形不明瞭であるが、小墳。天井石と推定される石材が、露呈している。

## カキ谷古墳群

神奈備山塊は、皿から鍾へ向つて、入りこんでいる狭小な渓谷地帯によつて、それ以前の連山と連續を絶たれているが、この狭小な地帯(=渓谷)に面した斜面上に、數基の古墳が營まれている。神奈備山腹の一方畠から南に下降する道が皿——種道路に交叉する地点の、やや西側の地域である。現在、渓谷の北側、即ち山の南麓面の山林中に4基、その反対側の山の北斜面上に3基が、認められる。前者をA群、後者をB群として記述する。

### A群

4基の塚が、背後に極めて急峻な山を負つて、渓流の縁邊に沿い、東側に一列に並んで所在する。古墳營造地としては、不思議な位、落ちつかない所である。目前の急流が、往昔も、この点を貫流していたとは、限らないが、古墳自体も、甚しい急斜面に、作られている。何れも小墳で、すべて、ハカイ盗掘の跡を、見せており、東から1号2号……と呼稱する。

第1号墳。(59)(種・圓子林) 著しくハカイされて、墳形不明であるが、恐らく推定8.0mの円墳と、推定される。東に開口と考えられる横穴式石室が、ハカイされたまま、露出しているが、その天井石の殆んどは、消失している。石室推定長4.0m巾1.65m。

第2号墳。(60)(種・圓子林) 墳形は全く不明。横穴式石室の奥壁に近い部分のみ、僅かに、残存している。壁は、面とりされた大きな石材で、構築され、持ち送りの度は、殆んど、認められない。南々西に開口と推定される。

第3号墳。(61)(種・圓子林) 直約7.5m程

の円墳と推定されるが、封土は、可成り消失している。入口の部分、天井部が、消失している。横穴式石室が、南々東にむけて、營造されているが、その制は、2号墳と同様。

第4号墳。(62)(種・圓子林) 封土殆んど全墳のため、墳形不明。石室もハカイ消失しているが、色々な点から、南面に開口した横穴式石室であつたろうと、推定される。

### B群

A群の立地と、對照的に、若干廣々とした感じさえ與える、やや緩らかな北面傾斜地、皿——種道路からの比高約10~20m程の箇所に、点々と3基の円墳が望見される。往時より著名なものと見え、久米郡誌にも、その紹介が載せられているし、亦、永山卯三郎氏の「種の三ツ塚」は、これに當るものであろう。第1号墳。(63)(種・カキ谷) 墳頂の封土が、ハカイ消失しているが、円墳で、その径13.5m、高約2.5~3.0m。横穴式石室が、北に開口している。石室は、玄底の別を設けていないが、壁は、面とりのよくなされた角材を用いて、整然と構築されている。石室全長8.9m、巾(奥壁近く)1.4m、巾(入口附近)1.2m、内部に土が、堆積しているので、高さは不明である。石室内部に、土師燒の陶片が、僅かに認められた。

第2号墳。(64)(種・カキ谷) 封土は大部分が、ハカイ消失しているので、墳形規模は不明であるが、推定徑は10數m。横穴式石室が、北方に開口している。玄室と羨道とは區別(片袖式に)されているが、道道の大部分は、ハカイ消失している。奥壁は一枚石で、側壁の状況は、1号に類似する。玄室全長3.4m、巾1.9m、高さ1.65m。室内に、土師燒の陶片が、散見される。

第3号墳。（65）（新・カキ谷） 円墳で、頂  
頂の封土が、多少流失しているが、徑約8.5  
mを測る。横穴式石室は、天井石、壁の一部  
を、消失している等、可成りハカイされている  
が、石室の推定全長4.5m位。石室は、下  
半部に一枚石を置き、その上半に、比較的  
平緩な石室を、横積みしている。

### 嵯峨山東面古墳群

嵯峨山を最高峠とするこの山塊は、主とし  
て、その尾根筋を南北に通る境界によつて、  
三保村と、佐良山とに、分割される。この佐  
良山分に属する東面の山麓、山腹、山頂に、  
數十の古墳が、点在的に、營造されている。  
散在基づく群集は、その内に、見出されるけ  
れども、全体として、廣大な嵯峨山東斜面上  
に、点々と、所在するので、これまた、嚴密  
には、古墳群と、云えないか知れないが、地  
形的にも一應他と切りはなされているし、個  
々の構造の示す所も、略々同様であること等  
から、ここに一括して、記述する。嵯峨山東  
面といつても、それは、大小の谷によつて、  
作られた、数多くのこれまた大小の古地が、  
概してゆるやかに、東方へ向つて、伸びてい  
るといった地形で、それに應じて、古墳の立  
地も、一定することなく、あるいは三保村境  
の山頂に、あるいは、ゆるやかにのびる古地上  
に、その間に急な隆起を示す山頂上に、ある  
いは、低い谷間の斜面に、あるいは、山麓  
の傾斜地に、といった具合の多様さである。  
しかも、その内部構造において、大体におい  
て等しく後期横穴式石室の制をとり、又、中  
に陶棺を收めた類が多いことは、注目せられ  
なければならない。大略北から南へ、又山麓

から山頂へ向つて、記述の順序とする。

向山1号墳。（66）（不福・向山） 開墾のた  
め、消失し、現在細地となる。ハカイの際、  
石柱及び高坪各一個出土の由。

向山2号墳。（67）（平頭・向山） 径約10m、  
高約1.5mの小円墳で、塚頂に、盜掘痕があ  
る。

片山古墳。（68）（平福・片山） 山麓片山部落  
内の郷中に所在し、開コンにより、ハカイさ  
れ、封土の多くが、消失している。石室は横  
穴式と推定されるが、大部分消失している。  
主軸線の陶棺身が、今跡出して見えるが、ハ  
カイの折、その中から勾玉及び環が、出土し  
た由。

中堂1号墳。（69）（不福・中堂） 片山塚背  
後の山腹南斜面の山林中に位置する円墳。推  
定径約15m。封土石室共に、可成りハカイさ  
れている。石室は横穴式で、南に開口する。

中堂2号墳。（70）（不福・中堂） 2号のや  
や西方の谷斜面に營造された、徑15.5m、高  
3.5～4.0mの円墳。塚頂はハカイされ、横穴  
式石室天井石露出。入口は開かれてあらず從  
つて石室規模は不明。西・南・北とも山にか  
こまれた狭小な谷斜面下部に位置している関  
係、眺望も殆んどなく、むしろ暗い感じさせ  
抱かせるところである。

三ツ原東古墳。（71）（平福・開の谷、中堂及  
び狹谷の境） 嵯峨山頂から分歧した支脈の  
一つの高い尾根部に「三ツ原」が、東西に相  
並んだ形で所在する。この地からの眺望は、  
特に素晴らしい、津山盆地を一望し、はるかに  
那波連山をあおぐことができる。何れも（佐  
良山古墳群中では）相当大きな古墳であるこ  
とは、注目される。その内、東古墳は、徑約  
15m、高約3.5～4mの円墳で、よく保存さ

れている。墳頂に、石碑かとも思われる小石が、若干散見されるが、處女古墳と、推定される。

三ツ塚中古墳。(72) (同上) 径19m, 高4~4.5mの円墳で、盜掘に遭つてはいるが、封土の保存は、頗る良い。石室は、南々東に開口する横穴式で、全長7.9m, 奥深近くに巾1.7m, 高さ1.6mを測る。玄室と羨道の別なく入口へ向つて徐々に狭小となる式、狹の積み方、石材は、後述する中宮1号墳に類似する。内部土師燒龜甲型の陶棺片を、散見する。

三ツ塚西古墳。(73) (同上) 径18.5m高4.0mの円墳で、墳頂が、大きくハカイ除去されている。石室もハカイされ、石碑若干が、墳頂ハカイロから散見される。横穴式と推定されるが、形態、規模の詳細は、不明。

平塚古墳。(74) (平福・平佐) 平佐部落内の山麓に程近い山腹東斜面上に位置する。封土は大きく変形しており、形狀規模は、全く不明である。本古墳は、昭和23年津山成美高等学校の子によつて、一度、発掘調査が、行われたもので、その折の状況は、當時3年生であった渡邊誠一君の手によつて、見事に、記録されている。この記録及び、我々の調査を併せ考へれば、内部主体は、南に開口する横穴式石室まで、その推定全長6m以上に達する。しかし、現在は、天井石をはじめ、側壁なども多く消失している。内に土師燒龜甲型の陶棺3枚が收められていたが、内2枚は、成美高校に、他の1枚は、現地に、所在している。成美高校の調査以前に、古くから歌詞の盜掘が行わられた模様で、原形を保つていると考えられた現存する1枚も、我々の調査の結果、古くハカイされていることが判つた。

高4m近い1号は、長さ1.95m幅さ0.85m内巾0.7mを放え、中央1枚は、全長2.2m, 高1.035m内巾0.63mを、測る。最も入口に近い現存する1枚は、身の半欠しか残つていないうが、その半身の長さ0.9m, 高0.8m, 内巾0.4mを測る。尚、前2枚の内外から、各種形態の銘部式土器及び土師器、並びに若干の鉄片(簪か?)が、出土している。

祇園跡1号墳。(75) (平福・祇園跡) 後章調査報告参照。

祇園跡2号墳。(76) (平福・祇園跡) 後章調査報告参照。

桑山1号墳。(77) (平福・桑山) 平佐塚南方の支脈の山麓傾斜面上に位置する径約13.5m, 高約4.0mの円墳で、墳頂が消失し横穴式石室も徹底的にハカイされている。

桑山2号墳。(78) (平福・桑山) 1号の北隣に位置する径約10.2m, 高約3.5mの小円墳で、石室は露出していないが、盜掘の形跡が、封土に残つている。1号・2号共に山林中にある。

桑山南1号墳。(79) (高尾・桑山南) 桑山塚より、やや南よりの同様な麓傾斜面上に、3基が所在する。その南端の1号は、径約17.8m高約4m近い円墳で、横穴式石室が、ハカイ施設している。内部は土が充満しているため測定不可能。可成り長大なるものと推定される。

桑山南2号墳。(80) (高尾・桑山南) 1号の北隣に点在する径約12.0m, 高約4.0mの円墳で、封土保存よく、處女墳と、推定される。

桑山南3号墳。(81) (高尾・桑山南) 山林と畠との境界となつてゐる所、3基の内北端の古墳で、封土の多くは、消失し、石室の

一部が露出している。巨大な石柱を用いた横穴式石室で、南東に開口する様である。

鉢状古墳。(82) (高尾・細航) 同じく麓斜面であるが、深い谷部に面している3基の古墳がある。その内、1号は、径約12mの円墳で、坂頂が、ひどくハカイされている。南東に開口する横穴式石室も、大きくハカイされている。壁は小口積で、又、持送りの度も著しい。現在長5・35m、巾1・6mを測る。

細航2号墳。(83) (高尾・細航) 推定径約10・0mの円墳であるが、ハカイ甚しい。内部構造は、全く不明。

細航3号墳。(84) (高尾・細航) 推定径13・0mの円墳と考へられる。甚しくハカイされ、内部構造不明。

下山田上の古墳。(85) (高尾・塚の前) 細航の西方にあたる谷斜面の一部に位置する径約7m、高約1・6mの小円墳で、その一部は水田に切りとられる。横穴式石室が、南に開口しているが、入口附近は、ハカイされている。全長約5・0m、巾1・3m、高1・6mを測る。

火の蓋1号墳。(86) (平賀・高櫻) 桑山南古墳桑山古墳などをその麓斜面に有つ支脈が、西方山顛から、ゆるやかに長くのびはじめる起点に近い尾根に、所在する。墳形は、流头変形して、形状規模は、不明であるが、推定径18m以上、推定高5・0m前後の、相当大きな円墳であることが想像される。南に開口する横穴式石室も、甚しくハカイされ、奥壁附近のみが、残存している。後記する高櫻古墳及び先記した三ツ塚と共に、嵯峨山東面古墳群中、最も高い位置に所在し、しかも、一般に壯大な規模を、有つてゐることは、注目すべきである。

火の蓋2号墳。(87) (牛福・高櫻) 前者の西北側に所在する古墳で、形状は不明であるが、推定径13・0m程。石室は完全にハカイされており、詳細不明である。

中山田1号墳。(88) (高尾・中山田) 山腹斜面上に位置する径約13・0m、高約2・5~3mの円墳で、墳頂は、大きくハカイされ、横穴式石室が、崩壊露出している。石室推定長7・6m。

中山田2号墳。(89) (高尾・中山田) 1号よりやや高位に营造された徑約15・5m、高約2mの円墳で、同じく墳頂ハカイされ、横穴式石室が、曝露している。内部には、土が充満し、天井石は散乱している。石室推定長6・7m。

高櫻古墳。(90) (高尾・黒島及び重兵衛山田と三保村大久保との境界) 三保村との境界線上の山顛に、一筋高く聳えているこの古墳は平福・皿・高尾の平地からも、くつきりとあおぎ見ることが出来る。嵯峨山東面古墳群中最大のものである。径約24・0m、高5~6mの円墳で、封土は部分的に、可成りの損傷を見せており。東に開口する横穴式石室は、殆どハカイされておらず、各壁は2尺角大の石を以つて持ち添り積みされている。玄室通道の区別は、天井部のみ設けられているが、その全長は約9・0m、玄室長5・5m玄室の巾1・9~2・0mを測る。佐良山及び三保村の平地は、い、うに及ばず、四方の眺望の絶佳極め、佐良山古墳群中唯一の立地である。

正京茶屋古墳。(91) (高尾・正京茶屋) 中山田古墳の位置する丘陵が、東にのびた麓斜面に位置する。円墳らしいが、地形不明の小墳で、高さも低い、玄義の別のない、横穴式石室が、東に開口している。側壁は、可成り

の小口積みであるが、奥壁は一枚石を用いている。石室現存長4.5m。

井庭古墳。（92）（高尾・辨慶岩）同じく龍頭面に所在する径約18m、高約5mの円墳で、その南端は、水田に向している。片袖式の玄室の割ある横穴式石室が南々東に開口している。その構築は、各壁とも、2尺角大以上の大きな割り石を以つて、無縫と積まれている。現存長7.7m、玄室長5.05m、玄室巾1.8m、羨道巾1.4mを測る。高さは不明。

城成古墳。（93）（高尾・城成）ゆるやかにのびる支脈上の山林中に所在する。墳頂封土は、可成り消失しているが、現在高19.0m、高3.0mの円墳。石室天井石が、露頭している。恐らく南々西に開口する横穴式石室で、推定全長7.5m。

西の岡1号墳。（94）（高尾・西の岡）龍頭山古墳群最南端の古墳で、山腹山林中に、2基並存している。1号は、南側の小なる方の円墳で、径約12~13m、高約3m。封土は保存良好で、南々東に開口する横穴式石室も入口の一筋を除いて、完存している。天井部に、玄室を区別している。現存長5.5m、現室長2.65m、玄室巾1.2m、高さ1.5mを測る。奥壁は、一枚の亘石に若干の割り石をあてて構築され、側壁は若干持ち送り積みになつてある。亀甲型と考えられる土師燒の陶棺片が、残存している。（50頁カット）

西の岡2号墳。（95）（高尾・西の岡）径約15~16m、高約4mの円墳で、封土は極めて保存がよい。南に開口する横穴式石室は、全長約7.9m、巾1.8m、高さ1.65mを測る。室内には、陶棺片が、散見されるが、田外達氏の話によれば、若干の、少くとも二、三個の陶棺が、小形棺を含めて、存在したとのこと

であり、佐良山校に現存する一例は、本石室出土のものの由である。何れも土師燒である。

## 笠山古墳群

佐良山地区東南部の古墳に對して、笠山古墳群の名稱を附したが、これは御笠美古墳群・小屋谷古墳群、劍戸古墳群に、最後者は、更に丸山古墳群、中官古墳群、高根山根古墳群、劍戸古墳群に分れる。又、以上の古墳群の何れに屬させてよいのか判らない孤立的な立地を有つ次第がある。

## 御笠美古墳群

大字高尾地区内の水田地帯東面にあたる帷山山塊の西斜面上の山腹に營造されている古墳に對して、特に小字御笠美地区内に所在するそれが多いところからして、御笠美古墳群と稱した。これらの内、中曾根上・下の2基（A群）のみが、ややはなれた、支脈を別にした山腹斜面に立地するほかは、大体において、1群をなしている。（B群）何れも横穴式を内部主体とする古墳で、すべて盜掘に遭つてゐる。

### A群

中曾根上古墳。（96）（高尾・中曾根）可成り急な西北面の斜面上に位置し、封土の約半分が消失しているほか、埴頂もかなりハカイされている。推定6~7m、を測る。石室はハカイされたまま、一部が殘存。西北に開口と推定される。

中曾根下古墳。（97）（高尾・中曾根）上古墳と同じ立地で、そのやや下方に所在する。封土は多くハカイされているが、推定6.5m、

高約2m程の小円墳と推定される。石室は、ハカイされているが、現存部長4.6m。恐らく西北方に開口する横穴式石室。

### B 群

丸山1号墳。(98) (高尾・御笠美下) 西側の山腹山林中に、丸山塚と稱せらるる3基がある。1号は、推延11.6mの、封土ハカイ甚しい円墳で、石室も大きくハカイされて、詳細不明。

丸山2号墳。(99) (高尾・御笠美下) 封土の可成りの部分が、ハカイされている。推延10m、推高2.5mを測る小形。ハカイされた横穴式石室が、露出している。

丸山3号墳。(100) (高尾・御笠美下) 3基の内、最大で、推延17.0m、推高4.0mの円墳。盜掘された横穴式が、南に開口している。その全長7.4m、羨道長3.7mを測る。巾・高は、内部に土が充満しているため、不明。

御笠美下1号墳。(101) (高尾・御笠美下) 丸山古墳より高位の、現在田外連氏が、果樹園として開拓された舌状部の突端近くに所在する。塚7~8mの小円墳で、封土の若干が損傷している。石室は、入口附近が、ハカイされて、露呈開口している。玄室と羨道は片袖式に區別され、推定全長約5.0m、羨道部の長さ2.85m、羨道の巾0.65mを測る。今土師燒陶棺片が、散見される。

御笠美下2号墳。(102) (高尾・御笠美下) 開墾のため、完全壊滅しているが、田外連氏の話によれば、横穴式石室があつて、壺・壇などの祝部式土器が、出土した由である。

三ツ塚1号墳。(103) (高尾・御笠美下) 御笠美下古墳の東方の南斜面上の山林中に、三ツ塚と呼ばれる3基の古墳が、東西に相並ん

で、見出される。三者とも、諸々同様大きさを有つ小円墳で、すべて、横穴式石室を、内部主体としている。1号の東端に位する、径約12.0mの円墳で、墳頂はハカイ消失している。石室もハカイされたまま、露出しているが、現存長8.0m、奥に近く巾1.3m、高さ1.3mを測る。玄室の別は、不明であるが、底面に、薄い板石が敷いてあり、その上に土師燒の陶棺片が、散見される。奥壁は、二枚の大石と若干の小割石とで、構成されている。南に開口。

三ツ塚2号墳。(104) (高尾・御笠美下) 3基の中央にある径約14.0m、高約4.0mの円墳で、南に開口する横穴式石室は、羨道部の各界全体を含めて、大きくハカイされている。玄室長6.0m、巾1.7m。

三ツ塚3号墳。(105) (高尾・御笠美下) 径約11.5m、高さ約3.0mの円墳、墳頂は大きくハカイ消失している。片袖式に玄室の割を有つ石室が、ハカイされ、天井石など散乱のままに、南に開口している。玄室長3.75m、巾1.0m、壁は、比較的小口積みである。

御笠美古墳。(106) (高尾・中宮上) 上記三ツ塚と、狭い谷一つへだてて、對面する可成り急な北斜面上に位置する径約9.0m、高約3.5mの円墳で、玄室の別のない石室が、その天井石を露頭させている。北に開口と推定。

大塚上古墳。(107) (高尾・中宮上) 御笠美古墳と同じ支脈の、より西方の突端頂部附近の山林中に位置する円墳で、墳頂の封土の殆どは、消失している。推定径10.5m、現高は、甚だひくい。長5.9m、巾1.0mの石室が北に開口している。

御笠美下大塚古墳。(108) (高尾・御笠美下)

圓道に面する麓下の畠中に所在する封土は、全くハカイされている。石室も巨大な鏡石及び若干の側壁を除いてハカイされ、附近の石垣となつてある。鏡石の具合からして西方に開口したものと考えられる可成り大きな石室が想像される。

### 剣戸古墳群

御笠美古墳群の南方約400~500mにあたる所で、東方から大さくのびて來た山が、やや緩傾斜を作り乍ら、平地に移行しようとする部分の斜面、尾根、麓下等の各所に、數十の古墳が見出される。佐良山古墳群中、最も密度の多い群で、亦、4基の前方後円墳のすべてが、これに屬している。今、これら古墳を、更に、地形とその実体を考え合せ、下の如き4群に分つ。A. 丸山古墳群。B. 中宮古墳群。C. 高野山根古墳群。D. 剣戸古墳群。

#### A. 丸山古墳群

丸山1号墳。(109) (福田・丸山) 丸山古墳群と稱しても、2基のみであつて、津山線によつてその西側に切り廻された低地との比高23m程の山頂に所在する。畠々南北に、2基並存しているが、北の1号墳は、徑約10.8m高約20mの円墳で、明治25年神社建設のため、可成りハカイされたものである。日下元榮氏の言によれば、その折、横穴式石室があり、人骨、馬具、刀(長4尺)2口、鐵錫、土器等が、出土したと云う。現に墳頂から、観部片が、採集されている。

丸山2号墳。(110) (福田・丸山) 鉄道工事で山を切り開く際、その東半が、ハカイされているが、推定約10.0mの円墳で、同じく日下氏の言によれば、横穴式石室があつて、内

部から陶棺、子持壺、刀、馬具等出土した由。

#### B. 中宮古墳群

第1号墳。(111) (福田・剣戸) 後章報告参照。

第2号墳。(112) (福田・剣戸) 1号の西隣りに所在し、南北を主軸(南が前方部)とする帆立貝式前方後円墳で、後円部が、甚しくハカイされている。復元推定長約20.0m。後円部に横穴式石室の残骸が、僅かに残存する。西に開口したものと推定される以外、形状規模不明。後円頂ハカイロから、祝部式土器片を、撿出したほか、封土北側の細地上から、人物ハニワの腕?と考えられる残片を探集した。

第3号墳。(113) (福田・剣戸) 1号の東側の徑6.5m 高10m程の小円墳で、その東側の一部が、ハカイされているが、未発掘と推定。

第4号墳。(114) (福田・剣戸) 1号の南側約20mの個所に位置し、周溝の一部を、よく保存している円墳で、徑14.0m 高2.0~30mを測る。墳頂がハカイされ、石室蓋石(堅穴式石室か?)が、一部露頭している。

第5号墳。(115) (福田・剣戸) 今畠地となり、完全消滅しているが、第3号の北側に當る個所の開墾の折、陶棺が、出土している。今、1号墳下に、その身の大形片が、轉倒して存するが、それである。

第6号墳。(116) (福田・剣戸) 1号の南東約60~70mの削面に所在する徑10m 高約1.5mの小円墳で、處女墳と推定。

第7号墳。(117) (福田・剣戸) 次の8号と共にややはなれて、池の南側に所在する。徑約6~5m 高約1mに満たない小墳

で處女墳と推定される。

第8号墳。(118) (福田・丸山) 鉄道工事の際、除去し、現在はとなつてゐる。日下元榮氏によれば、横穴式石室があつた内。

#### C. 高野山根古墳群

中宮古墳群所在地と連絡した西面する緩傾斜台地上に、立地する。佐良山最大の前方後円墳2基を含む。中宮古墳及び次に述べる劍戸古墳群の中間位置にあり、共に密接な、群としての関係を、有するものと考えられる。壯大な前方後円墳2基を中心、群小の幾十の古墳が、周囲に点在する様は、壯觀である。一つの強烈なムラが、附近に形成されていたことは、疑ない所であろう。

第1号墳。(119) (福田・劍戸) 前方部を南にむけた前方後円墳で、全長約32.0m 後円高約7.0m 後円径約23.0m 前方部長約10.0m 前方部前面の巾約15.5m 前方部高約3.5m 周溝の巾約3.5mを測る。クビレ部も極めて明確で、後円部には、周溝が、認められる。ハニワ破片も検出されている。後円部頂から、クビレ部にかけて、大きく深くハカイされ、石室の一部が、崩壊している様が、認められる。石室は、現在覗知し得る部分において、蓋石?は消失しており、辛うじて、側壁の一部が、認知された。それによれば、壁は、0.3~0.5m×0.1~0.2m程度の細長な割り石を以つて、構築されており、堅穴式石室を、想像させる如くである。しかしその石材は、雖然とした板状を呈しておらず、加えて石室中位邊から墳頂までの距離が、2.0mをはるかにこえると云う程の深さに、それが營造されているので、確高は、今後の排土調査に俟つべきであろう。

第2号墳。(120) (福田・劍戸) 最大の前方

後円墳で、前方部を西に向ける壯大なものである。墳丘の南側は、曾つて屋敷のあつた折ハカイされたらしく、クビレ及び周溝が殆んど、認められない。北側では、クビレ部は、極めて明瞭で、また焼けたる周溝が、墳と共に、観察される。全長約36.0m 後円高約4.5m 前方部長約15.0m 前方部前面巾約21.0m 前方部高約4.0m 周溝巾約4m~約7.0m 周溝最深約1.5mを測る。前方部と後円部の高さは、界々相等しく、後者が前者より僅かに高い。又、後円部は、前方部前面巾と、略々等しい。横穴式石室が、後円部中腹に、南向きに開口している。羨道が、片袖式に作られ、その全長9.5m 羨道長3.3m 玄室長6.2m 玄室巾1.7m 高2.2m 羨道巾1.0mを測る。中宮1号墳石室に比して著しく細長である。尚、石室よりやや東側の後円部封土中から、土師器高杯が、單獨に、見出されたほか、前方部附近の頃地から、ハニワ筒片が採集されている。

第3号墳。(121) (福田・劍戸) 2号の東側に近接して所在する円墳で、直径約12~13m 高約1.0m。ハカイロが、各地に認められ、石室が營見されるが、内部は未だ掘らしくい。

第4号墳。(122) (福田・畠ヶ奥) 2号の南側に所在し、鉄道工事のため消失したといわれる古墳で、詳細不明。(日下元榮氏教示)

#### D. 剣戸古墳群

高野山根古墳群間に、一支脈がゆるやかに西にむかつているが、その突端斜面上、側斜面上、麓下等に、現在14基の古墳が、見出される。その内、特に、南側に位置する13号14号は、地形立地からみて、次に記する小屋谷古墳群に、むしろ接近している。

第1号墳。(123) (福田・剣戸) 高野山根古墳を見下ろしている斜面に存在する径約13.0m 高約3.0m の円墳。墳頂はハカイされて、南に開口する横穴式石室が、露出している。通稱大牛の塚。

第2号墳。(124) (福田・剣戸) 1号に接近して存在する小円墳。(日下氏教示)

第3号墳。(125) (福田・剣戸) 形状は、まだ変化しているため、不明であるが、推定2.0mに達すると考へられる。内部主体は不明。

第4号墳。(126) (福田・剣戸) 径約12.0m 高約3.0mの円墳で、處女古墳と推定される。

第5号墳。(127) (福田・剣戸) 径約8.5m 高約1.5~2.0mの小墳で、横穴式石室が、ハカイ露出されている。恐らく南面に開口したもの。現存長4.6m。

第6号墳。(128) (福田・剣戸) 径約11.8m 高約3.5mの円墳で、封土保存よく、處女墳。

第7号墳。(129) (福田・剣戸) 径約14.0m 高約3.0m封土保存良好の円墳。横穴式と推定される石室が、露呈している。奥を含めて各壁とも、細長な刺り石を、持ち送りに積み込んでいる。この7号及び6号8号の中間辺りから、祝詞式土器痕跡が、見出されたとの由。(日下氏教示)

第8号墳。(130) (福田・剣戸) 径約10.0m 高3.0mの円墳で、處女墳と推定される。

第9号墳。(131) (福田・剣戸) 円墳と推定されるが、極めて低小で、疑問のもの。

第10号墳。(132) (福田・剣戸) 剣山根古墳に所在する径約13.0m 高約2.0mの円墳で、處女墳と推定される。

第11号墳。(133) (福田・剣戸) 10号に接し、その下方に存在する円墳で、径約15.0m 高約3.0mの處女古墳。

第12号墳。(134) (福田・剣戸) 路下、鉄道に近い山林中に所在する 径約14.5mの円墳で、天井石と推定されるものが、露頭している。

第13号墳。(135) (福田・剣戸) 剣戸西隣と呼ばれたもので、14号と相並んで、谷低地に向て、南斜面山林中に所在する。共に封土、石室をよく残している。13号は、径約17.0m 高約4.0mを測る円墳で、南東に横穴式石室を開口させている。石室は、玄室の別なく、入口へ向つて漸次狭小となる割をとつている。入口の一部が、ハカイされていると推定されるが、現存長9.7m 幅1.65m 高2.4mを測る。下部を平らに切りとつた整然たる天井石8枚を以つて被っている。側壁は、大略0.6m×1.0m 及び0.5m×0.8m角程の石材にて、僅かに持ち送りに、構築されている。尚奥に近く、胸棺半身が、土に埋もれたまま、認知される。

第14号墳。(136) (福田・剣戸) 剑戸東隣と呼ばれた類で、径約19m 高約4.0m 獅子の堂々たる円墳である。13号と同様、南東に開口する横穴式石室を、有している。石室は、現在祭祀の場として使用されているため、よく清掃されている。入口の一部は、消失していると見てよい。現存長9.8m 幅1.7m 高1.6m。奥壁が、1枚石を用いられているほか、構造は、13号と同様である。

## 小屋谷古墳群

剣戸13号14号墳の南側邊から、東方へ向けて、狹小な谷が、極く僅かの水田を作つて、入りこんでいる。この谷に面する北側の斜面に数基の古墳が、点在する。假に、小屋谷古墳群とよぶことにする。

第1号墳。(137)(福田・小屋谷) 山が谷頭水田に接する道路傍に位置する円墳で、一部が水田及び道路のため除去されている。径約14~15m 高3.0m。南に開口する横穴式石室は、大小の割り石を巧みに組み合せ、僅かに持ち残りづみである。天井は劍戸13号14号に見たように、整然と列とりされて、平面を呈している。日下元榮氏の言によれば、もと陶棺が、7棺併存していたが、道操作業員によつてハカイされた由。現在石室内には、陶棺片が、無数に散乱しているほか、入口附近には原位置を保持していると考えられる棺が、2棺、その身の残片を、とどめている。何れも土師焼で、子供の棺と推察される非常に小型の棺も、存在する。石室の現存長7.9m 高さ1.3mを測る。

第2号墳。(138)(福田・小屋谷) 谷底との比高約20m程の側所に所在する古墳で、封土の大部分はハカイ消失。石室は、徹底的にハカイされ、今、僅かにその残骸を、とどめている。剣戸の具合からして、南に開口した横穴式石室と、推定される。

第3号墳。(139)(福田・小屋谷) 2号のやや上位に位置するが、封土石室共に徹底的にハカイされている。

第4号墳。(140)(福田・小屋谷) 2号3号よりも、はるかに高所に位置する円墳で、封土は可成り消失している。径約10.0m。恐らく東南に開口する横穴式石室の殘骸がある。尚、陶棺片も散見している。

第5号墳。(141)(福田・小屋谷) 4号に並んで、存在する。封土石室共に可成りハカイされている。小屋谷4号と同様な構造で、同じく陶棺片が、散見される。

以上のほか、孤立的に存在する古墳4基がある。(何れも、佐良山保存会の教示による。)

御笠美上1号墳。(142)(高尾・御笠美上)

御笠美吉塙群所在地より數百米東方の山中に所在する小円墳で、處女墳と推定される由。

御笠美上2号墳。(143)(高尾・御笠美上)

1号に近く、略同様のものらしい。

此久尼塙。(144)(福田・劍戸) 同じく東方山中に所在する円墳で、封土は薄しくハカイされ、石室もまたハカイ跡呈している由。

鬼の元古墳。(145)(福田・瀧の元) 今、屋敷跡となつてゐるため、詳細は不明である。

## 大平山東面古墳群

原田川西側の福田地区内の山頂・山腹・山麓台地に所在する古墳を、總稱したもので、変化ある地形に従つて、様々な立地を示す古墳を包括する。その中で、三ツ塚古墳群と、若林古墳群とは、顯著な存在であつて、前者は、山頂近くの斜面上に、9基の古墳を以つて構成され、後者は、低田の低地が、南方河内田方面へ向つて、やうやく狭くなる辺の皿川西岸の台地上に、7基を所在させてゐる。

## 若林古墳群

この古墳群中、5基は、既に水田化した台地上に、取り残された形で存在するが、他の2基は、その南西方向数十mばかりの、北西傾斜斜面上に位置している。何れも、横穴式石室を内部主体とし、又多く陶棺を收めている点、一派として取扱うこととした。

第1号墳。(146)(福田・若林) 円墳で、封土は部分的に大きくハカイされている。推定

10m前後堆高約2~2.5mの小墳。界々北東に開口と推定される横穴式石室が、その一部を露呈させているが、内部は未発掘と推定される。但し、入口に近い天井石の一部及び側壁の一部は、約30年前に、除去されたとのこと。現在土師燒陶棺身が、間隙から覗見される。

第2号墳。(147) (福田・若林) 封土が水田となつてゐる関係上、東南及び南の一部が、大きく除去されている。円墳で處女墳と推定。

第3号墳。(148) (福田・若林) 封土殆ど崩壊し、横穴式石室の一部が、残存する。恐らく東に開口と推定される。床板として使用されたと考へられる土師燒の偏平な板が、見出された。陶棺を置く際の床板として使用したものであることは、邑久郡美和村龜ヶ原古墳群中の一例に於いて、明らかなる所である。

第4号墳。(149) (福田・若林) 封土が殆ど消失しているため、詳細全く不明であるが、恐らく小墳であつたろう。天井石の残骸のみをとどめる。

第5号墳。(150) (福田・若林) 封土ハカリ消失し、形体規模及び内部主体不明。

第6号墳。(151) (福田・登尾) 深い谷にのぞむ山麓斜面に所在する径約11.3m高約3mの円墳で、田によつて切り取られている西側の一部を除いては、封土は完存する。西に開口する横穴式石室は、その現存長6.7m奥に近く巾1.6m高2.06mを測る。各壁とも持ち送りの小口積み、土師燒陶棺の可成り大形片が、残存している。

第7号墳。(152) (福田・登尾) 7号の東より地点に所在する。封土の大半は消失しているが、その石室から判断するに、相当規模大

なる古墳が、想像される。今、横穴式石室と推定される瓦石天井石が、数個露呈している。成炎高枕が発掘豫定をされた墳である。

### 福田三ツ塚古墳群

通稱三ツ塚といわれているが、現地踏査の結果、9基の古墳を見出した。三保村との境界線に界々近接する山頂附近の、極く深い谷をかこむようにして作られた割面である。何れも大洞小異の円墳で、石室も、明瞭に判るものはずべて横穴式である。

第1号墳。(153) (福田・鎌井谷) 径約12.5m 高約3.0mの円墳で、封土は比較的よく保存されている。南に開口の横穴式石室は、天井部にのみ玄済の例を設けている式、奥壁は一枚の鏡石。入口附近はハカリ消失して、現存長7.25m 玄済巾1.7m 高1.45mを測る。

第2号墳。(154) (福田・鎌井谷) 径約13.5m 高約3.5mの円墳で、封土完好。石室天井石が露出している。恐らく南々西に開口する横穴式であろう。

第3号墳。(155) (福田・鎌井谷) 小円墳と推定されるが、封土殆ど崩壊消失。石室もまた石材のみ散見。

第4号墳。(156) (福田・鎌井谷) 径約10.5m 高約2.5~3.0mの円墳。石室天井石露呈するが、内部不明。南に開口か?

第5号墳。(157) (福田・鎌井谷) 径約7.8m 高約2.5~3.0mの円墳で、墳頂が平坦となつてゐる。未発掘と推定されるが、天井石の極く少部分が露呈している。

第6号墳。(158) (福田・鎌井谷) 封土が、可成り流失しているが、推定約12.0mの円墳。玄済の例が、天井部にのみ見られる式の

横穴式石室が、露呈している。入口の部分が、若干消失して、現存長6.75m。

第7号墳。(159) (福田・鎌井谷) 推定10mの、封土ハカイ著しい小墳で、小規模の横穴式石室が、ハカイされて残存する。

第8号墳。(160) (福田・鎌井谷) 今、封土全く消失。石材附近に散見するのみ。

第9号墳。(161) (福田・鎌井谷) 径約8.0m高約2.0mの小円墳で、石室の一部が、ハカイ露出している。細長い削り石の小口積みである。現存長3.45m 幅0.9m。

他に7基が、廣い範囲に点存する。北から南へ向けて記述する。

岡の丸古墳。(162) (福田・岡の丸) 三保村を通り西川方面へ抜ける道路を見下ろす山北端の山腹傾斜面上に立地する。径約9.8m高約2.0~2.5mの小円墳。墳頂ハカイされ、石室天井石が露呈している。恐らく北に開口する横穴式石室である。

奥の谷古墳。(163) (福田・奥の丸) 谷間に位置する径約9.5m 高約2.5mの

小円墳で、推定全長7.0m前後の横穴式石室が、露呈している。土充満のため、内部測定不能。

ウノメ古墳。(164) (福田・ウノメ) 山麓東斜面上山林中に所在する小墳で、封土・石室ともにハカイされ、奥壁のみが、辛うじて残存する。東に開口する横穴式石室を推定。

奥山田1号墳。(165) (福田・奥山田) 山腹斜面に所在するが、封土石室ともにハカイされている。石室は、南々東に開口する横穴式と推定される。

奥山田2号墳。(166) (福田・奥山田) 1号にやや近い山腹に所在。今ハカイされて不明。

(日下元榮氏教示)

奥山田3号墳。(167) (福田・奥山田) 同様に山腹所在の円墳で、封土は甚しく、損傷。横穴式石室が、露出している。

高瀬水古墳。(168) (福田・高清水) 若林古墳群の南に連なつて立地する支脈の山腹附近に所在する小円墳で、横穴式石室が、南に開口している。但し、天井石の大部分は落下消失している。(日下元榮氏教示)

## D 問題の所在

前項に、その一基一基を記述した古墳群は、古墳群として、どのような問題を、隠しているのであろうか？そこには、古代史における無限の問題が、横たわつてゐることは、まちがいないことであらう。不學と怠慢とは、それらに至るに至つてゆけるだけの力を、筆者に與えなかつた。今は、それらの中から、一つのしかし大変重要なと思われる問題を、しかも極めてナーヴな形で、提示するのみである。

### (1)

古墳は、「豪族」「貴族」の墓であるとは、誰でも語り、又書いてゐる。しかし、「豪族」「貴族」とは一体如何なる性格を有つたものであろうか？漠然とした意味において、「古墳は豪族乃至貴族の墓である」と述べても、それは決して、古墳營造者=被葬者の性格に對する説明とはなり得ない。その上、古墳の營造が行われた数百年間における日本の社会は、激動に激動を重ねる発展途上のそれであつた。古きものは、いかにそれが頭腦な抵抗を試みよう、次第々々に、影を薄めつつあつた社会である。「貴族」「豪族」の有つた社会的性質も、時代の推移と共に、刻々と、変化した発展をとげていつたに相違ない。我々が古墳營造者=被葬者としての「貴族」「豪族」を考えようとするとき、單なる固定化された概念としての「貴族」「豪族」を、問題の対象に捉えるのではなく、激動する社会が生み出したものとしての、そしてそれ自身変化し発展するものとしての「貴族」「豪族」を取扱うのでなければ、その考察の大半の意義を失なうであらう。

佐良山古墳群を覗見して、まず我々は、その狹少な地域に比して、「豪族」「貴族」の墓の夥しさに、注目する。このちつぽけな地域が、これ程多くの「豪族」を生み出していくことは、驚異的ですらあるようだ。従つて、このことから、これらの古墳は、佐良山の地に居を占めた人々のみの奥津城ではなかつたのではあるまいか？という疑問が、起つてくるかも知れない。もしそうであるとするなれば、この地域が、石村に恵まれ、ゆるやかな台地を有つているところから、附近地域一帯の「豪族」「貴族」によつて、死後の場として選ばれたのであらうか？また、佐良山の美しい自然が、津山盆地の各所に君臨する人々の奥津城として、ふさわしいものがあつたためであらうか？結論から先に言えば否と答えないわけにはいかない。佐良山附近の地域を概観すれば、直ちに上記の推測の妥當でないことを、知るであらう。

西隣する久米郡三保村を見れば、嵯峨山西面をはじめ、錦織その他の地に數十を数える古墳群が、見出される。東隣する、あの佐良山地域よりはるかに古い山地である養福岡村においても、可成りの数の古墳が、認められるることは、衆知の事情である。北方の綿谷から田舎にかけての山々には、佐良山に匹敵する程の古墳群が山腹に連づいている。院庄平野をこえて、二宮から郷村芳野村にかけての地域も、ほほ同様である。更に、少し遠くはあるが、何回となく例舉した國分寺周辺の河辺古墳群も、一里有余の彼方に存在する。どうみても、佐良山が津山盆地全体の人々の共同墓地でないことは、おうむね、河

辺附近の「有力者」が河辺古墳群に葬られ、三保村の「豪族」「貴族」が、嵯峨山西面や錦織の山腹に埋葬されたと同じ様に、佐良山の古墳群は、長い年月に亘りて、佐良山に住む、幾多の人々によつて、築造されたものであるにちがいないことを、示している。

あるいは、なおまた、このような古墳の在り方が、時代的なものでなかつたろうかとする疑問が、起るかも知れない。念のため、再び、周辺の他地域を見ても、輪郭は同じである。三保村の古墳群においても、河辺の古墳群においても、佐良山のそれにおいても、先項に見た様に、多くの後期古墳と共に、それ以前と考えられる少數の古墳が、見られるといつた具合である。このことから、必ずしも各地域がすべて全く同じ古墳群の變遷を持つているとは言えないかも知れないが、大体において同じ様な推移を辿つて、各地の古墳が作られたことは、否定出来ないであろう。ここに、佐良山古墳群が、佐良山の當時の實体を示す史料であることは、疑いない。古墳は、多くの先駆のいわれた様に、被葬者みづから君臨していた土地に近く、多くの場合それを一望することが出来る地に、營造されたものであろう。

さて、佐良山において、現存する古墳の數は、168基にまで達したが、我々の調査の不備に加えて、多くの土地の人々によつて断片的に語られ前項に加えておらないところの、既に消失した古墳の數を、考え合せれば、恐らく200に近い数が、あげられるであろう。驚くべき数である。しかし、我々は、ただ單に、その数のみを問題にしても、はじまらない。その数量、動きに、注目しなければならない。そのためには、これらの古墳が何時の

時代に、作られたものかと、いう問題を處理することが必要となつてくる。これは前に一寸觸れた。現在判明している168基を先ず、横穴式石室をマルクマールとする後期古墳と、そうでないもの（といつても、必ずしも前期又は中期古墳であると云うわけではない）とを分けて見なければならない。次表は、内部主体を主にして分類した佐良山古墳群のすべてに亘つた表である。

内部主体	古墳基數
脇穴式石室	2
脇穴式石室？	4
箱式棺	1
箱式棺？	2
横穴式石室	93
横穴式石室？	17
不明	21
未發掘と推定されるもの	28

これらの中の、「不明」と「未發掘と推定されるもの」の内、様形・所在地形・隣接古墳の内部構造などから考へて、その内部主体が横穴式石室であろうと想像されるものが、大部分であることは、いうまでもない。かくして、これによれば、佐良山古墳群の壓倒的多數が、横穴式石室を内部主体としてもつ後期古墳であることが、判明する。それにひきかえて、脇穴式石室を内部主体とするものは、それと推定される類を加えても、僅かに、数基にすぎない。また、脇穴式石室と云つても、それが、必ずしも古式又は中期の古墳の確實な指標であるわけのものでなく、又、箱式棺も、一概に、新しい古いとは云えないものがあることは、衆知の事柄であつて、このことも、充分考慮に入れなければならない。しかし、ともかくも、數の上からいつても、横穴式石室墳は、脇穴式の存在であ

る。それも亦、比較的古い式に属する（勿論後期の中では）横穴式石室は、少いようで、むしろ、所謂亀甲型の土師燒陶棺をその内部に安置するより新しい式と考えられる横穴式石室の方が、多いように思われる点も、注目されてよいのである。

このような状況は、単位地域における古墳墓の全体を検討した人ならざるとも、單に佐良山古墳群にのみ限つた現象ではなく、また、津山盆地のみに認められる現象でもないことを、知つてゐるであろう。古備平野でも、山陰でも、また畿内でも、特殊な地域を除いては、等しく見うけられる現象である。かくして、佐良山古墳群の大多数は、所謂古奈時代後期の所産であると、認めて差支えないであろう。多くの人々が、当然な事柄として、あまり注目していない問題が、ここにひそんでいるのではないかろうか？ 後期において、急速に一爆発的にとでもいつてもよい位、古墳の数が、増えてくるのは、一体どうしたことであらうか？ しかも、横穴式石室といふ、今までになかつた構造の内部主体と副葬品とをもつて出現する。勿論明確には一線は引けないけれども、前期・中期の時代の実体との間に、大きな相異が、考へられずにはいられない。しかも、それが、この佐良山にみられるように、狭少な地域に、考えられない程の夥しさをもつて、出現してくるのは、どうゆうわけであろうか？ 横穴式石室の採用自体、そこに前提として何等かの社会的・「宗教」的な變化が、考えられるのであるが、その上に以上のような事態を伴つてゐることは、重大な問題である。端的にいえば、社会構成の基礎的な単位=共同体の形態の上に、大きな變化が、起つたにちがいない。古墳を築造し得

る人々、古墳に埋葬される人々の数の激増は、單なる人口の増加とか、單なる生産の向上などによつて、解決されるべき問題ではない。それは、或る意味では、古墳そのものの変化であり、また人々の墳墓營造に対する觀念の変化でもあるであろう。しかし、本質的には、それが、大きくは社会構造の、小さくは、共同体の形態の變化に、求められてこそ、問題の核心に迫り得るのでは、なかろうか？

## (2)

後期古墳の築造の年代について、即ち「中期と後期との境を、いつを以て区切るか」という問題及び「後期の古墳が……人々によつて最善のものと感じられなくなつた」は何時頃であったかという問題について、小林行雄氏は、その近著「日本考古學概説」において、前者の問題は、「畿内における横穴式石室の出現を以つて後期の一つの標式とする場合、まだ明確な決定を與えることは困難である」と一應述べられた後、「しかし、後期の中心がほぼ六世紀にあり、かつ聖德太子の磯長陵や天武天皇の檜隈大内陵が切石造りの横穴式石室である点から見て、七世紀の後半にまでそのふうが続いていたことは、容易に察せられるのである。」としておられる。後者の問題については、これを「八世紀の初頭、佛教の盛興とともに傳えた火葬の制度の出現」に歸しているが、なお、「古墳時代の下限」については、幾つかの「一つの見方」が存することを例舉して後、「いづれにしても墓制の上からは同じ系統の古墳の行われた時代として、飛鳥時代をも含めて考えねばならないのであるが、…………流動する文化の時代と時代との間に、一線を以つて境を劃す

ることを困難とする文化史の立場において、古墳時代の終末もまた七世紀のうちにあるものとする不鮮明な解釋を以て満足する方が、むしろ適當であろう。」と結んでおられる。墓制としての後期古墳が、何時から何時まで行われたかという問題は、以上のように、明確な決定を與えることが、甚だ困難である。ましてや、一地域における僅かな調査から、その地域の古墳築造の年代を決定することは、より以上の困難事であることは、いうまでもない。しかし、大凡のことは、推定できるであろう。先づ、當時の文化の傳播ということから考えて、作州山間地域における後期古墳＝横穴式石室の築造の開始を、ほほ6世紀前後と見ることは、許されるであろう。さらに岡山縣邑久郡美和村東須恵本坊山古墳發見の切妻式屋根形陶棺の身に附せられた二個の蓮華文が、白鳳時代の川瓦当そのまゝである事實その地からして、恐らく陶棺を藏する古墳の築造が（カット5），古墳の築造としての最後の段階乃至それに近い段階であろうと推定される佐良山地域における後期古墳の下限を、早く7世紀末、おそらく8世紀半ば以前の頃に、求めることも、大体論として認められるであろう。従つて、佐良山における大多数の古墳＝後期古墳が、二世紀又は二世紀半の間に亘つて、築造されたとして當らすといえど、遙くないであろう。

さて、佐良山には、先に述べたように、約百四、五十基にも達する後期古墳が、推定されている。<sup>11</sup> 同じく後期といつても、その初頭と後半とにおいては、おのづから數においてまた構造の細部において、築造の事情を若干なりとも異にしているということを、充分考えに入れても、佐良山における後期

古墳が、大凡二世紀乃至二世紀半の期間に、百四、五十基の夥しさで、營造されていることは、それ以前の状況と比べて、注目すべき現象である。單純に、算術的な平均を出してみる、上の事情からして、あてにならないかも知れないが、一つの便観的な操作としてその点考慮して頂くとすれば、 $1\frac{1}{3}$ 乃至 $1\frac{2}{3}$ 年に1基の古墳の營造が、あるいは古墳を營造することの出来る力のある人間1人の死亡が、算定される。更に、ここで重要なことは、必ずしも1基の古墳に1人だけが埋葬されたのではなく、小林氏も書いておられるように、「わが上代の墳墓に、一つの墳丘なり石室なりに、二人以上の合葬した実例が豫想以上に多い」という事實<sup>12</sup>であり、特にこれが横穴式石室において然りとする事実である。現に佐良山においても、以下調査報告を行う8基の墳墓が、何れも2体乃至4体の遺骸の埋葬を示し、また、その他ハカイ現状をよく止めている類において、小屋谷1号墳の七棺の陶棺の存在を筆頭に幾多の例を、擧げることが出来る。一つの墳一つの石室に、2人又は3人が埋葬されるのは、極く普通な現象であつたことが、考へられる。従つて、古墳に埋葬される人々の数は、古墳の數よりずつと多くなりその2倍から3倍となる。上の甚だ頗りない計算でゆくと、正に、1年につき1人以上2人強の、古墳に埋葬され得る資格のある人が、死亡していることになる。驚くべき程多くの「貴族」「豪族」が、古代の佐良山に存在していたことになる。1年につき何人と云う上記の算術を、全く根據のないものとして除外しても、佐良山における後期古墳に埋葬された人々の数が、約300人乃至450人前後以上とすることは、ほほ動かせない想定であ

らう。たびたび算術的な表現をして恐れいるが、平的すれば數十人の、死ねば古墳に埋葬される人々が、當時、佐良山に居住していたであろうとの想定も、一概に荒唐無稽なこととして、避け得ないものがあるのではないかろうか？ここに「貴族」「豪族」の實体を見出さねばならない。佐良山における後期古墳の一つ一つを、更に細かく年代的に、きちんと配列することが出来れば、問題は、更に具体的となるであろうが、これは今後のより精密な調査にまたなければならぬ。同じく後期古墳といつても、先に指摘したように、前半に屬するそれが、後半に屬するそれに比べて、量的により少いことは、他の地方の所見をも合せ考へることによつて、充分想定され得るところであるが、その点に関する正確なデータを作成し得ない今は、こことこれに、問題を更に、発展させ具体化させる鍵が、ひそんでいることを指摘するにとどめ、目下進行中の第2次の調査に、その期待の多くをかけようとしている。従つて、ここでは極めて大まかに見えるかも知れないが、なほそこにそれ相應の充分な意味を有つものとして、後期古墳を一括して取扱うこととする。

後期古墳の以上の状況にひきかえて、前期中期の古墳は、どうであろうか？佐良山ひいては津山盆地において、何時頃から古墳の營造が始まつたかということに、明確な解答を與えることは、非常に難しい問題で、現在それを示すべき充分な資料を持ち合せておらないが、盆地一隅において、梅原末治博士の調査にかかる、苦田郡郷村觀音寺古墳が「古式古墳にふさわしい内容」を持ち、当地方の他古墳に比して「時代の遡るものである」と想定されていること、その他などから、<sup>14</sup><sup>15</sup>

少くとも、所謂古式に屬する墳墓の築造が、津山盆地に行われていることは、略々確實であろう。即ち、古墳を作り得るだけの社會的な條件は、津山盆地においても、他の諸地方と同様に（地方々々によつて多少のズレがあることは、いうまでもない）早くから存在していたことは、明らかである。しかし、ここで佐良山において、梅原博士が提唱されているような古式古墳あるいは、中期古墳の内容を有つたものが、存在したか、存在したとすれば、何基位あつたかという問題についてはその一基から筋鉢車型石製模造品（カット4）が、採集されている寺山古墳群中の数基及び後常に報告する門の山第1号墳が、横穴式石室塚よりも、わずかに時代が遡るものであらうかとする推定を下せるのみであつて、遺憾ながら、明確にこれを語ることは、出来ない。しかし、前項の素描において見たように、所謂後期以前と考えられる古墳は、數量的には非常に少なく、数基を数える程度であろうとする筆者の推定は、略々大過ないところであると思われる。ともかくも、絶対数において、非常に少ないということは、確實であろう。

佐良山における後期古墳が、後期の全期間に亘つて不均した数で、築造されたわけではないことは、前にも述べたように、充分考慮されなければならないが、それにしても、横穴式石室をメルクマールとしてみた後期古墳の時代を一括してみた場合、上記のそれ以前と考えられる時代との間に存する差異は、明らかに、横穴式石室の採用という重大な轉機とからみ合つて、その築造數量の上に、反映されているのではないかろうか？數百人に上る後期古墳の被葬者=所謂「貴族」の實体は何

か？ 彼等が、佐良山の地に、忽然と誕生してくる筈はない。前既中期において極めて稀であった古墳の築造が、その時期における佐良山の人口の小量さを、ただ單に物語り、後期古墳の夥しい出現が、ただ單なる人口の増加を物語ると思えない。又、國家体制の完成強化に伴つて、一つの末梢的な風習の流行に、後期古墳激増の根本的な原因を、歸せしめようとすることは、むしろ滑稽である。更に、單なる生産の向上、生活の豊富化なりを、直接的に、これに結びつけようとする試みは、亂暴である。それは、人口の増減の有無にかかわらず、古墳というものに對する觀念の變化、究極的にはそれを支えている社會の變化に、求められるべきであらうことは、先に述べた。かくして、後期以前における如上の状況は、當時の村落の構成を、津山盆地の政治的社會の實体を反映しているのでなければならない。同時に、それが後期古墳…………横穴式石室の採用に關聯してのその數量の激増化……への轉換もまた、村落の構成、共同體の變化と、政治的社會の發展とを反映しているものなければならない。古墳營造者、そして古墳被葬者の質的な相異が、兩者の間に、存在したにちがいない。「風習」といわれるものの理解のためには、常に根底において、こうしたことに対する理解と把握とが、なければならないのではなかろうか？

### (3)

古墳は、たとえそれが僅10数mの小規模のそれにしても、それが、個人又は集団の權威的な誇示の現われである限り、極端にいえば「植物的」な生存を続ける社會においては、出現する道理はない。古墳の築造は、一定の歴史的發展の段階において、はじめて、開始

されるものである。氏族共同體の古い歴史を打ち破つたところにおいて、それは期待されるものである。そこには、權力又はその萌芽的なものを中心として、「強力な」意志=個性が、働いていることは、否定出来ない。「強力な」意志と個性とが、何等かの形においても誕生していない社會において、誰が、權威的な壯大な古墳の被葬者となり得たであろうか？ 前期乃至地方的には中期の古墳の被葬者が、そのやうな意志=個性を顯現していたであろうことは、いうまでもなく、また後期古墳の營造者が、意志と個性との持ち主であつたことも、充分、考へ得るところである。ただ、この場合最も大切なことは、その意志=個性の全社會的な性格、従つてその顯現の仕方において、兩者の間に、大きな相違があつたのでは、なかろうかということである。（いうまでもなく、その相違は、前者から後者への發展という形で捉えられなければならない、そしてまた、それは、その發展の基盤をなす廣汎な社會關係を、充分考慮しなければならないことは云うまでもない。）

先に見た後期古墳と、それ以前の古墳との一定地域内における築造數量の相違（單に佐良山乃至津山盆地のみの現象ではなく、略々全國各地における状態でもあつたことは先に述べた）は、それが單純に、該地域内における人口の増減多少を示すものでない以上、そしてそれがそれぞれの時代の社會の實体の相違を反映するものである以上、より具体的には被葬者の社會的な性格の相違として取りあげられることが、可能であらう。前期・中期の古墳の營造された時代……具体的には3世紀……5世紀……において、既に階級割立が發生發展しており、たとえ、奴隸制はまだ「全

社会を深刻に把握していない」としても、初現的な階級社会が存在していたことは、既に多くの先駆の説き來つたところである。いわゆる「常識」では、階級社会の支配階級は、廣汎な一般大衆と比べては、たとえ少數のものであつたとしても、その数は、極端には、少くなかつたであろうとされる。しかし、特に前期古墳に示された「支配者」の数はどうであつたろうか？ 踵りかえしていうまでもなく、その数は極小であつたことが、指摘される。中期においてややその数は増加するとはいゝ、略々同じ状況が、考えられるであろう。このことは、この種古墳の比較的多い先進地帯……畿内など……についても、適用されることが出来ると思う。その社会が階級社会であるにも拘らず、古墳を營める人格が、極少數であるということは、一体何を意味するであろうか？ 「常識」では片付げられない問題がここにある。支配階級が、大化前後乃至それ以後に見られたように、デスボット的行政組織=権力機構の網の中に、ヒエラルヒーを形成している場合とは、ずい分と異った社会が想定されるのではないか？ 後者の場合には、既に、古代家族=奴隸制的家父長家庭の廣汎にして、深刻な成長と発展とが、各地方に亘つて、骨つての古い体制をつき破つてゐる事が考えられ、その結果、ヒエラルヒーの上部組織たる「律令的」乃至律令の「官僚」が、大化實物制の網に見出されるような古墳を、大小さまざまに、作つてゐることが、考えられる。古墳を作るということには他に多くのいろいろな原因が働いてはいるであろうが、根本的には、それは被葬者が、その主体性を獲得し、それを打ち出そうとする「意識」、その發展の土台が、前提され

ていなければならないことは前に述べた。こうしたことに明確して考へられるもう一つのことは、後期古墳が一般的には規模が小であるが、中には相当に巨大なものも含んでいるなど、その形態はかなりにさまざまであり、おのづから、その内に、当代のヒエラルヒーの在り方を想像させるに引きかえて、前期・中期の古墳は、特別に巨大なものを除いても、一般的に形態が大規模であることが、指摘される。後期古墳が、その古墳において、一般的に、規模が極めて小さいにも拘らず（この小さくなる原因の一つとして横穴式石室の採用を考えに入れなければならないが、なおこの兩者は、相間に把握されなければならない）、その中になお可成りに巨大なそれを有し、前記實物制の網の物語る被葬者間の階層的な差異のさざざを示していることは前述の通りである。勿論、前中期のそれであつても、古墳の規模が、當時の一般的な大規模さから著しくはづれて、可成り小規模な類が、若干なりとも、存在することは、事実であろう。しかし逆例には、むしろ大規模な古墳に附屬する又は隣接する形として、つまり階層的なものとして、理解されるものが多いのではないかろうか？ 副葬品においても、後者が、鏡玉劍に主として象徴化される「寶器」的な類を主体としているのに較べて、前者のそれは、むしろ、死後の生活の場としての横穴式石室に相ふさわしい日常の利器・器具・供物がその多くを占めている。これら内部主体・副葬品・古墳の規模、古墳自体の分布の状態とその数量等の幾つかの、もつとも重要な要素も、それをバラバラに切りはなしして考へては、當代の社會狀態、被葬者の性格を云々する事が出来ないことは、いうまでもないこ

とであつて、そこに、これらを統一的に理解することが、必要となってくる。

さてそこで、前期乃至中期の古墳が、何處の地方においても、極めて少いといふ事實は、上記の他の諸特色と合せ考へることによつて、強力な個性＝意志の表現者が極めて少數であり、且つ、それが各地に点在していたこと、従つてその個性の表現者が活躍することの出来る社会的背景が可成り廣汎なものであつたろうことを推定させるとともに、社会の他の大多数の人々が、未だ明晰な個性的なものを有し得ず、古い要素を多分にもつづける共同体の中に、「單なる一員」としての存在を認めていたのでないかとの想定に導く。この場合、強力な個性の表現者としての古墳の被葬者が、社会全体と遊離していたとは、考えられない。それどころではなく、むしろそれらの少數の人々が、各地方に僅かづつ出現して來たということ自体、生產力の発展に基いて、古い共同体が、自らの狭い枠内の矛盾を叩きこわそうとして、激しく行つてゐる運動の一つの側面として、こうした運動の過程の中に生み出されてくる地域的なそして可成りの主体性をもつ「集団」、その集団の統制力の掌握者の出現を示すものではあるまいか？ そしてその場合、「集団」の対応は、その掌握者としての「族長」→被葬者に象徴的に顕現されるのであろう。即ち「集団」の個性は、それを代表する人物においてはじめて具体的になり、顕現される。このような集団の個性を代表する被葬者の副葬品の性格が、下述する後期古墳の被葬者の持つ副葬品のそれと著しく異つて（尤も、この点は、中期を媒介とした時、簡単に一線を引くことは出来ないのであるが）それがむしろ日常の利器用具な

どではなく、質器的なもの（前代との傳統的な連関が考慮される）であるところに、被葬者自身の性格、というより当時の社会の一一般的な狀態（祭祀的部族的狀態）が、先の想定の如く見出されるのであるまいか？ 前期乃至中期古墳の被葬者の社会的な性格を如何のように捉えることはどうであろうか？ これに引きかえて、後期古墳の被葬者の性格を、上と同様なものとして捉えることは、前項の論述からして、なし難いところであろう。我々としては、後期古墳の在り方からして、少くとも、個性と意志との持ち主（必ずしも個人ではなく、家族であつてもよい）が、曾つての時代と異つて、廣汎に出現して來たということを、先づ認めなければならない。その個性も、前期の被葬者の示したようなそれではなく、横穴式石室及び副葬品の性格のそれが象徴するように、「個人の自覺」乃至「個人の見見」という方向においてのそれであつたことが、想像される。そしてこの方向こそ、即ち個人又は家族の主体性を強調する方向こそ、これまでの共同体の制約をうち破り、祭祀的族制的な立を止揚しようとする方向ではなかつたであろうか？ 何故人々は社会はこうした方向を取らねばならなかつたかの問題は、一應除いてみるとても、多くの先史の証かれるように、6世紀前後からそれ以降に亘つての時期において、大和政權が、半獨立的な豪族の連合政權から專制体制へと轉換をなしとげつつあつたといふ事実は、正に地方方に廣汎に展開する共同体のこのようない動きと方向とを前提としなければ、理解することは出来ないであろう。この方向と動きこそ、先に、前中期の古墳の在り方から想定した農村の古い共同体、それの分解即ちその家父長的階級

関係の発展へのそれであるであろう。主として横穴式石室を内部主体として、内に日常利器用具供物を收めることを常とした後期古墳の各地方各地域における激増、猶額大の山間地域小河川の作る僅狭な溪谷地帯にまで、あらゆるところに出現していく後期古墳の營造は、地方地方の共同体がくずれ去り、そこに家父長的な秩序が即ち深鉛的な階級関係が、自らを強く貫徹させて行つたことを物語つていると考える。

さて、佐良山における各古墳に、もう一度目を轉じてみよう。以下に掲げる表は、封土の大きさを測定することの出来た116基の古墳についての、その大きさの分類表である。

	径20m 以上	径15~ 20m	径10~ 15m	径10m 以下
寺山	1		4	2
門の山			4	9
煙硝原			1	4
寺池東		1	5	7
カキ谷			2	2
一方			3	
嵯峨山	1	11	9	4
御笠美		1	6	4
丸山			2	
中宮・高野	4		3	2
剣戸	1	3	7	1
小屋谷			1	
若林			2	
三ツ塚			5	2
その他				2
計	7	16	54	39

これによれば、前方後円墳4基を除いては、封土の径20mを超えるもの僅かに3基、径15m以下の古墳が、實に測定墳総数の80%強という数字が、現われる。これからして、佐良山に於ける古墳の、従つて数量的に90%以上を占める後期古墳の殆どが、非常な

小墳であることが、判明する。このような徑15m以下の小墳の築造には、どの程度の労働力が、必要とされたであろうか？ その道の専門家でなくとも、これが、数百人が數十日を費しての築造であるとは、誰も考えないであろう。我々の計算によれば、それは、恐らく10段人の人々の2・3ヶ月の労働によつて、建設されるとされる。石材には、周囲の山頭や山腹に、地肌を露呈している流紋岩が容易に利用されたことは、いうまでもない。それら墳墓の内部主体は、しかも、家族墓としての性格をより強調した横穴式石室である。1基の小古墳の營造、それは當時この地域にも「階層的」な差異を以つて形成されつつあつた家父長的家族のうち、上位にあつた、それ自身一個の奴隸主としてささえ長しているの家父長とつて、さしたる至難事ではなかつたのであるまいか？ 佐良山の地に形成された古代家族が、その構造一型において、下總葛飾郡大島郷戸籍に示され漏れた形を有つていたか、あるいは、先進的な御野國加牟郡半布里に現われた形を示していたかについては、推断の限りではないが、それにしても、6世紀から7世紀にかけての夥しい古墳の營造は、この地においても、既に家父長的な秩序が形成されていたことのみでなく、これらの家父長制家族のうちに階層的な差異が、現象的には古墳を作り得たものと、そうでないものという形をとつて、出現しているということを、不するものではあるまいか？ 異に、肥前猪手の如き郡の大領、正八位勳十等の如き家長のみが、後期古墳の築造者となり得たとすることは、先に(2)において述べたところからして、考えられることがないであろう。更に、また、佐良山に

おいて出現した家父長的家族が、すべて等しく、古墳の築造をなし得たであろうとの推定も、先の論據からして、承服出来ないところである。佐良山において、後期古墳を築造した「豪族」「貴族」の実体は、まさにこのあたりに、その解明の足掛りが、存するのではなかろうか？ もとより斯然他を壓している古代家族も存したに違いない。中宮・高野山模にまたがつての壯大な4基の前方後円墳の營造、應岐山西面の山頂に他を壓すように構築された數基の大規模（といつても佐良山における）な円墳の存在は、この佐良山の僻地にも、眞の意味の「豪族」が、他を壓しつつ誕生しているのを、物語るものでは、あるまいか？ 8世紀初頭前後にから災作闘が分離し、その國府が、済山市總社におかれることも、附近における、このような事情を充分考慮して、理解されなければならないであろう。

以上の論據からして、廣く済山盆地における後期以前の古墳に目をむければ、他地方のそれと合せ考えることによつて、それは、農村における家父長的關係の廣汎な普遍的な形成、以前の社會の狀態を反映していることを、思わざるを得ない。前項の所論に基いて結論的に云えば、石母田正氏によって生き生きとして取り上げられた「古代貴族の英雄時代」<sup>20</sup>の「英雄」が、その主人公であつたのではないか？ 廣汎に社會の基礎をなしていなかったと考えられる當時の共同體の上に、「族長」として又华丽「デスポイクト」として君臨していた政治家—意志と個性との代表的顯現者—英雄の奥津城を、そこには見えることは、果して不可能であろうか？ それに對して、後期古墳に關して見られた以上のような性格は、家父長的關係が地方=農村の共同體（即

ち曾つての「英雄」の論理によつてその共同體的關係を支配の手段とされていたところの共同體、自らの主體性の發展を強く制約されていた共同體の構成員）をゆりうごかし、その中に古代的な秩序を持ちこんでいた姿を示すものではあるまいか？ 従つて、そこに葬られた人々即ちいわゆる「豪族」「貴族」が、前期中期の被葬者は異つた性格を有つておることは明らかである。それは、正に家父長的家族の基であるということが出来る。勿論その中には、上は支配のヒューラルヒーの頂点に立つ皇室の墓から、下はヒューラルヒーの末端にありながら、小規模ながらも自らを1個の奴隸主として成長させてくる山間僻地の家父長家族の墓まで、さまざまな被葬者の階層を含んではいる。しかし、それにもかかわらず、彼等被葬者の示すところは、廣汎に形成された社會の一般的な状態の家父長的奴隸制的性格に根柢を有しているといふ一点において、共通しているとしてよいであろう。<sup>21</sup>

さて振りかえつてみると、後期古墳の示すところと、それ以前の古墳の示すそれを、あまりにも對立的に、あまりにも突飛的な変化として、取扱つて來たようである。そこには、3世紀前後から7世紀前後に亘つた古墳を單に2つの類型に分けたこと、中期古墳特にその後半のそれが示す一つの「過渡的」な様相に対する考慮が何ら爲されていないこと、従つて兩類型の示している被葬者の性格、ひいては、社會の一般的な状態について甚しく機械的平板的に取り扱つたことが、指摘されるであろう。前者については、中期特にその後半の古墳の持つ重要性（その重要性の存在の故に、中期が前後期の間に編年されている）についての評價を無視するものでは決してない。

それがその副葬品においても、墳形及び古墳自体の分布と数量においても、先述の兩類型の過渡的な面を持つことは、案外の事柄である。それにも拘らず、この中期を含めての前半の古墳と後期古墳との間には、可成りの変動=發展があつたことも事實である。この変動=發展こそが、たとえ中期古墳がいかに特色ある性格を持つ存在であるとしても尙ほ、そこに中期と前明とをひつくるめてそれを、後期古墳と對比するという方法を許してくれるのではないかろうか？といふことは、しかし、この方法の完備を意味するものでは決してない。それどころか、こういう方法しかとれず、從つて中期古墳の持つであろう眞の役割について殆ど取り上げることが出来なかつたところに、最大の欠陥があるのではないかろうかと考えている。その被葬者の「豪族」貴族としての性格及び社会の一般的な状態等についても類型的な對比にとどまらなければならなかつたこと、從つてこれに關連して各地方乃至各地域間ににおける不均等的發展に對する認識と評價とが殆どなし得なかつた事が、強く考えられる。これらの点については、目下進行中の廣範囲な調査の整備に伴つて、再び普及することの機会を期待して、今回は、「問題の所在」についての序説的な如上の考察を以つて終ることとした。

以上の所論において、結局、問題の解決はおろか、問題の所在すらも、混迷の瀧に追いつんでしまつたのではなかろうかと恐れる。しかし、その營造者の性格、從つて、その社會的な基盤の把握への努力を通じてこそはじめて、古墳の研究は、その正しい道において進むことが出来るとなす筆者の立場とそれへの確信は失われことはないであらう。最後に

松本新八郎氏の高見を借用して、結びとする。

「それが、（奴隸が）近藤、英雄や族長の私的な所有に轉ずることがあつた後でも、そして村落の土地が成員の私的占有にまかされた後でもなほ世帯共同体が支配して、けつして家族奴隸をふくむ家父長家族には轉化しないといふ時代が長く部族同盟期につづいたといふことを指摘せねばならない。…………土地占有をつうじて一般員の間にも奴隸所有が成立するときには世帯共同体は家父長家族に轉じていなければならず、そのためには氏族および部落同盟に大きな変化が行なわれ古代國家へ轉化しなければならない。」<sup>23</sup>

## 註

- 1) 稲成後、更に41基の古墳（3基が確実に横穴式石室塚で、他の1基もほぼ横穴式石室塚と推定される）が発見され、計172基となつた。
- 2) 斎藤弘（わが國における古墳の諸類型とその系列）「考古学雑誌」37巻9号、1952年。
- 3) 岐阜県下においても、後期に屬すると考えられる箱式棺の例は、枚数にいとまない程で、例えば、川上郡落合村赤羽根2号墳、吉田郡特庭村鶴山の箱式棺古墳など。  
近藤義郎（川上郡落合村赤羽根2号墳調査報告）「吉備考古」84号、1952年。  
神奈英則（鶴山古墳群の研究）「研究メモ」第3報、1952年。
- 4) 後期するように、陶棺をその内部に載する横穴式石室塚は、後期としてもその新しい部に屬すると考えられる。  
末永治郎「大和古墳集」194頁、1950年。
- 5) それまで前明や中期の古墳の營造が全く行なわれなかつたと想定される山間の郷地にも、このころになると古墳が出現してくる事実は充分聞通的に考慮されなければならないであろう。このことに關しては、近い将来にやや詳しいデータとともに論述する機会を有つことができることである。
- 6) 小林行謙（黄原邦理）「考古学雑誌」第2編 1949年。
- 7) 小林行謙「日本考古学概説」258頁（及び259頁）、1952年。

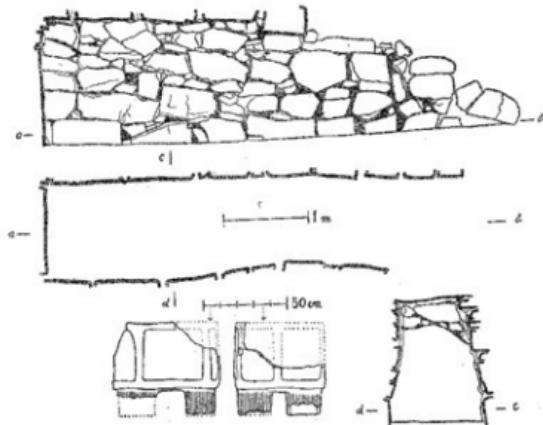
- 8) 小林行雄「古墳時代における文化の脈絡」『史林』33巻3号及び4号 1950年。
- 9) 小林行雄「日本考古学源流」258頁 1952年。
- 10) 鈴原末治『我が古墳の統宗』「日本の古墳墓」117頁-119頁 1947年。
- 11) 実際はこの数より多少多いであろうか。
- 12) 小林行雄「前略書」251頁。
- 13) 計算で求められた数字は、1・2人～2・25人である。
- 14) 鈴原末治『美作鶴居庭園寺古墳』「日本古文化研究報告第9近畿の古墳墓」75頁 1938年。
- 15) 例えば、群馬守古墳に隣接して別な古墳上に所在する群馬大の前方後円墳（前方部の拡長なるに比して後円部が形成され高く、埴頂から傾斜形と呼ばれる逆形ハニカムの壁面が構築されている）、諏訪郡江口山古墳前方後円墳などが、時代の遅れを考慮される。
- 16) 大化以前において我が古共体＝土地所有の主体が、秦明生太氏によって提出された貢納共体→親族共同体→家製共同体→家父長制の大族族は、古代家族の各派閥の癡弱的殘弱の段階を辿つたものであるか、あるいはいわゆる世帯共同体運営論が、それに適用されなければならぬかという点に関しては、今のところ尚付けて概説的に白説を隠すする材料も理論も持て合せていない。それにも拘らず、あえて出さなければならない一端は、兩者ともに論者において、その議論の根柢としての当時の実際の虚実的な部分に對する解説と類似解釈とが共通点となっていることである。中世の古文獻、記紀その他の我國の古文獻の批判的な解釈によると、史籍の整理は、成程體に入り細を穿つて行なわれていることは、いうまでもない。それに就いて、当代の眞實の歴史物である考古學的史料については、たとえそれが部分的な引用が行なわれているにして多くの多くは、凡なる傍證的役割を荷わせられてはいるのみに過ぎないことが指摘される。たとえ考古學的史料が具体的な個人の事蹟や明確なる絶対年代を裏し得ないにしても史料の背後にゐる人間の生活の理解をを目指していることは、歴史學者が何の品質や文学の形態をその目標にしているのではないことを全く同じであることはいうまでもなく、ここに考古學が文献歴史と共に「歴史学」という同じ次元に立つべきものがあり、しかも兩者

の間に一種を引いての「眞立的」な次元としてではなく、兩者が一つのものとして、即ち言葉を越えて言えば、考古學が「眞史學」そのものとして高められなければならない所以のものがある。従つてここに考古學が、文獻に偏重した形ではなく、内なる論理性を頗く充満しつつも歴史學そのものでなければならぬことはいうまでもないことであろう。總て式以降大化以前に於けるまでの遺物遺跡が、その間にほぼ断続するところなく秩序づけられつつある現状において、考古學的史料を第一義的なものとして振り上げることは、重要な意味を行つてゐる。我國における大化以前の共同体の問題にても、この点に、その發展の成程がつかつてゐると想はれる。一旦内に紹介されると想はれるこのようなことを述べたのも考古學の側と歴史學との競争及び相互間の連携に向つての積極的な努力に対する期待を強調せんがためにほかならない。なほ小林行雄「日本考古学源流」後頭における同氏の構想を参照。

- 17) 田中・畠山・藤原・西土之祐共其民曰・吉之罪者・臣高恭良・不耕不剥・皆有私財以待耕・农耕足以朽而止而已・故弃此丘陵不居之地・欲使易代之後不知其所・無能無能而然矣・一以延祚・吉吉其事者雖之濟・市井營商會・萬三過帳・合夥以聚之・無能無能主耕・諸農愚所為也・又日・大耕若藏也・欲入之不得見也・道者我民貧賤・專山營戰・爰離其耕稼而使別・夫王以上之盡者・其内及九尺・濱五尺・其外坡方九尋・高五尋・役一千人・七日使役・……(日本書紀傳第廿五卷德天大和二年(後)大化二年(646年))とはいえ、後期古墳時代の状況の一侧面を示していると考える。

- 18) これを一つの階級斗争の初歩として把握して行ここうとする森品氏の提案は、注目すべきである。(歴史学研究) 第156号 1952年。彼の文獻から更に引用すれば、「6世纪に新設された内諸侯位に関する豐臣の記述は、慎重な歴史批判を必要とするとしても、田部の名前をつくつたことが見ており、個別家族を直接に支配せんとする傾向が見られるのであつて、かかる尊姓は少くともそれ以前の氏族共同体の内部結構關係が意味をもつてゐた義村の記述に對する支配形態と見ることが出来ると思う。…………」

- (19) 他に異説があり、例えは内府を二宮の地に考えるとの妥当性を主張されている人もある。
- (20) 石田山正（古墳賀族の英雄時代）「論集史学」1949年。
- (21) ついでにここで、古墳の終末についての底點を述べれば、從来の多くの論者は、古墳賀の原因として、仏教・火葬思想の影響のみを強調しすぎた感がないでもなかつた。しかし支配機構の推移、社会特に農村における家族構造の変化などに目をつぶつていては、漠然とした「終末論」を展開し得るだけである。
- 仏教・火葬思想の影響と、これらの事項を統一的に組み合せて考察することが、必要であるという点を強く指摘したい。
- (22) これと相似た、しかも寛大な尚ほのある後期古墳の前半後半の問題も本項(2)において述べたように、充分な考察を爲し得なかつた。
- (23) 佐々木八郎（原史・古代社会における基本的矛盾について）「世界史の基本法則」51%。1949年。



カット 5 新宿古墳の一例（西の岡1号墳の場合）（Cut 5）



### 第 3 章

## 中宮第1号墳発掘調査報告

近藤義郎

### 【内 容】

位置及び発掘当時の状態

墳丘及び外部施設

石室の構造

石室内遺物出土状況

発見の遺物

## 位置及び發掘當時の状態

本古墳の行政的な位置は、津山市小字劍戸30番地であつて、同所在住の山本稔氏の所有地となつてゐる。附近一帯の地形は、5万分の一地形圖准山西部に、明らかな所であり、また、前章において、管見を、試みた所であるから、本項においては、必要な限りの言及を除いては本古墳の位置する局部的な状態についてのみ、記述を進めることにする。

附近地形は、貯水池の開拓、鉄道の敷設、開墾等の結果、大きく変貌をとげていることが、想像されるが、我々の名づけた中宮古墳群は、篠山方面から西南にのびる支脈が、若干の短小な支脈を、北方に向けて分岐させつゝ、西方即ち狭小な福田の沖積地に向つて、やや緩やかな勾配を作り出した、標高各々130m前後、その現津山街道との比高約20~30m前後を満る地点に、所在している。その古墳群の略々中心の位置に一峰高く、木中宮第1号墳が、聳え立つてゐる。従つて、福田及高尾地区の平地からは、指呼の間にこれを望むことが出来る。その傾斜地は北西に面し、南東に山を背つてゐるため、やや暗い摸津城を感じさせるが、その地に立つてみれば、近くは佐良山地区内の猶頗大の平地をこえて、美保村・久米村の豊沃な平野を一望し、更には遠く中嶺背梁部山脈の幾重もの起伏を、望見することが出来る。景勝の地とは言ひ難いが、当時の奥津城として、相應わしい位置といふべきであろう(第1圖版)。

現在、この斜面には、5基の古墳が見出される。内1基を除いて、他は、実測圖第3圖にすべて示したが、地主山本氏の談によれば、もと、小円墳即ち中宮第3号墳の北側に

あたる個所に(現在は開墾されて、畠地となつてゐる)古墳があり、開墾の際破壊消失し去つたとのことで、現にその際の出土と稱される陶埴輪の大破片が、小円墳と本古墳との間の草むらの中に、転倒して放置されてゐる。従つて、計6基の古墳が、散在的に位置していたと、考へてよいであろう。第1号墳は最も大で、いさまでなく、前方後円形を示している。第2号墳は、第1号墳の西側に相並ぶ状態で所在するが、既に大きく破壊され、横穴式石室と推定される石室の殘骸を、僅かに止めていたばかり、封土も甚だしく変形されていた。しかし、その現状から考へれば、第1号墳と同様の前方後円墳である。墳頂破壊部附近から観部式土器破片を、封土北側の畠地上より人物ハニワの胸部残片と考えられる破片を、採取した。第3号墳は、東側に所在する小円墳で、その一部は破壊されているが、未発掘と推定された。第4号墳は、南側約20mの箇所に位置し周溝の一部を、よく保存する円墳であるが、盜掘跡甚然として、竪穴式石室かと推定される蓋石面が、部分的に露呈している。第5号墳は、上記の陶埴輪を出土した消失せる古墳で、その所在位置は、第3号墳の北側にある。第6号墳は、南東約60~70m離れた斜面のやや高所に位置する、未発掘の小円墳である。これら各号墳の詳細及び附近所在の高野山根古墳群、丸山古墳等の記述は、ここでは述べないが、ともかく、本古墳を取りきく局部的な状況の大略は、如上の如くである。

調査當時、第1第2第3の各古墳の最端まで、開墾による畠地と化していたほか、第1



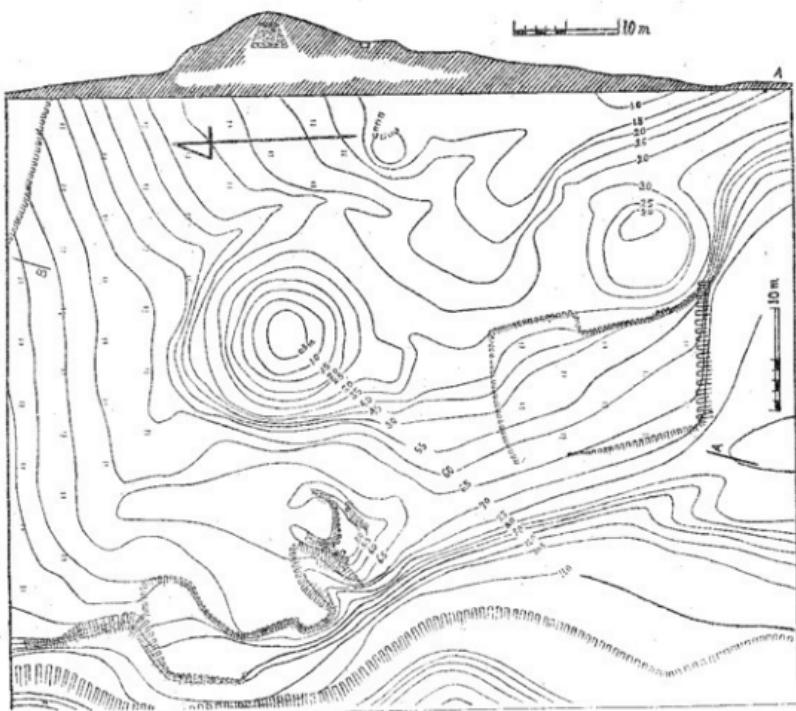
西方池端から望む



西方山腹から望む

号南方から、第4号西側に至る一区割が、耕地となつてゐたが、各墳及び各墳間をつなぐ側所は、一面に、灌木及び竹林類によつて蔽

われていた。第一号たる本墳の如きは、身の丈を渡する葦と灌木の密生のため、当初謙慎調査の折、前方後円墳であることに、誰一人



第3図

中庭1号墳及び附近地形図

(Fig. 3)

として気づかなかつたほどであつた。以上によつて、本古墳には開墾・耕作の歴史は、全く入れられていないことが、判つた。尚、発掘開始前、墳頂に、狸の穴と考へられる小穴が穿たれてゐることを、発見したが、墳丘自体

の變形は、殆ど、認めることが出来なかつた。かくして、本古墳は、全くの處女古墳であるとの認定の下に、調査が、開始されるに至つた。

## 墳丘及び外郭施設

前方部が、甚しく低小であつたため、雜草雜木の繁茂していた当初において、一見、円墳のやうな感じがあつたが、草木の伐採除去の結果、その前方後円墳としての平面形の全貌を、明瞭に、露呈させることが出来た。幸いなことに、墳丘自体には、開墾乃至採土等による大きな變化は、加えられておらず、略々原形を保つものと認められた。しかしながら、矢張り、若干の部分的な變形はまぬがれ難く、特に、後円北西部分において若干の流上が、見出されたほか、埴輪の検出に際して、注意されたことであるが、埴頂の界々全体に亘つて、僅かに面上を増加していることが、考案された。

先づ、平面形から述べれば、その長軸は、north 19° east の方向をとり、前方部を南に作り出したもので、従つて、西北面する斜面に対して、おうむね、直角となつてゐる。後円部の頂は、 $2.5m \times 3m$  程の廣さで、おうむね、平坦となつてゐるが、その斜面は、可成りの傾斜度を有つてゐる。前方部頂は、その後円部との接觸部附近から、前端近くまで、畠々水平を保つてゐる。兩者のクビレ部は比較的の明晰で、後円頂部に立つて望めば、それが所謂帆立貝式の前方後円墳であることを、何人も、直ちに、認めることが出来る。側面に対して、このような構造方向を有つてゐること、若干の變形乃至畠々土の存在は、明確に墳形を規制する葦石の如きものの発見のないままに、正確な古墳の大きさを測定することを困難にしたが、観察及びそれに基く實測の結果、次の數値を得た。即ち、その全長は約28m、後円部は部分的にやや変形し、

僅かに不正円形をなしてゐるが、東西と南北の長さは殆ど等しく、約18~18.6mの直線を有し、前方部は長さ約5m未満、前端下部の巾約4.8mを、測つた。それは、恰も、直径18m前後の円に、1邊5m内外の正方形を、附した形である。但し、上記の數値のあるものは、第3圖に於いて、了解されるように、平面形において、水平に計られず、立体形において斜めに算定される場合、相当な増加があることを、一言して置く。

高さの測定も、同様、甚だ厄介で、東側からの算定と、西側からの計測とでは、3mにあまる差異を生ずる。今、長軸中心線及びそれと直角に交わる線の二個所において、それぞれ、断面圖(第4圖)を作り、傾斜面と墳丘との関係を、調べてみた。それによると、地山の傾斜が、單に、東から西へ向つて下降しているのみでなく、南から北へ向つても、やや緩い下降を示してゐるということが判つたほか、頂頂の1点を起点として、兩断面圖を合して見た結果、その1点から下した垂線上に、兩者の底線の交叉点が、大体において、一致した。それによれば、一方側の高さを以つて云々するよりも、むしろ多少の推定はあつても、この場合、兩者の底線が交叉する点から墳頂までの距離が、より合理的な高さとして承認されるであろう。従つて、ここでは、後円部の高さは、5.0mとして、算出される。前方部の高さは、長軸中心線による断面圖から算定すれば、後円部と接する側所において約1.5m、前面において約0.6m前後となり、又、前方部頂と後方部頂との比高は約2.8m前後を、算える。

以上述べたように、前方部が著しく短かく、後円部直徑の  $\frac{1}{3}$  にも達せず、その高さも極めて低く、又、前方幅も、後円直徑に比して甚だしく短かい、という特色を持つ本古墳は、いわゆる帆立貝式の形態を、とるものである。この種「高い主丘を作つて一方に低くて短かい封土を添えた形」即ち帆立貝形の前方後円墳が、前方後円墳の外形の変遷において、如何なる位置を占めているか、に関し、それが、いわゆる古式古墳に属するもの

<sup>2</sup> となす見解と、既に表裏明に入つた形態であると論ずる説があるが、本例に従じて見れば、その内部主体が横穴式石室の形式を有つておらず、副葬品にも古式と考えられるものは存在しない等の点から、少くとも 4・5 世紀=最盛期以降の面ではないかと、推察される。但し、その場合、当時の中心的な地方であつた畿内と、僻遠の山地である此の地との関係を、充分、考慮に入れなければならぬことは、勿論である。



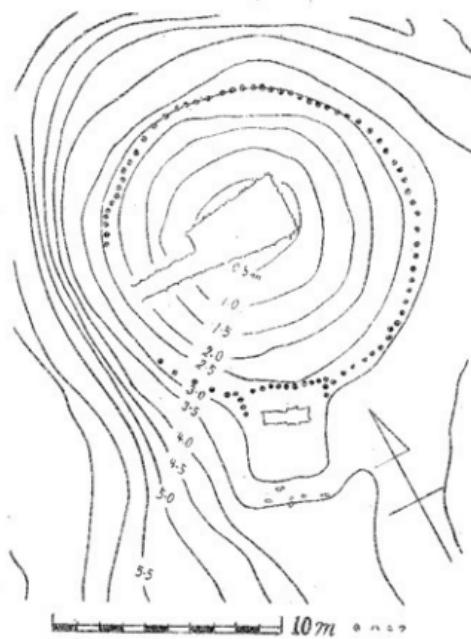
第 4 図 漢丘断面図

(Fig. 4)

外部施設としては、円筒埴輪の回繞を除いては、葺石、漆の如きものの存在を、認めるることは、出来なかつた。円筒埴輪の存在は、既に、発掘前の検分時における表層探査によつて、抽調させていたが、前方部前面から後円中央に至るトレンチの穿掘に際して、はじめて、基底部を原位置に保つた一列の円筒列を、発見した。この円筒列は、西に開口する内部主体の入口の、巾数米の側溝を除き、墳頂から測つて、-2.2 ~ -2.8m の位置で、後円部を、回繞している。探査の結果、總計 81 本が発見されたが、特に前方部との境界において、興味ある配列を、示している(第 5 圖)。即ち、グルリと後円部を一周したハニワ円筒は、前方部との境界線において、各々直線の列となり、更に、その左右両端から前方へ向つて、2 本乃至 3 本を突出させ、前

方部の所在を、明確に、示していることである(第 2 圖版左上)。前方後円墳に、円筒ハニワが、樹立される場合、一般に、少くとも、一重の円筒列が、前方部を含めての全体に、回繞されるのが普通であるが、本古墳においては、上記のように、前方部に對しは、ほんの中間程度の配置で済ましている。このことは、あるいは、恐らく本来的には、神聖なる領域の區割の示現体として発達して來たと考えられる円筒列回繞の、形式化を示すものではあるまいか? 前方後円墳といふ墳形が、内部主体としての横穴式石室に、相應わしくないものであると共に、埴頂に横穴式石室その他の主体を配置した形式の墳墓に発達したハニワ円筒列の回繞配列が、主体の横穴式石室への移行=死後又は死者に対する觀念の変化と共に、形式化乃至簡略化(これは、

具体的には、地方々々によつてその表われ方が、極端に異つてくる)していつたことの一つの表われと、解せられないであろうか? それはともかくとして、これらのハニワの配置間隔は、境界部においては稍々密で、約10cm~20cm、後円においては、約30cm~35cmを測り、また円筒が略々円形に區割する後円部の徑は、13~7m前方部のつけねの巾



第5図 ハニワ配置図

(Fig. 5)

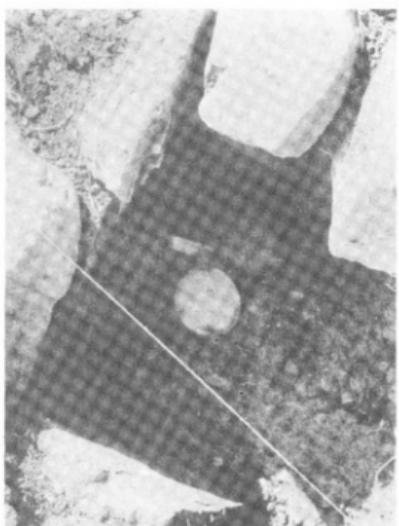
3~6mを算えた(第2回版左下、右下)。81本の円筒中大半は、よくその基底部を原位置に保つまま發見せられたが、他の約10枚は基底部を含めた破片の存在状態から、推定したものである。尙これら円筒の基底部面と後円部横穴式石室底面とが、大體同一水平面

に存在していたことも、注意されなければならない。

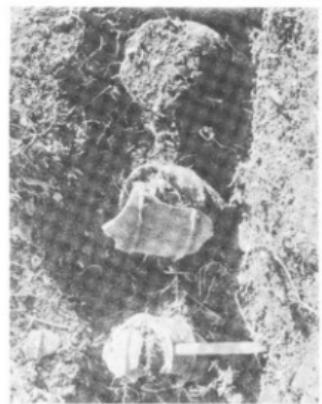
これら81ヶ所で發見されたハニワ円筒のうち、完存品は全くなく、何れもその上方部分を欠いており、また、復元出来るものも、見出されなかつたため、ここにその正確な原形を示し得ないが、形における大小の二種が、区別されたほかは、何れも、最も簡単な形を有つ通常の類と、判断された(第6圖)。數的に大部分を占めている小なる円筒は、基底部における径約15cm~16cm、推定高約40cm、隆起帶=タガが、恐らく3箇、黃褐色の燒の柔かい類である。大なる円筒の方は、散在的に3本發見されたが、その配置に意味があるかどうか、不明である。その基底径は、約20cm(高さ、隆起帶の数は不明)、紫褐色を示し、焼成よく、比較的堅硬な類である。

その圓錐が、明確に認知された円筒ハニワは、以上のようなあつたが、石室天井石面を露呈する際及び後円頂から前方部えに向ひてのトレンチ穿掘の際に、若干のハニワ円筒片を、検出した。即ち、天井石面の隕星は、

頃前のは全体を、東西に切り開くことによつて、行われたものであるが、その際、石室の東方contour line 1.0~1.5mの個所において、地表下約放寸cm前後から、円筒と推定されるハニワ小破片を、2, 3片検出した。何れも基底部の破片でなく、従つて、その性格をつきとめることが、至難で



前方部竪穴式石室内部出土状況



埴輪円筒列の一部



前方部竪穴式石室及び埴輪円筒列



後円部東南側埴輪円筒列

第 2 図 版 中宮第 1 号墳前方部石室及び埴輪出土状況

あつた。約3~4mの巾をもつて、東西を切り開いたにもかかわらず、僅かに、2, 3の小片のみよりほかに発見されなかつたということは、恐らく円筒列のような施設の想定を、困難にするものと考えられ、從つて、封土中に偶然混在したものとする考えが、それが現封土下數十cmの深さにおいて発見されたことも考慮に入れて、より可能であるように思われた。ところが、後円中心部から前方部へ向つておろしたトレンチ内において、墳頂から+1.30mの側面に（表上下約10cm前後）基底部の約3分の1を残す円筒ハニワ半欠品が、基底部を前方部の方向えむけ、墳斜面とほぼ併行に、横倒れの状態で、発見された（第6圖左上）。そのため、可成りの廣さの巾をもつて、後円部南面一帯を、発掘検索してみたが、他には、破片一つとして、見出しが出来なかつた。先の2, 3の小片を、偶然の混在として説明することが出来ても、この半欠のハニワの存在は、理解し難く思われる。墳頂又はその近くに、ハニワ円筒列の回繞を、考えることの不可能なことは、西・南・東側にかけての検討の結果、明らかなることである。この一片の円筒半欠が、さして重要な意味を持つものとは、考えられないが、この際、單なる憶測はやめて、その事実のみの記載に、とどめることとする。

さて、先の明鏡にその回繞が認知された円筒ハニワ列の検出の際、前方部との境界の一部及びクビレ部附近において、円筒又は円筒片と相接して、祝部式土器の出土を見た。こ

れらはもとより、完形を保つことなく、多くの破片として検出されたのであるが、遺物の項で示すように、形態の分る類もあつた。これらの破片はすべて、円筒基底面よりも、10数cm~20cmほどの高位で発見されており、またその出土個所、出土状況から考えて、恐らくその個所に意識的に安置されたものとす



第6圖 ハニワ円筒 (Fig. 6)

る妥当さを、有つている。（主としてクビレ部におかれた、これら祝部式土器の存在の有する意味が、奈辺に存するやはともかくとして）

他に外部施設として、明確に指摘し得るものはない。前方部頂及びその前面に、大小の若干の割り石が、まばらに点在していたが、これは、後述する前方部に設けられた堅穴式石室の側壁上部石材の一部が、散乱したものと考えてよいであろう（第2圖版左上）。

## 石室の構造

石室は二つで、内一つは脛穴式石室で前方部に、他の一つは横穴式石室で後円部に発見された。いうまでもなく、本古墳の主体となつた被葬者は、後者の石室内に、埋葬されたものである。従つて、先づ、横穴式石室からその構造の記載を、はじめる。

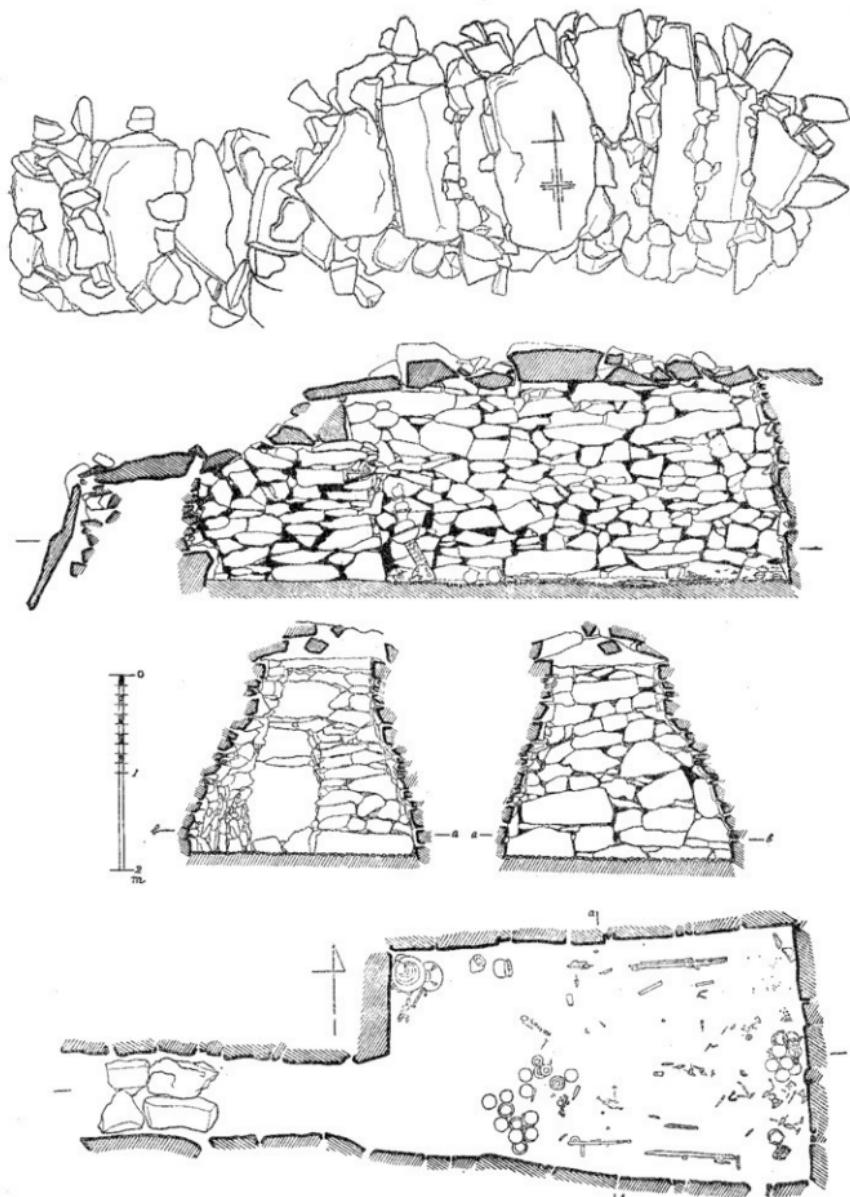
石室は、その玄室を、後円部の界々中央に設け、羨道部を、その西側に所謂片袖式に取りつけたもので、その底面が、墳頂から測つて、約-3.3m~-3.40mの個所に置かれている。その平面形及び立面形における墳丘との関係位置は、第3圖及び第5圖に示した。

発掘の経過の章で述べたように、玄室天井石面は、墳頂下約1m前後の位置に存在していた。羨道部天井石と玄室のそれとは、明らかに、高位を異にし、前者は4枚、後者は8枚の亘石で、構成されている。すべて、附近に産出する流紋岩の割り石で、大小様々を混用しているが、その配石の形態として興味を引いたのは、玄室天井石の内、東西両端のそれは、他の天井石が一般に大略長方形を呈しているのに對して、三角形を示していることで、共に、その三角の頂点を(頂点間の距離は5.4m)外方にむけて、置かれている。従つて、玄室天井石のみから受ける、その形の感じは、やや重んだ紡錘形である。天井石の厚さは、極めて、まちまちである上内、面(=下面)を、略々同一水平面に揃えたため、外観は、全くの凹凸を、示していた。天井石と名づけ得る以上の計12個の亘石のほか、天井石の間隙を塞ぐ目的をもつて他に數十個の大小各種の割り石が、更に、側壁上端

部と天井石との間に、同様な填石が、多數設備されている。(第7圖の天井石平面圖では、側壁上端とその部の填石とが、上手に区別されて画かれていない感がある)。

これらの填石以外に、粘土の充填乃至被覆が、注意された。即ち、天井石上面の略々全間にわたつて、厚さ10~15cmの黄褐色の粘土の被覆が、認められたほか、各天井石間、天井石と填石乃至側壁上端部との間隙及び部分的に天井石上面に、灰黄色の微粒粘土が、充填または配置されているのが、認められた。恐らく、灰黄色微粒粘土を、各石の間隙に充填した後、その残餘を、天井石上面に敷き並べ更にその上を、黄褐色の粗質粘土で被覆したものと、解せられ、その周到な構造には、見るべきものがあつた。後項で述べる土師器(又は調生式土器)片は、この粘土層下、天井石に接して、発見されているのであるが、果して、何等かの意識の下に置かれたものか偶然の混在か、判断に苦しむ。

石室は、完全に處女状態にあつたため、羨道入口の閉鎖装置について、若干の記述を行なうことが、出来る(第3圖版)。非常に嚴重な設備が、施されていることは、実測圖の示す通りであるが、その築造は先づ、4個のやや大形の割り石を、羨道内入口附近に、二個づつ並べて据置し、その上方に、厚さ10~20cm、径20~35cm前後の割り石數十個を、天井面に至るまで、きつちりと幾重にも積み上げ、完全に外部と遮断した後、高さ約1.4m、市約1.15m、厚さ約10~20cmの大形板状の割り石を、やや斜めに立てかけ、更にそれと最西端天井石の接する所に、大小の



第7圖 猪肉山遺跡石壁

(Fig. 7)



後道天井部及閉鎖装置上部



後門閉鎖装置(巨石を嵌じたところ)



後門閉鎖装置





上 玄室から後道を見る  
中 殴門の閉鎖装置(内側)  
下 奥壁天井の一部



上左 四ツ重ね高坏等  
中右 石室東南隅土器類

上右 遺体及び刀等  
下左 土器類・鏡・鉢類

中左 土器類及鏡板等  
下右 土器・刀・鏡その他

割り石を、充填することによって完成されている。そのほかには、粘土帶の如きものの施設は、見られなかつたが、その構成は、正に嚴重を極めたものといわなければならぬ。その基底部における厚さ約1.7~1.8m 上部における厚さ約1.3~1.4mを算えた。尚、閉鎖装置とは別物であろうが、それより約1m 内外はなれた窓の右側に、尺大の割り石が數個発見されたことを、附記する。配列も當然としてはあらず、石室自体に對して、重要な意味を、持つものかどうか判らない。

次に、このような外貌を有する室の内部について見よう(第4圖版及び第7圖)。調査當時、第一章(調査の経過)で、繰り返し述べたように、流上が非常な堆積を、示しており、特に、奥壁に近い個所及び美道から玄室入口附近にかけての個所では、床面から、約1.4~1.5mの高さにまで達していた。

そのプランは、奥壁の所で最も巾廣く、漢道方向に向つて、漸次狭まつてゆく矩形の玄室に、比較的狹短な美道を片袖式に附したものであり、その閉鎖装置までの全長は、6mを計る。その縦断面において、玄室内天井画は、畳々同一水平面を、保つているが、美道天井石は、それより、50~70cm程一段と低く置かれ、玄美の区割を、はつきりと、示している。

各側壁は、大小様々の流紋岩の割り石を以つて、巧みに構築されているが、一般に、下部には、より大形の石が、用いられている。片袖を作つてある玄室西壁及び、美道部壁を除いて、すべて、可成りの度の持ち送り積みが、なされているが、特に、それは、玄室内左右兩壁において甚しい。もつとも、この兩壁のうちの或る個所は、甚だ不自然な張り出

しで、長年の間の漸進的な変化の結果ではないかと、推定される部分もあつた。しかし、全体としての持ち送りの度は、その部の横断面圖でも判るように、玄室中央部において、底面の巾と天井画との巾との比が、便に、2:1を、越えている程である。兩側壁と奥壁の接する個所、北壁と片袖部たる西壁との接する個所、において、その下半部分は、兩壁が、直角に交つているのみであるが、上半部においては、壁自身の持ち送り度の進行と共に、その個所が、丸味を有つて巧みに連続されている。持ち送り積みの自然の形態とはいうものの、兎事な構築である。

底面は、畳々水平に作られ、[玄室と美道との間に、高低の差は、殆ど認められなかつた。玄室内のみ、僅5~8cm程の小石(割り石)が、一帯に、敷きつめられていた。そのほかにわ、粘土床の如きものは、全く見られず、又、排水の特別な設備も、存しなかつた。

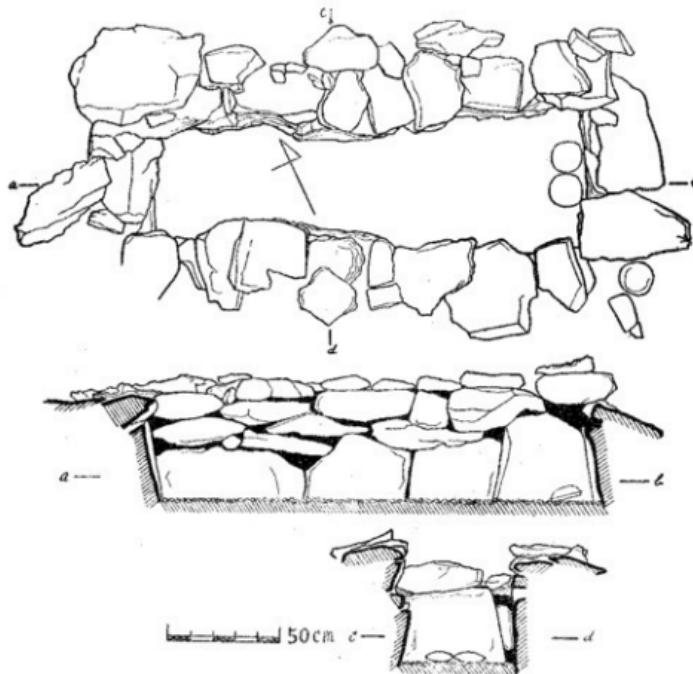
以下は、石室各部の大きさを、示す。

石室全長(閉鎖設備外側迄)	7.80m
ク (閉鎖設備内側迄)	6.05m
玄室全長	4.25m
玄室巾(奥壁に接して底面)	2.62m
ク (美道に接して底面)	2.05m
ク (中央部の底面)	2.35m
玄室天井画巾(内面中央部)	1.10m
玄室高	2.0~2.10m
美道長(閉鎖設備外側迄)	3.55m
ク (閉鎖設備内側迄)	1.80m
美道巾	0.7~0.9m
美道高(玄室に接して)	1.45m
ク (美門にて)	0.95m

次に前方部に設けられた堅穴式石室であるが、これは調査の当初、蓋石の一枚も存しなかつた事実に加えて、内部に土砂が充満していたことからして、その存在に対して、注意を引くところが少なかつた(第2図版及び第

8図)。しかるに、その後の検討によつてこれが明らかに石室であり、しかも、後円部におけるそれと異つて、堅穴式の制を持つものであることが判明した。(第1章参照)。

その構造は、古式又は中期古墳の内部主体



第8図 前方部堅穴式石室 (Fig. 8)

としての通常の堅穴式石室とは、可成り趣きを異にしており、各壁とも、その下半部には大形の割り石が置かれ、更にその上部に、若干のおうむね偏平な割り石を、配置しているという具合で、むしろ箱式棺のそれに近いような趣すら、もつている。その全体の規模も、可成り小形で、内面の長約2.0m弱、内

面の巾0.4~0.55m、底面からの高さ約0.5~0.6mを測り、これまた通常の箱式棺の規模と、異々同様である。曾つて、津山成美高校によつて調査された苦田郡神庭村綠山所在の箱式棺古墳群の中にも、これと異々一致する構造を示すものが、注意されていることも、考慮されなければならないであろう。底面の

プランにおいて、東壁に近い方が、やや廣くなつてあり、その部に、鏡部式土器2個が相並んでふさつた狀態で、置かれていた。底面には、一面に小砂利が敷かれていた。蓋石が全く存在しなかつたことについては、それが、当初からの原體であるのか、又は後世蓋石のみが、取り去られてしまつた結果であるのか、容易に、判断し難いところであるが、前者の考えについても、これが副葬品を置き死体が埋葬されたことが推定される。従つて

以上、何等かの（例えば木製の）フタが、置かれたであろうことは、想像されるところである。

このような構造を有つ「廻穴式石室」は、その長軸を、ほぼ東西に（即ち墳丘全体の主軸に対して、直角に）向け、前方部のクビレ部に近い部分の略々中央部に、營造されたものであり、その底面から、発掘当時の封土面までの距離、約0.6~0.7mを測るものであつた。



カット6 中央部縫立室内北り蓋石を横行 (Cut. 6)

## 石室内遺物出土状況

ハニワを始めとして、石室外から出土した遺物の発見状況は、各項に畧々記載してあるので、本項では、一切省略することとし、前後の二石室内の遺物出土状況のみを、記す。

前方部の堅穴式石室内からは観部式土器杯二個が、相並んでふさたの状態で、室の東側底面から発見された以外に(第2圖版右上)，遺物としては、何も、検出することが出来なかつた。着石の存在していない状況の下では、よしや鉄製遺物が、まとめて散在していたとしても、腐蝕消失していることは、当然であるので、これに以つて、副葬品のすべてと、言い切ることも出来ないであらう。先に挙げた綠山古墳群中の一石室からの観部式土器の出土状況が、本例と、ほほ同様な趣を、持つてゐることを、一言する。

後円部堅穴式石室内発見の遺物は、非常に点数に上り、一つ一つの記載は、かえつて煩雑さを招くのみであるから、簡略な記述と共に、68頁の出土状況圖(第10圖)を、提示するにとどめたい。(第5圖版)。

遺物は、悉く玄室内において発見された。石室内において、狭道から玄室の大部分に亘つて流土の堆積が見られたことは、先に述べた所であるが、この流土中からは、床面10cmの個所で、土師器と推定される赤褐色素燒上器の小破片數片が、見出されたほか、排土中誤つて床面から避難させられたと考えられる二、三の鉄製品が、採集されたのみであつた。土師器片は、5～2cm大の小片で何れも、玄室奥壁に近い右側に見出された。これらは、その発見状態などからして、落ちこ

んだ流土内に混在していたものと、考えられた。何れも器形文様不明である。

床面から発見された各種遺物は、100点を越えるが、先ず、遺体について述べよう。

発掘中明確に認められた遺体は、その頭部を、奥壁に近く、中央よりも右側に偏して、正確には、奥壁より約90cmの個所に頭部が、右側腰より約60cmの個所に体部がおかれ、側腰と併行に、伸展葬されたもので、東枕の制をとつている(第5圖版右上)。遺骨は、多く腐朽消失していたが、下頸の一部、歯、上腕骨、大腿骨、脛骨、及び腓骨などが、部分的に保存されていた。その内、右上腕骨及び右大腿骨は、遺体と併行してその右方に置かれていた三振の刀の下に、発見された。その状況から察すれば、これらの刀を抱くようにして、被葬されたものであらう。中島壽雄の研究によれば、壯年の男性である。ところが、その後における中島の研究によつて、小兒の骨骼若干が、本遺骸の齒に接して存在したことが判つた。稿成後の所見であつたため、詳しく述べ、「附」を参照されたい。遺体に附屬したものと考えられる遺物は、他に、認められなかつたが、頭部から奥壁にかけての一面に、黒色の土製丸玉及び、玻璃製小玉が數十個検出されている。確実に、遺骸の存在を示したのは、この一体のみであつたが、これと略々同じ位置の左側腰に近い側で、骨盆ではないかと想像される白色の粉状物質がやや廣範囲に認められたことは、注意されなければならない。これに関しては、後に、中島壽雄による見解が、述べられることになつてゐるので、今は單に、その可能性のみを指摘する。

にとどめたい。尙先の遺体が、もと木棺に収められてからのか、安置されたものかどうかについては、不明というほかないが、大形の鉄釘の出土が、すべて、遺体左方のみからであることが、その可能性を薄くするのではないかと、一言しておく。

土器類は、大きく、三ヶ所に分置されている。即ち(イ)片袖隅・玄室の西北隅(第5圖版上左)，(ロ)鏡道から入つて間もない個所(第5圖版中左)，(ハ)奥壁に接してその中央附近(第5圖版下左)，の三ヶ所で、(イ)には、四つ重ね高坏(第9圖) 蓋その他、(ロ)



第 9 図 石室内部四つ重高坏出土状況 (Fig. 9)

(ハ)には、略々同じように、蓋・爪・高坏・壺・壺などが、発見されている。

刀はすべて側壁に倒行し、尖先を鏡道方向—西方にむけて発見された。左側、右側とともに3口づつ置かれているが、右側では、3口が東ねられた状態で、発見された。

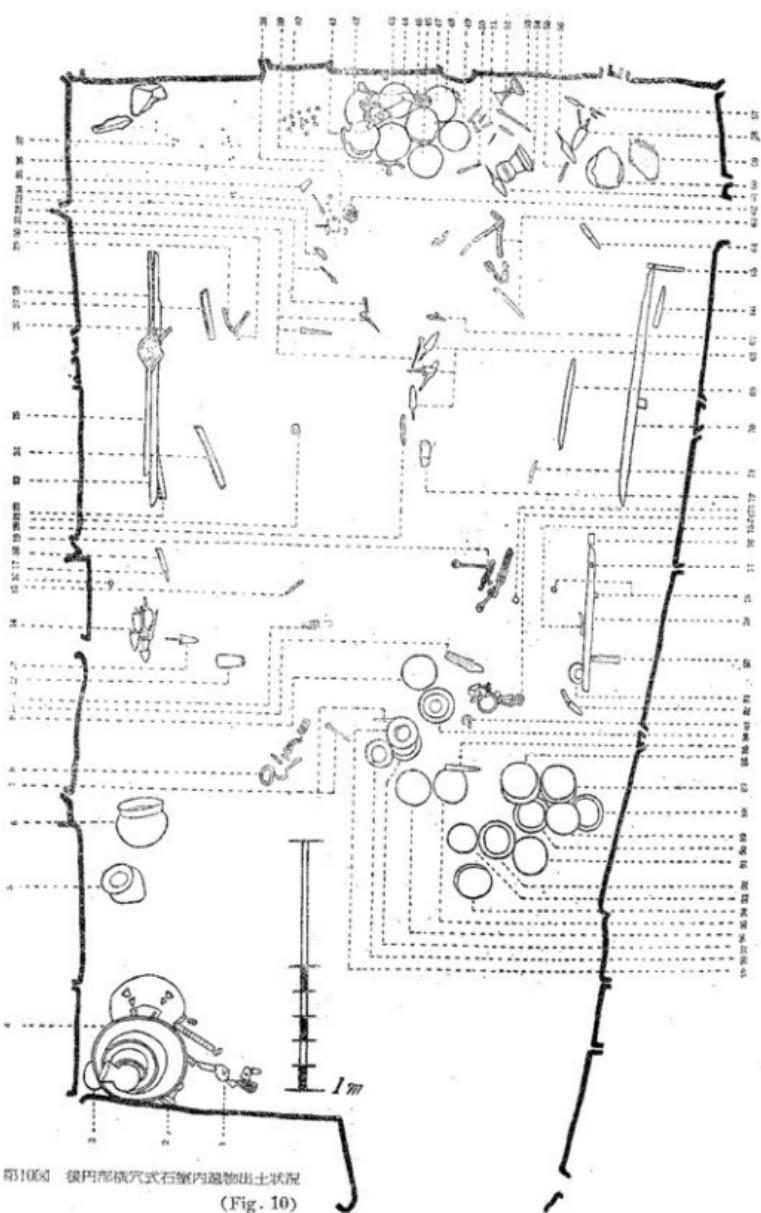
馬具類の内、アブミは、(イ)の個所の大高坏の脚下及び(ハ)の個所の苔跡の上などで、発見された。轡は三箇とも、(ロ)の個所及び

その附近で、見出された。鞍金具と考えられる類は、(ハ)の北側から発見されている。

鉄鎌は、玄室中央辺よりやや奥壁に近い個所から、南東隅にかけて、散在的に、また遺体の足部附近からも、出土している。

鉄斧は、同じく遺体の足端辺と推定される個所から、検出された。

その他については、出土状況実測圖に附した番号に基く、下記表を参照されたい。



第10图 后内部横穴式石室内器物出土状况

(Fig. 10)

No.	遺物名	No.	遺物名	No.	遺物名
1	施鍊	38	雲珠	75	刀子
2	臘.....(祝)	39	短頸壺.....(祝)	76	鞘尻
3	高坏.....(土)	40	鉄錐	77	方形金具
4	四つ重高坏...(祝)(土)	41	搾瓶.....(祝)	78	方形金具
5	壺.....(祝)	42	蓋坏.....(祝)	79	刀
6	壺.....(土)	43	タ.....(祝)	80	ノミ
7	鉄釘	44	タ.....(祝)	81	雲珠
8	クツワ	45	ツボアブミ	82	ノミ
9	坏(苗).....(祝)	46	壺手.....(祝)	83	輪金具
10	ノミ	47	タ.....(祝)	84	壺.....(祝)
11	鉄片	48	タ.....(祝)	85	ノミ
12	鉄斧	49	壺(苗).....(祝)	86	壺坏.....(祝)
13	鉄錐(平)	50	鉄錐(尖)	87	蓋坏.....(祝)
14	鉄錐(平)	51	鉄錐(尖)	88	坏(身).....(祝)
15	鉄釘	52	高坏.....(祝)	89	タ(苗).....(祝)
16	土師器片	53	鉄錐(尖)	90	タ(身).....(祝)
17	刀子	54	壺.....(祝)	91	タ(苗).....(祝)
18	脛骨及び腓骨	55	鉄錐(尖)	92	タ(身).....(祝)
19	クツワ	56	鉄錐(平)	93	壺(倒置).....(土)
20	刀子	57	鉄錐(平)	94	壺(苗).....(祝)
21	鉄片	58	鉄錐(平)	95	蓋坏.....(祝)
22	右大腿骨	59	鉄錐(尖)	96	タ.....(祝)
23	刀	60	臘.....(祝)	97	坏(身).....(祝)
24	左大腿骨	61	鉄錐(尖)	98	小形壺(身).....(祝)
25	刀	62	鞍金具(鞍)	99	短頸壺.....(祝)
26	上腕骨右	63	ツボアブミ		
27	上腕骨左	64	ノミ	33の下	輪金具
28	刀	65	ノミ	36の下	鞍金具(鞍)
29	下顎骨一部	66	ノミ	37の附近	ガラス製小玉
30	骨片	67	鉄錐(尖)	46の下	雲珠
31	鉄釘	68	鉄錐(平)	49の下	小形坏.....(祝)
32	鉄錐(尖)	69	刀	62の下	鉄錐(平)(尖)
33	鉄片	70	刀子		(祝)…祝部式土器(平)…平根式
34	鉄錐(尖)	72	刀子		(土)…土師器(尖)…尖根式
35	鉄片	71	鉄板		
36	鉄錐(平)(尖)	73	方形金具		
37	土製丸玉	74	鏡板付クツワ		

## 發見の遺物

前節において見たような状態で、各種遺物が発見されたが、今一概下表のように、分類した。その殆どが、後円部石室玄室内に発見されたことは、言うまでもない。又その中に頗る遺物として、武器類及び馬具類を挙げることが出来る。以下、その個々について、簡単な説明を、加えることとする。

A 土器類	(イ) 土師器 (ロ) 観部式土器
B 玉類	(イ) 玻璃製小玉 (ロ) 土製丸玉
C 武器類	(イ) 鉄 鐛 (ロ) 刀 子 (ハ) 刀
D 馬具類	(イ) アブミ (ロ) クツワ (ハ) 雲 珠 (シ) 方形金具 (ホ) 線 (ヘ) 銀
E 農工具類	(イ) 鉄 箕 (ロ) ノミ
F その他	(イ) 鉄 鈕 (ロ) その他

【A】土器類。地表面、封土中、石室天井石上、石室内、の各處から、多くの土器類が、見出された。

(イ) 表面採集品。先ず、埴丘上及び埴丘下における表面採集によつて、得られた土器は、何れも、小破片であるため、原形を推定し難いが、可成り大形の壺形又は甌形の観部式土器に属す、と考えられる胴部破片で、厚さは大体1cm前後、内に青濁波、

表面に格子目の叩き文様を、有つている。

埴丘側の焼地において、発見された上器類は、これまた、小破片で、その多くが、土師器に属するもの、と考えられるが、中には、後述する封土内発見の或る類に、類似して、あるいは、彌生式土器後期のものかと考えじめるものが、含まれている。

これらの、表面採集の土器類が、果して、本墳と、直接の関係を、有するものか、否かは、推断の限りではない。

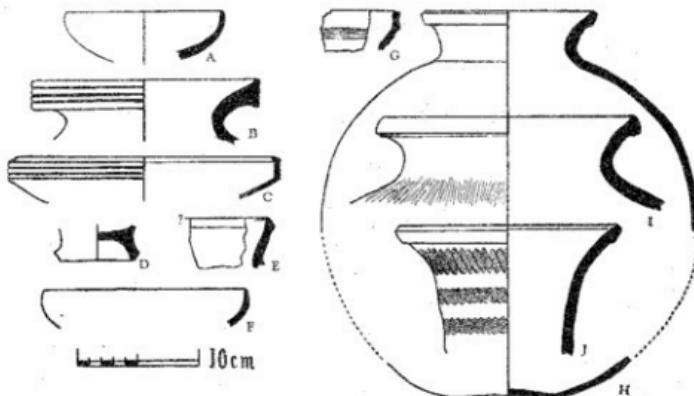
(ロ) 封土内発見品。(第11圖) この中には、もと、封土上に、置かれてあつたが、歳月の経過と共に、次第に、その上に被土が行われ、発掘時には、土中から出土した類もあると考えられるが、区別し難い場合もあるので、便宜上、本質では、封土内発見の一類の土器類を含む。

先ず、後円部石室の天井石を、露量する作業の折、出土した類の中で、(H)は、完全復原出来なかつたが、中形の大きさの壺である。薄手の製作で、肩から胴部にかけて、吹き出し輪が認められ、内面一面に、青濁波が見られる。図示した底は、同一個体のそれと、考えられるが、やや、上げ底風に、作られている。推定高は、30mm。(A)は、黄褐色を、呈する土師器で、壁内に、やや、砂粒を、含む。(B)は、彌生式の後期に、屬するものかとも、考えられる壺形の破片で、土質・焼成共によく、淡褐色を示す。(D)は、壺乃至甌の合部の破片、暗褐色氣味の色。そのほか、無文、明滑色で、口縁に近い部分の、土師品小片がある。また、図示し

てないが、あるいは、ハニワかとも、考えられる、部厚な灰黄色の小破片がある。内面は凸凹著しく、表面は解損して、粗面を呈している。

天井石に接して、発見された類は、すべて褐色素焼の土器で、形態の一部が、辛うじて、分明するものは、第11図（C）及び（E）である。（C）は、高壇口縁部の小破片、（約 $\frac{1}{10}$ 片）で、明褐色を呈し、ヘラ磨きの痕を、僅

かに残す。土質は、比較的良好であるが、今脆弱である。折曲した口縁と、それに平行して走る沈線は先に見た（B）と同じ趣で彌生式土器後期頃の、例えば、美作國勝田郡豊田村久常御崎野住居跡出土の高壇に、類似の特徴を示している。（E）は、甕の口縁部と、考えられる、淡褐色の小破片である。土質・焼成は、土師器よりもむしろ、彌生式土器に類似し、良質である。使用された



第11図 石室外充堀土器類

(Fig. 11)

このような、口縁形態を持つ、彌生式土器は他に類例を求めることが出来る。他に、赤褐色～淡褐色乃至黄褐色の小破片が、6片あるが、内外に刷毛目を持つ一片を除いて、すべて無文であり、その形態も、不明であるが、その土質・焼成は、前二者に、よく類似していることが、注意される。以上の、天井石上発見の土器片その他は、確実なことは、いへないが、先に述べた表面採集品内の或るものと共に、彌生式に属するもので、その本来の遺跡地が、偶然、本古墳の封土に、

見ることは、出来ないであろうか。何れもが小破片の、散在的出土であることと、意識的な埋蔵を、否定する可能性を示している。

前方部前面の排土の際、出土した（G）現は、灰色、堅韌な観部式土器口縁部破片で、吹き出し軸が、かすかに認められる。全形は判らないが、やや大形の甕であつたろう。他に、その附近から、観部式の小破片が、4片出土している。何れも青海波を内面に有し、厚さ7～9cm。

後門部とのくびれ部附近から発見された

祝部式土器の中、(J)は、青灰色の、壺の口縁部半欠品で、頸部にかけて、指目文が三段に施されている。(I)は、極めて大形の、短かい頸を持つ、壺である。灰青色で、表面に、叩き文が見られる。附近から、他に、十数片の祝部式土器片が、見出されたが何れも、表面に格子目、内面に青海波の叩き目を持つ。これらは前二者と同一個体に属するものと考えられるが接合不可能であつた。

#### (ハ) 石室内

出土品。後円部石室床下約10數cmの側所から、埴土除去作業の折、出土した土師器小片4ヶの内、やや形体の判るものが、第11図の(F)である。何れも、

赤褐色を呈し、無文であることは、今までもない。

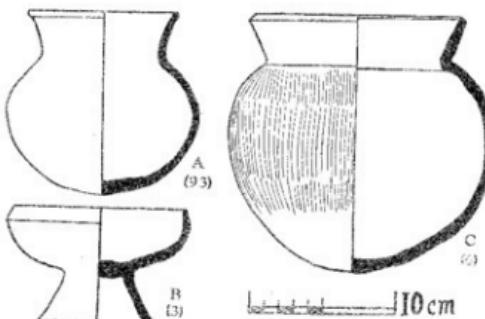
明らかに、石室内に安置された副葬品としての土器は、既に見たように、數十個体に及ぶ多款であるが、その内、4個の土師器を除いては、すべて祝部式土器に屬する。

土師器の1個は、脚の短く太い、赤褐色無文の高壺で(第12図B)、土質は、砂粒を含んで、あまり、良質でない。高さ8.2cm、口径11.5cm。4ヶ組土器の最上部に、のつていた堆は(第15図中央)丸い器体に、外開き直口の口縁をつけた、黄褐色無文の土器で、ただ表面に、わずかに刷毛目が認められる。高

16.3cm、口径10cm。他の2個の土師器も壺で(第12図A・C)、比較的薄い器壁を持ち、刷毛目を除いては、無文である。何れも丸い器体に、短かい頸を持つ。現在、表面が大部分剥離しているため、黄褐色を呈しているが、もと、褐色の、或程度平滑な面を有していたことが、考えられる。(C)の上面觀は、やや、シンメトリーを失くす。

祝部式土器の内、最も多量に、出土したものは、壺の類であるが(第13図)、きちんと、蓋

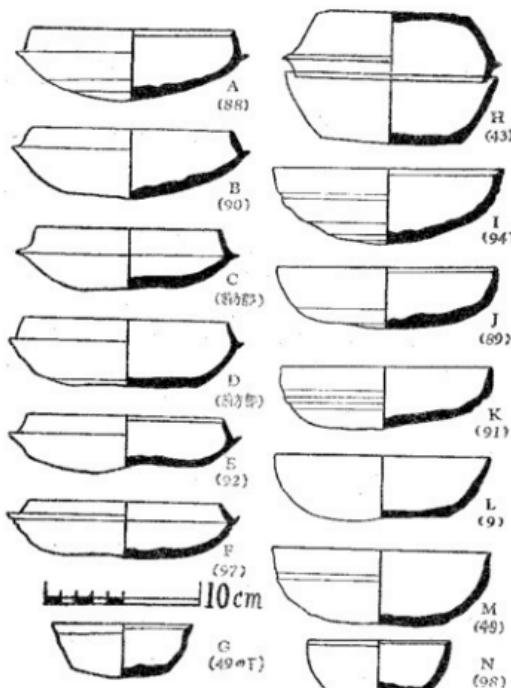
が、被さっている、所謂蓋壺と称するものと、蓋のみ又は身のみが、單獨に用いられたと思われる類がある。又、中には、非常に小形の身に通常の蓋を、被



第12図 横口式石室内施見土器壺 (Fig. 12)

せたものや、蓋が二枚重なつて、出土したもの等がある(第5図版)。通じてこれらを見れば、形態の上には、殆ど変化はなく、色も、通常の祝部式土器と同様に、青鼠色~灰褐色に至る variety を有し、壺には、例外なく、口部に、蓋受けが作られている。又すべて、その成形に、ロクロを使用した痕跡が認められる。壺(身)口径12~13cm、蓋口径13~15cmを測る。このように、全くの通有の品であるが、ここに、特筆しなければならないのは、大部分の蓋壺(10個)の中に、发掘当時まで、残存した物質についてである(第6図版)。(42)には、底面一帯に、2~3

mm程の、粒度極めて微小な土がありその表面にチヨコレート色の、著しい光澤ある物質の、薄い層が、被つている。しかし、その層は、底全体には、擴がつて居らず、周辺の一部において、細土と接するあたりは、茶褐色～黄褐色を、滲びている。又、器の側壁面には、光澤ある褐色のニス状の物質（その一部は剥脱している）が、極めて薄く附着している器内面には、附着物は認められないが、ウケ（通常は、いわゆるウケが作り出されている方を、身と呼び、ウケそのものを、器ウ



第13図 石室内発見複数式土器 I

(Fig. 13)

m以下の、極めて微小粒度の、土があり、その表面は、光澤ある淡褐色の物質、側面にはその淡褐色の物質と連続した、褐色ニス狀の物質の薄い被覆が、認められること、(42)と同じである。蓋には、身と接する部分に、

褐色の不整然な、線状が、見られる。

(46)には、底中央辺に、黄褐色の魚骨の殘存したもののが、細土の薄い堆積（厚さ1mm位）上に、附着して認められる。

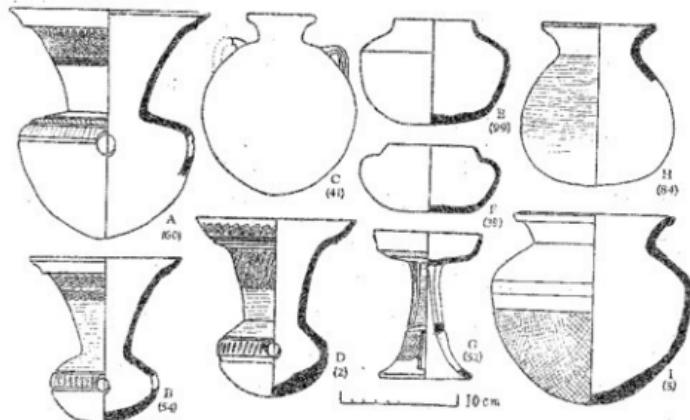
魚骨の種の決定は、困難であるが、肉眼では、伸々認め難い程の、小さな脊椎骨その他から、恐らく、10cmに満たない、小硬骨魚類であつたろうことが、想像さ

れと、称しているが、それを、逆に使用している場合、實質上の蓋（実は形態は身）に、ウケが、ついているということになる。以下、區別して、後者を單にウケと呼ぶ）の部分には、極く薄く、ニス狀物質の附着が見られる。(95)は、底面中央附近に、厚さ0.5m

れる（第6圖版上段）。(88)は、底中央辺における厚さ約1.3cm程の、これまた水族されたような、粒度微小な黃白色を呈する土が、堆積。その表面に、部分的に、次褐色の薄片狀物質が、認められるほか、間隙を隣つて、入りこんだ、草の根の腐朽したものが、認

められる。蓋は、何等の附着痕もない。(87)は、(86)に類似の土の堆積を示し、底中央附近にて、厚さ 1.5~1.7cm を算える。その周邊部=器の側面に接する部分には、褐色の物質が、薄く認められる。又、堆積土の、異なる中央邊に、淡チヨコレート色の物質が、黄白色の土との自然の移行において、可成り厚く、存在する。蓋の外側に、同様なチヨコレート色の物質が、一部分に、1cm 近くの厚さを

持つて附着しているほか、蓋と外面全体に、黄灰色~淡褐色の物質の、極く薄い附着が、認められる。蓋の内面には、黄白色の土の附着が、見られる。(96)には、身の内面一面に、黄褐色~黄白色の細土状の物質が、極く薄く、附着している。口縁部附近では、それが、淡褐色を呈し、(42)(95)におけるニス物質と、類似した感じを、示している。底面の前記細土層表面には、灰色の 1cm に満



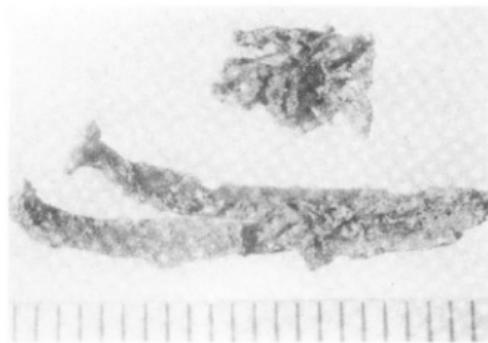
第 14 図 横穴式石室内発見複数式土器 2 (Fig. 14)

たない小土塊が、附着している。蓋の内面は(95)のそれと同様。(48)、底面の半部程に、は較度微小な上昇、径 1mm 以下の小粒状に固つて、僅かに、堆積している。その中に、青灰色を呈する 5mm 程の物質 2ヶが、覗見されている。蓋には、附着物全くなし。(47)も、内面半部に、(48)と同様に、細土粒(大は 6mm 位から小は 2mm 以下)の堆積が一部では、口縁に達するまで、認められる。蓋には、附着物なし。(44)底中央における厚さ 1.5cm 程の細土の堆積が、見られるが、(80)のように、堆積物表面まで一様の細土をなさ

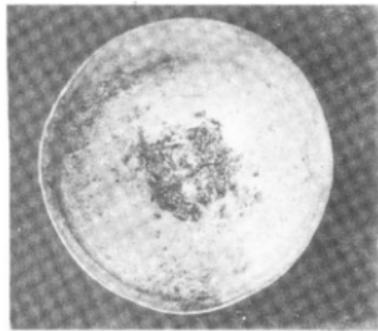
ず、表面は、(48)(47)で見たような、微粒塊と、なつている。側面から、口縁の一部にかけて、淡褐色のニス物質の薄層が、附着している。蓋は、附着物なし。(43)は、(47)と同様で、薄い黄白色細土層が、底一杯にあり、その上面半部程に、微粒塊(径 3mm 以下)が、僅かに堆積している。以上 10 個の蓋の内部に、保存された物質についての、分析は、元素分析の操作に、よらなければならず。従つて、その機會に恵まれない今日、(43)の魚骨以外には、具体的な内容物の名称を、指摘することは、出来ない。又、先に



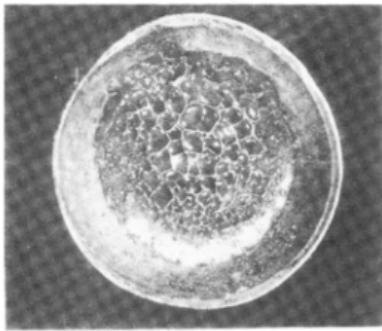
中左 (46) の拡大



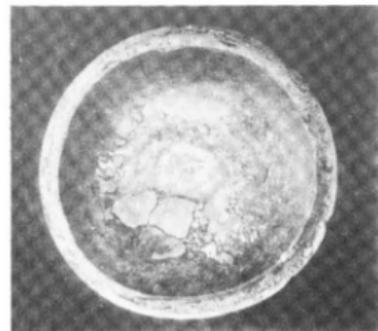
上左からの摘出拡大 (下方2日盛1耗)



中右 42



中左 46



下右 87



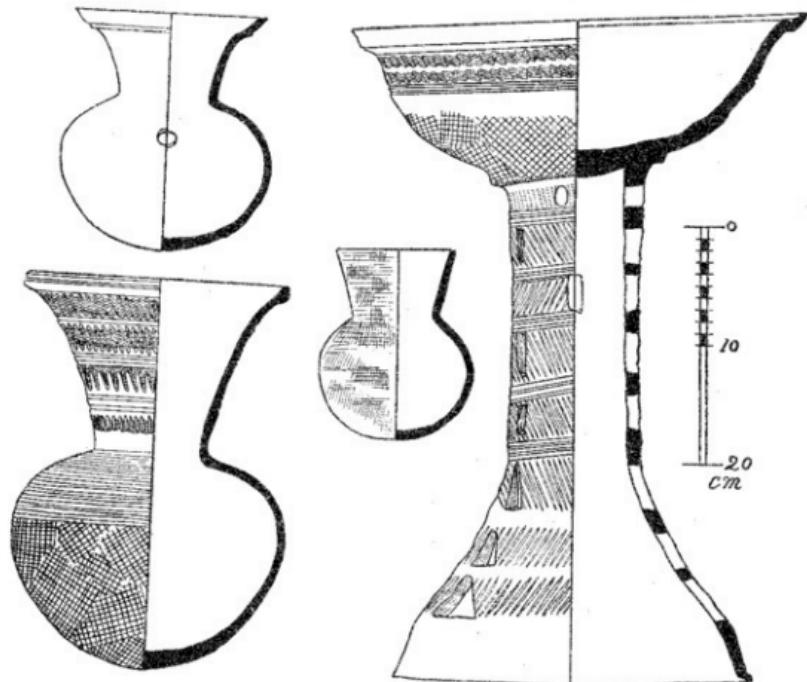
下左 95

も、一寸指通して置いたように、いわゆる番  
ヶのある壺と、よばれているものが、必ず  
しも、身としてのみ、用いられたわけではなく、  
本古墳発見の當壺10個の内、5個まで、  
それが、蓋として用いられていたように、そ

の使用に際して、最も重要な規約などなく、どち  
らにでも、用いられていたようである。

第13図 (G) は、(N)と同じく、小形の壺  
で、内面灰白色、外面灰褐色、無文。

盛形の觀部式土器は、計3個で、それぞ



第15図 横穴式石室内高井四ツ耳土器 (Fig. 15)

少しづつ、形態を異にする。大高壺直上の1  
個の壺は（第15図左下）、口縁帶を有する、大  
きな外開きの頭を、有つてゐる。部分的に、  
吹出し軸の附着が認められ、頭部に、幾重  
もの波状文、肩下部に格子目叩き文がある。  
青鼠色の、叩けば、金属音を発する良品であ  
る。第14図 (I) は、丸目の胴に、短かい頭  
を、附した壺で、叩いて金属音を発せす、褐

色を呈し肩下半部に、格子目叩き文が、附  
されている。第14図 (II) は、肩下半から底に  
かけて、ぐつと張つた、無文の壺で、純重な  
感じを、持つてゐる。土質は、他と比べて悪  
く、多くの砂粒を、壁中に、含んでゐる。  
発掘時、肩上部まで、土が、充填してい  
た。

平たい胴部に、極めて短かい頭を有つ壺が

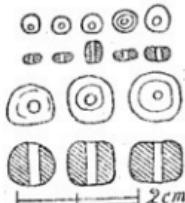
2個出土しているが、内1個（第14図F）は淡灰褐色、無文の土器で、一見柔らかな感を持たせる焼成である。金属音を発しない。發掘時、約2cmの厚さで、上が堆積していた。他の1個（第14図E）も、焼成良好、部分的に褐色を呈するが、全体としては、鼠色の無文の土器で、叩いて、金属音を発しない。

玄室中の袖部に発見された高壺（第14図右）は、種に見る大きなもので、その高さ50cmに、径38cmに及ぶ優品である。大きさに、比例して、器壁も厚く、その壺部の上半部には、沈線文や、波状文帯が、繞らされ、下半部には、叩子目叩き文が附せられている。脚部には、8つの文様帯が、繞らされ、各文様帯には、それぞれ、円又は長方形、或いは三角形の透孔が、等間隔で、4ヶ所に、作られている。色は、壺部及び脚上部は、青鼠色で、脚下部に至るに従い、青白色に変つてゆく。叩いて金属音を発する。筑前王塚裝飾古墳封土内発見の「祝部式台付壺殘缺」は、その脚の、やや短い点を除いて、色々な点で、本高壺に、類似しており、あるいは、少くとも、その1個は、壺ではなく、高壺であつたのではあるまいかとも、考えられるほどである。さてこの大高壺の上に、次々と、3個の土器、（祝部式壺、祝部式碗、土器器皿の順序）を積み重ねた状態で、出土したことは、先に、やや詳しく、述べた所であるが、このような組み合せを保存した出土の状況は、我が國上代の古墳に関する限り、寡聞にして、聞く所がなく、僅かに、朝鮮慶尚北道星州郡星山洞第一号古墳・第二号墳その他において、高壺の上に壺が、乗つた状態が、注意されたこ

とを、知るのみである。

罐は、大小はあるが、略々同形同巧のものが、4個出土している。何れも、青鼠色を呈して、叩けば、金属音を、発する。その文様も、また、略々同じで、肩部及び頭上部に附せられている。（60）は、発見時、内面肩部附近まで、土が充満していた。

捷瓶は、1個出土した（第14図C）。器体が丸味を帯び、肩部に附せられた耳は環状をなし、（内、片方の耳欠失）通常の品である。青鼠色を呈し、一部に、吹出し釉が、認められる。



第16図 玉類 (Fig. 16)

背、前方部石室発見の杯も、（第13図C・D）既述のそれと差異のないことは、云うまでもないが、その発見状態において、その中に何物かを容れたとは考えられず、むしろ、何物かの上に、それをもつて、蓋をしたという具合であることが、興味を引く。

### 【B】玉類。

玻璃製小玉及び土製練玉のみであるが、何れも、後円部石室内において発見された。

玻璃製小玉は（第16図上）、すべて、偏平な円形を呈し、その最大なるもの径5mm、厚2.5mm、最小なるもの径3mm、厚1.5mmを、算える普通の類である。その色彩によつて、分ければ、青色11、淡青色6、綠色2、褐色3、となる。合計22ヶの出土を見た。

土製練玉は、（第16図下）すべて、粘土作りの丸玉で、表面が黒い類である。大きさは、個々にあつて、若干異なるが、その径は、ほぼ7mm、前後である。合計46ヶ及び若干の残片。



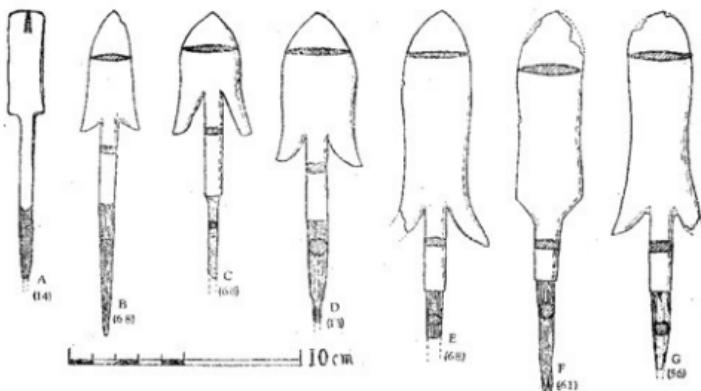
第 7 図 版 中宮第 1 号墳出土遺物

【C】 武器類。

(イ) 鉄鎌。 発見された鉄鎌は、すべて有茎式に属するが、なお、莖の比較的短い例に身の大きく幅廣く薄い式、所謂尖根式と、

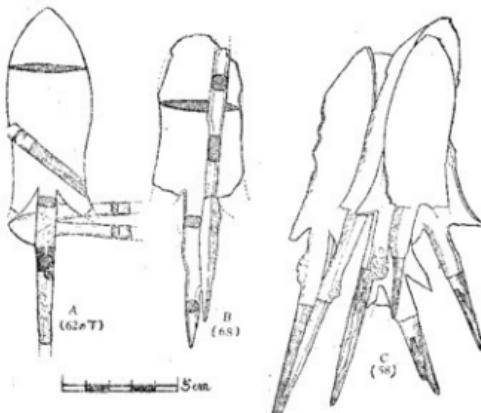
莖の長い割に身の小さくなる式、所謂平根式とに、2別される。

前者は、約8cm前後の短い莖を有し、駒挿りのある両刃の平たい形式が大部分である。



第17図 横穴式石室内発見鉄鎌 1

(Fig. 17)



第18図 横穴式石室内発見鉄鎌 2

が、その身の形状においては、ノミ形(17図A)のものがある等若干のvarietyを認めることが出来る。(I)身巾は、比較的細いが、

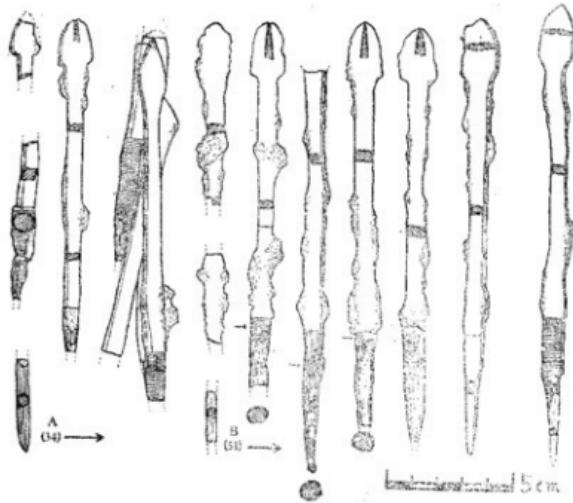
極めて長大な類で中央附近において、一たん狭まつて、また開いてゆき、駒挿りに至るといつた形式を持つ。(第17図E及びG)において典型的に見られる。(II)全体の形状は、(I)に似ているが、駒挿りがないことが、特徴的である。(第17図F)のみである。(III)長さにおいて、前二者よりもずっと短く、従つて、すんぐりと巾廣であることを、特徴とする。しかし、(I)に近いもの、次の

(VI)に近いものもあつて、その間に、一線を引くことは、できない。(第17図D)及び(第18図A・B)などが、この式に属す。(IV)前者を、更に小形にした形で

特に脇折りの長いことが目立つ。(第17図C)

(V) (第17図B) で典型的に見られるよう  
な細長な小形品である。

(VI) ただ一例であるが、ノミ形を呈し、刃  
部が、その先端に附せられている。(第17図  
A) 番々完存品で、現長12・3cm を算える。



第 19 図 鋼 純 2

(Fig. 19)

(14)に屬して発見さ  
れた。これらの殆ど  
全部は、その茎の下  
半部に、(恐らく竹  
の)矢柄が、残存附  
着しており、またそ  
の中の一部には、そ  
の本を、緊持した樹  
皮状のものの残存が  
認められる。莖の上  
半部の厚さは、身の  
中央附近のそれと、  
同じ厚さを保ち、そ  
の断面は、矩形を呈  
しているが、その下  
半部、即ち矢柄を挿  
入する部分に至るや、急に細くな  
り、略々方形を呈し、更に、末端  
部に向つて細く且つ円形になつて  
ゆく。その多くは、(第18図C)  
において見られるように、束ねて  
副葬されたものであるが、中には  
(第18図A・B) のように、失根式  
の鎌と、密着して発見されたもの  
瓦いちがいに置かれたもの(68)  
などがある。

後者は、數十木の、出土を見た  
が、すべて、劍形で、脇折りのな  
い身を、有する式である。(第19  
図) 密着して束になつて、発見さ  
れた場合(第7図版)と、單獨に  
個々が発見された場合とが、ある



第 20 図 鉄 剣 刀 子 (Fig. 20)

が單獨出土の場合でも、近接して數本が、發見されているから、恐らく、數本又は數十本（最も多いのは(59)の18本束）を束ねて、兩端したるものであろう。又、それ等が、もと、矢柄に挿入されてゐたことも、莖の下半部に殘存する、恐らく竹と思われる木質の附着及び、一部に見られるその本に巻きつけられた樹皮状の物質の残存によつて、確認される。莖の構造は、その細長な点を除いては、前者即ち平根式の大形箋の場合と、略々同様である。全長は、最も長いもので、18cm、最短なもので、14cmを算えた。

(ロ) 刀子。何れも鹿角製の柄を、備えた刀子が、4口出土した。（第29圖及び第7圖版）(A)を除いて、刃尖が、破損しているが、大小不同あることは、明らかである。柄の持が、完存しているものは、皆無であるが、その附着残存する鹿角及び木質からして、柄は、先づ鉄莖を木で押み、その上に鹿角を被覆して作製されたものである。現在残っている鹿角表面には、何等の加工乃至裝飾文も認められない。(D)は幸うして、鹿角製柄が認知されうる程度であるに加えて、刃尖及び莖下端を欠如している。現在長10.2cm。(C)も刃尖が、欠損しているが、現在長10cm。鹿角の脱離のあとに、木質がよく残存し、持への具合を恰好に示している。鹿角の比較的よく残存している部分の断面を図示したが、復原して考へれば、可成り丸みを帯びた、橢円形となるであろう。(B)は刃部倒端が、欠損しているほか、柄の部分等もしつかりと原形を残している。現在長10.8cmの、最小形と推定される品である。柄の持中央における断面は、図示の通り略々円形に近い。(A)最も最大なもので、全長

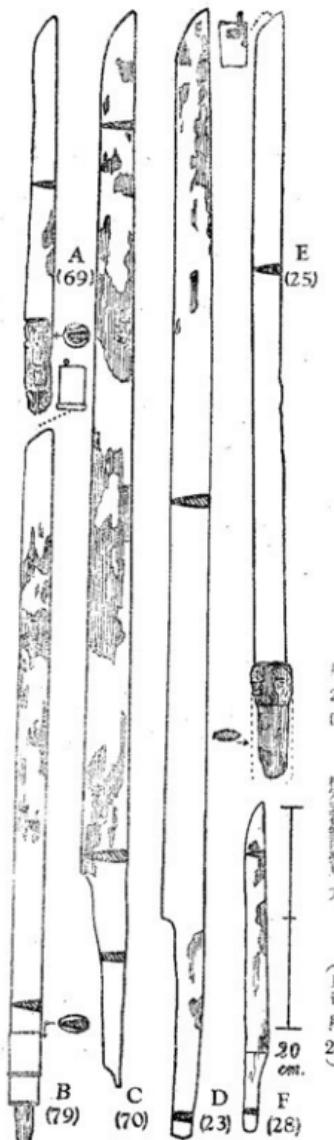


図21

鹿角製刀

(Figure 21)

16cm、双頭長9.5cmを算える完形品である。今、木質部の存否は不明であるが、鉄の莖の上に、何物かを剝離した痕が、鉄錆化されたまま残っていることが、特に注意される。柄と莖との境界が、斜行しているのも、この一例に見られるだけである。柄の一部においての断面は、丸味を帯びた楕円であることを示している。

(ハ) 直刀。(第21図) 鉄製の刀六口は、何れも直刀であるが、大小不同で、大刀2口、中刀2口、小刀2口と分けることができる。前節でその出土状況を見たように、左右兩壁に分れて、それぞれ大、中、小の三本が、副葬されていた。(第5図版)。

すべて、錆化が著しく進行しているため、判別としないが、折面その他の一部から見て、<sup>ヒラマツ</sup>不透と称される刀身形を有し、その刀背の構造も、いわゆる角背の手法によつていることが考案され、中には、莖の柄の部分を可成りよく残しているものがある。柄は、すべて木柄であったもの如く、(E)を除いて、その木片が接着して残存している。(D)は、全長103.5cm(3尺4寸強)の大刀で、莖の一端及び身の一部に、木片の銷着が認められるほか、柄は不明である。(E)は、莖の柄を部分的に残している中形品とも称すべきも

の。即ち、莖に接合された木部が、莖の略々全面に亘つて見られるほか、鞘口に接する把縁に、鹿角製の円形装具を残している。また鞘尻金具として、鉄製の簡単な式のものが點見されているが、その一部に漆塗と考えられる布片が、残存附着していたことが、注意される。(F)は、鞘の木部の一部を刃身にとどめているほか、柄は不明。(C)は、先の(D)とほぼ同大同巧の大刀である。(B)は、最もよく把の柄が残存している。尚、これには鞘尻の装具が、残存していた。銀漆製と考えられる見事な作りであるが、その末端部の柄は、消失している如く、現在所示のように、その部に二本の鉄製の留め釘が、木箟を錆着させたまま残っている。留め釘の存在は、(E)の鞘尻金具にも認められている。把縁は、鉄地に薄い銀板外郭を持つた円筒で、把間は、これまで円筒状の銀板で被っている。但し、把間の銀装具の内部の柄は腐朽して不明である。把頭の内部には、木質がよく保存されている。(A)は小形の鹿角装刀で、通有のものと異らず、直弧文その他の文様は見られない。

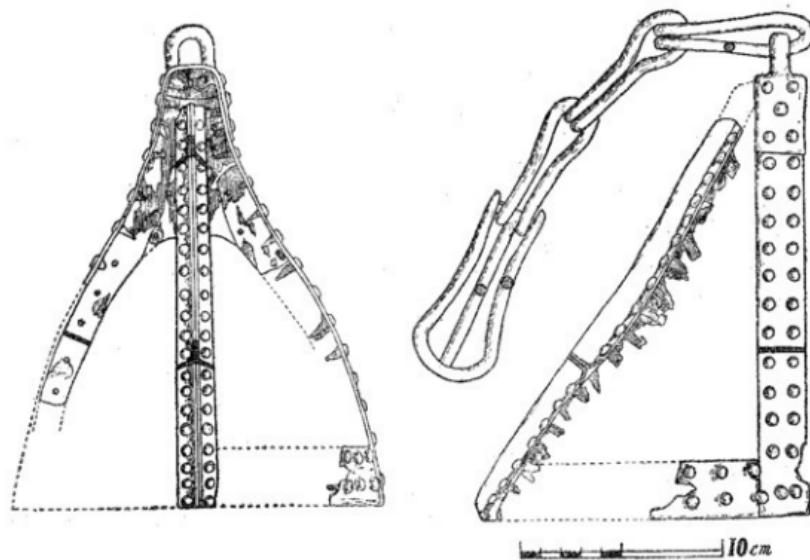
以上六口の直刀それぞれの大きさを、下表に示す。

	(D)	(C)	(E)	(B)	(A)	(F)
全長	103.5cm	98.5cm	70.0cm	65.5cm	36.8cm	30.0cm
刃長		32.5寸	23.2寸	21.0寸	12.1寸	9.9寸
刃長対 莖長(10%)	83.5cm	79.5cm	59.7cm	54.8cm	28.0cm	22.5cm
	23.3寸	19.7寸	18.2寸	9.25寸	7.4寸	
莖長	80.5	80.8	85.3	83.7	76.2	75.0

#### 【D】馬具類。

(イ) 鐙。鉄板飾木心の產縫が二箇出土した。その一つは、(第22図) 筑前國嘉穂郡

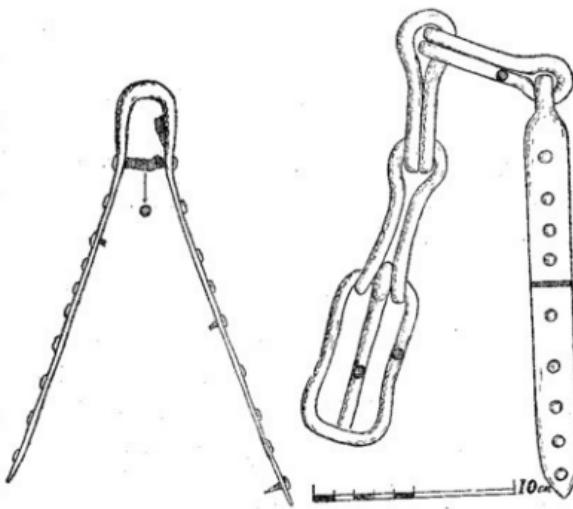
王塚裝飾古墳出土品と、規制を略々同じくする類で、木部をはじめ、腐朽欠損した部分が可成り存するが、その大きさ、形状の大体は



第 22 國 横穴式石刀発見 アブミ I

(Fig. 22)

認知することができる。先づ頸は、細長い作りの兵庫鏡で、王様のそれが5個の組合せであるに對し、三個の組み合せで、同じく長大な鉄具に、接する。兩側及び底部共に、木で作られ、その縁飾りとして、2例の鉄で留めた金具を、続らし更に前面の合せ目にも、同様な鉄留金具を使用したものである。鉄金具の内面や鉄尖の周邊には、木片が殘存している。その形狀は、前面において背の高い2等辺3角形横面において、直



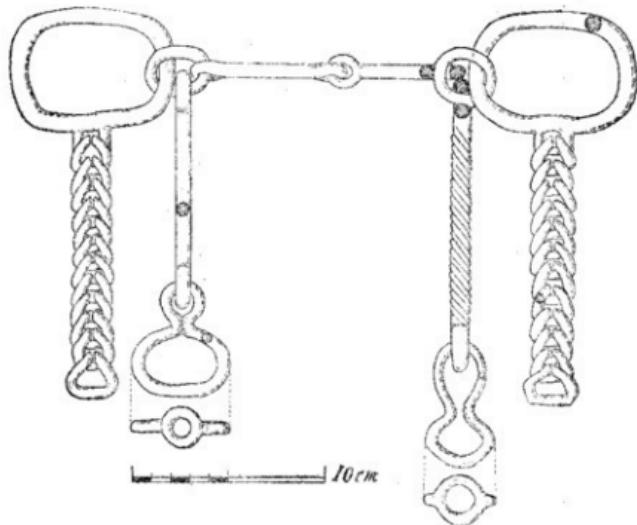
第 23 國

iiii アブミ 2

(Fig. 23)

角三角形に近い。残存している部分から見れば、畠込みの部分は、平面をなしていたと考えられる。鎖と接する部分は、飾金具が、急に丸く太くなり、輪を作っている。荷、紋板にも、筋が打ち込まれていることはいうまでもない。

他の一つは、(第24図)底部及び前回つぎ合せの金具、紋板などすべて残存しないため稍々確然としないが、鎖及び鍔具の作り、前面形が、略々3角形を呈する点などは、前者

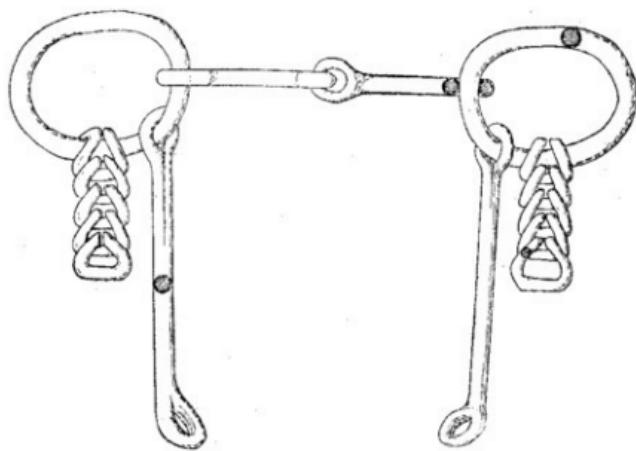


第24図 クツワ (8) (Fig. 24)

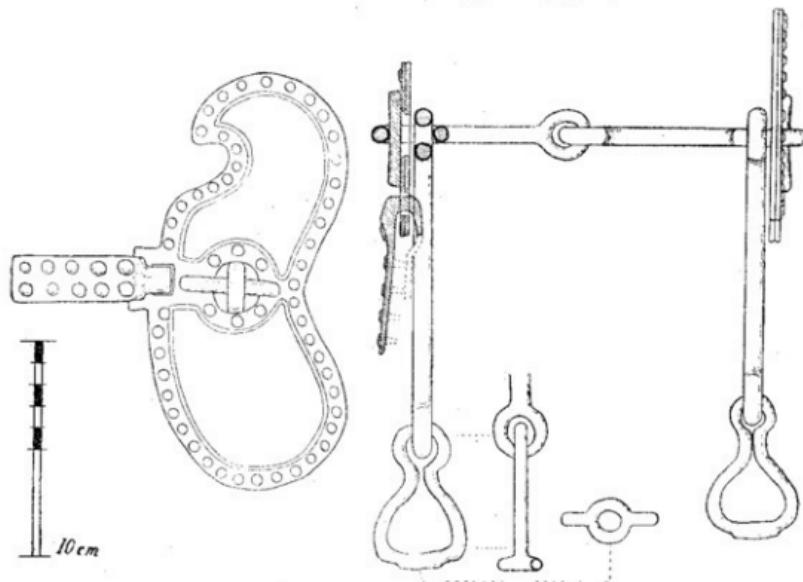
と等しいが、その大きさや、飾金具等、幾分異つた点がある。残存している縁取りの飾金具は、横側のそれに限られているため、確然としないが、前者に比して、はるかに短少で、その留置も一列且つその間隔も遠いことが指摘される。又、横側の飾金具が底の縁金具と接する部分は、3角形状に尖っている。

(ロ)、春。(第24図・第25図・第26図及び第7回版) 鉄製の春が3個出土したが、内2個は通常の類で、他の1個は鏡板付のものである。前2個は略々同じ作りであるが、引き手の構造及び綱において、若干の差異

を持つている。街の具合は、三者ともに同様同大である。鎖は、(19)(8)共に兵庫鎖で、(19)は5個、(8)は12個で構成されている。又、鎖が輪と結合する仕方も兩者は異り、(19)は直接に、(8)は、輪に作り出された輪状小突起を媒介として、結合している。引き手の作りも、(19)の簡便なるに比して(8)は、稍々精巧に作られている。又、(8)について引き手の作りの内、橢形の繩かけの輪の部分において、左右同形でないことが注意されると共に、一方の引き手金具が、鉄地の合せよりの作りを思はせる現形を示しているこ



第 25 図 同 ク ツ ワ (19) (Fig. 25)



第 26 図 同 ク ツ ワ (74) (Fig. 23)

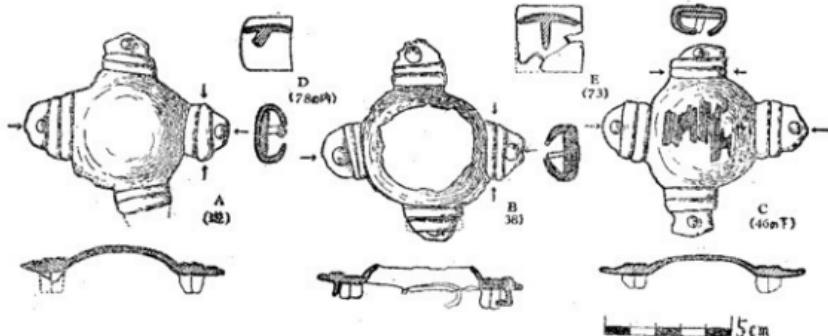
とが指摘される。あるいは、これはこの部分の金具に巻きつけた物資が、錆化附着してい

る状態とも考えられるが、今は不明として置く。(74)は、(第26図)後及び引手は、前二

者と略々同様であるが、鏡板が附せられている点が、他と異つている。鏡板は鉄板2枚を合せ、更に薄い金銅製の板を鉄板で留付したE字形のもので、出土當時も、その金銅製の大部分を保持していた。縁取りの線に加えられた鉄は、鏡被せなどの特別加工にはなされておらず、鉄箒である。

(ハ) 雲珠。 (第27図A・B・C及び第7圖版) 3個とともに、略々同大同巧を示している。例れも、径約4~5cmの円に、

4つの足が張り出されている式のもので、錆化は薄い。一般にその円部の丸みは、さして高くなく、むしろ他の例品に比べて、甚だ低いようである。足の構造の完存しているのが少いが、若干の完存部の示す所では、中央円に接する辺に、二本の細い鉄帯を並べ被せており、且つ、その尖端は皮革を抱えるように内面に向つて折れ曲がっている。紙の役目をする目釘は、それぞれの足の先端近くの中央に1本づつ存在する。その先端も、ほほ直角



第27図 横穴式石室内発見 雲珠 1 (Fig. 27)

に、内側に折れ曲がっているが、皮革を抱帶に通した後、目釘を打ちこみ、その先端を曲げて、より堅固に固定したものである。(B)は円の中央の大半が欠損しているが、足及び目釘は最もよく残っている。残存の目釘3個の内、明らかに中筋欠損している1個を除いて他の2個の先端は、明らかに内折しており、その内折の個所と、抱帶の折れ曲がる個所とは、前者が心もち低くなつてゐるが、略々同一線上である。(C)は、目釘の三本が欠損している点を除いて略々完存している。今、その全体は著しく錆化しているが、円の中央邊に、その錆化した部分の上に、木片の

若干の附着が認められる。(A)は、足の一つの先端、目釘三個が欠損しているほか、略々完形を保つて居る。

次に第28図は、足が全部欠損しているが、形狀大なる雲珠と、推定される。円形を爲し、その中央に膨く、前三者に比べて、高い盛り上がりがある。鉄地に、金銅板を貼つたもので今、錆化が甚しいが、金の部分も僅かに認められる。径約9.5cmであるが、その周辺に、2~3mmの厚さで、縁取り(木製か?)が繞らされていたようである。周辺には、現在6個所に、不整然な突起が認められ、鉄を打ちこんだ様を思はせる。但し、下面において

その痕跡は、著しい鏽化のため、認められない。尚、甚しく近接していないが、附近から方形金具が5個散在して発見されている。

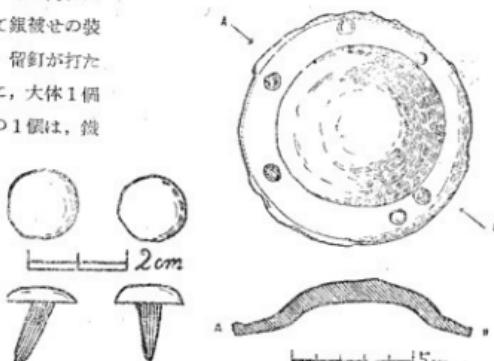
(=) 方形金具。(雲珠足か?) (第27図 D・E) 計5個見出されている。その向れにも、表面から内側の周辺にかけて銀被せの装飾が施され、ほぼその中央部に、留釘が打たれている。内5個は上述のように、大体1個所に近接して発見されたが、他の1個は、鐵錐に混じてかけはなれて孤立した。雲珠の足金具かとも考えられるが、足巻きの抱帶金具の附着した跡は、認めることが出来なかつた。馬具の附属品かと考えられる。

#### (ホ) 座金具附鉸具。

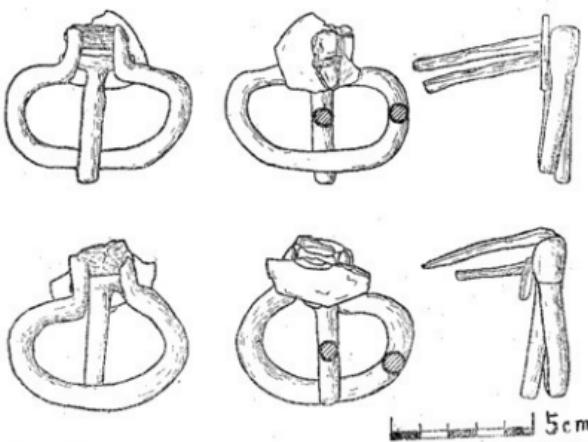
(第30図) 機と考え

られる鉸具が2個接近して発見された。部分的に多少欠損しているが、概して保存よく、略々完形を呈する。固定用の2本の突起に、木質の附着(その木目は、突起長に平行して走る)しているところから木製の鞍に、備えられたものと推定される。

る。すべて、同一種に属するもので、長さ1.5cm、頭部が丸く作り出されて、その径1.35cmを越える。何れも、その径に木質が接着して残っている所から、木具に打ちこまれ



第29回 雲珠 (Fig. 29) 第28回 鉸具 2 (Fig. 28)



第30回 機穴式石室内発見座金具鉸具 (Fig. 30)

奥壁に接して、やや、整然たる配列を示して発見された類(第5図版左下)を始めとして、総計20個余りの鉄製留鉢が、出土してい

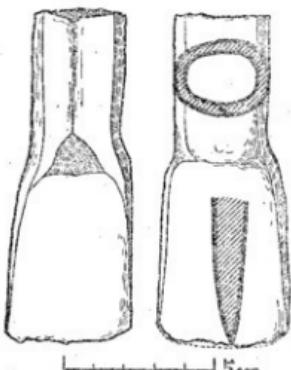
たものと考えられる。更に、前記の座金具附鉸具と接近して発見されている点から、これらが相共に木鞍を構成していたものと推考さ

れる。その附着木質の木目の走向は、横走と縱走であるが、縱走すなわち茎の長軸に平行している方が大部分を占めている。

#### 【E】 鉄工具類。

(イ) 鉄斧。(第31図及び第7図版) 鋼化しているが、保存良好の完全品で、袋部は曲げ合せ貫通させる式のもので、刃部に向つて徐々に、巾廣くなる。

断面図に示したように、製

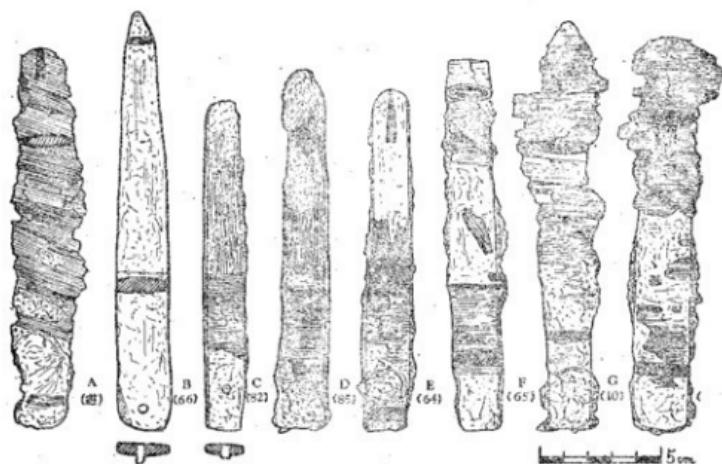


第31図 鉄斧 (Fig. 31)

作は可成り部厚く、頑丈な感を持つ、全長 11cm、刃部巾 4・3cm、袋部内径(長) 2・5cm を測る。袋部に木質が残存するところから、もと灌漑のまま、副葬されたものと考えられる。

(ロ) のみ形鉄製品。

(第32図及び第7図版) 一見、刀子状をした鉄製品が、8個出土したが、以下に述べるような理由から、のみであつたろうと推察し

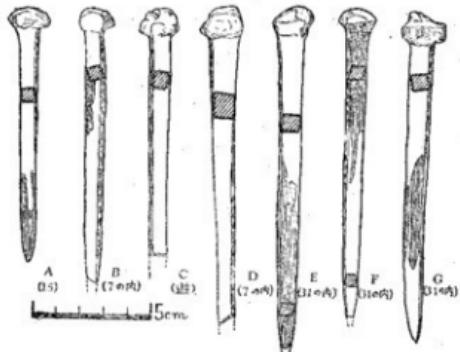


第32図 のみ (Fig. 32)

ている。何れも、長約 14~17cm 程の品で、側面には、刃と考えられる部分を欠如している。(B) は、そののみであるとの推測を典型的に示している品で、全長 14・2cm の完全品、下端において、厚さ最も厚く 5 mm 強、中央邊にて 4mm、次第に薄くなり、先端は、

図示の如く、銛利な刃となつていて。この刃の部分は、一方に幾分のそりを有つていて。また、下端から、6 cm の箇所を境界として、その表面に接着する木質が、その木目の走向において、明らかに相異を示している。即ち下部は長軸に直角に、上部は長軸に大体平行

して走つてゐる。木柄と木鞘を附したものであることが想像される。これに最もよく類似を示す品は、(C)(D)で、特に(D)は、尖端が刃部をなし、且つ、その部分が、一片にそりを有つてゐることなど、殆ど、(E)に変るところはない。(C)の刃部は、鋸化甚しきため、今、明らかにし得ないが、全体の作りは(E)と同じである。(B)は、やや大形で、木質の附着が殆ど見られず、尖端も、鋸化のため、刃部をなしていないかどうか、確かめることが出来ないが、その作りが段々と巾狭く、薄くなつてゆく点など、前三者と、同様である。(F)は、尖端欠損しているが、現長15.4cmを測る。その製作は、既記の類と全く同



第33図 鉄釘

最も廣い部分では、4cmを測る程である。(A)は、その木目が時に斜行している。何れも(F)と同じように、杉皮様のもので被覆されたまま、副被覆されたものと想像される。若干の部分で切断し、断面を検査したが、すべて既記の類と同様、兩端には刃部なく、先端に向つて、狭く、薄くなつてゆく製作を示している。特に(A)の尖端は木質の被覆にも拘らず、刃部をなしていない様が、うかがえる。

以上のように、各個では若干の差異を示しているが、何れも、側面に刃部のない点、その内の数つかは明らかに、先端部に刃部を有つてゐる点、その部分が一片にそつてゐる点、何れも、段々と巾狭く、薄くなつてゆく、薄くなつてゆくという製作上の共通性を持つてゐる点、木鞘又は杉皮様のもので、被覆を行つてゐる点、中には(B)(C)のように、目釘かと思はれるものが、認められる点、等々からして、のみとして使用された利器であると考えてよいのではないかと思う。

#### 【F】その他。

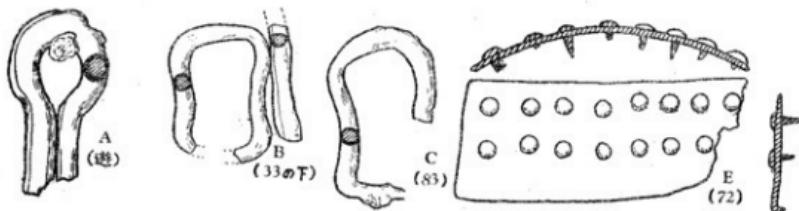
(イ) 鉄釘。(第33図) 計七本が発見された。すべて、断面略々正四角形を呈す茎を有つてゐる。先端の破損していない類から推せば、既く尖つてゐたことが判る。頭部は、多く鉄精化して不整形をなしてゐるが、最も原形を保つと考えられる(F)によれば、牛

様であるが、その表面に、附着残存する木質部が、やや異り下部も上部も等しく、その木目は長軸に直角に走り、その間にはつきりした境界は、今、認められない。特に上部に残つてゐる木質は、図示することが出来る程の厚さを持つて居り、顯微鏡検査では、杉皮様のものを巻きつけたものかと考えられる。更に、略々中央邊に、長軸にやや斜行する木質の小部分が認められる。このように長軸の略々全面にわたつて直角又は略々直角に近く、木目の走向を有つ、附着残存する木質は、(G)(H)(A)に認められる。これらの木質は、やや厚く、そして可成り巾廣く、幾つており

円頭をなしている。董部には、僅かにそれと分明する結化した木質（その木目は、長軸に平行している）が、附着残存している。略々完存品である（G）において、全長13.5cm 茎中央の厚さ1cmを算えるが、最長は、現存長14.4cmを算る（E）である。すべて、大方形で、頑丈な鍛造品であり、可成りの部厚い

木村に打ち込まれたものと考えられるが、果して木栓の存在を、これのみによつて、推察出来るかどうか、論斷の限りでない。

(ロ) その他。 第34図の(B)(C)は、共にほぼ同様な形態を有つ後其で、(B)は鉄錫片が附着したまま発見された。共に不完全品である。他に同図の(A)に示した鉄製金



第34図 石室内発見 鉄金具其の他

(Fig. 34)

具（鎖か？）の残片が、遊鑑して発見されたほか、(D)の如き板状をなし、留鉄が2列に打ちこまれている金具が、數ヶ所から單獨に検出された。留鉄の茎に、明らかに木質が残っている所から、木製品にあてられた縁取り金具であることが考えられる。

#### 附記

「はしがき」において述べたように、本発掘報告及び以下の二つの報告において「結語」乃至「考察」は一切省略した。これは、同じ題名の書第2冊又は第3冊において、他の多くの調査古墳の所見と共に、述べられるであろう。

#### 註

- 1) 梅原末治『日本の古墳』58頁 1947年。
- 2) 梅原末治『前報』。
- 3) 稲原一『上野國佐波郡赤堀村 今井茶臼山古墳』41頁 1933年。
- 4) 須山古墳群について、近く特原英郎君の総括的な報告がなされる予定である。
- 5) 遺物は豊田市公文館に収蔵されている。尚、住居址調査報告の刊行は、目下その準備が進められている。
- 6) 所謂後羽彌生式土器に属する類である。
- 7) 小林行雄『黄泉口號』『考古學集刊』第二冊に食器供獻に関する高見と共に、その実例を列挙されている1949年。
- 8) (鹿島北道鹿島港古墳調査報告)『古跡調査報告』第一冊1918年。
- 9) 梅原末治・小林行雄『筑前国嘉穂郡庄塚裝飾古墳』『京都帝國大學文學部考古學研究報告』第十五冊 1940年。

## 第 4 章

### 門の山第1号墳発掘調査報告

近中 藤島 義壽 郎雄

#### 【内 容】

位図・地形及び発掘当時の状態  
墳丘及び外部施設  
内部主体  
発見の遺物

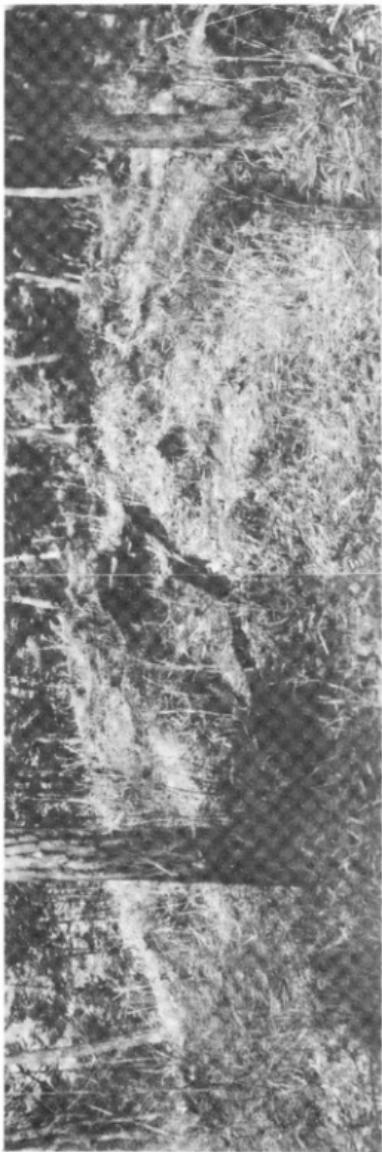
### 位置、地形及び發掘當時の状態

神奈備山塊の西端に近く、北西方向へ向つて、舌狀にのびる一小支脈は、通称、門の山と呼ばれている。その頂部にあたる極めて緩傾斜の舌狀部には、小円墳を主とした約十基程から成る小古墳群がある。我々が、それに對して、門の山古墳群と名付けたのは、既述の通りであるが、今此處にその發掘調査の結果を述べようとする門の山第一号墳は、その最も北西の端、舌狀部が、その下降傾斜度をやや急に変化はじめた部分に、位置している。その部分の標高は、約150m、平福地区の低地との比高約50mを算える。

北西斜面に築かれているとは云え、その眺望は、廣く且つ優れ、古墳發造地としては、全く恰好な位置を占めていると云つて、過言はないであろう。(現在は松林が視界の多くを遮っているが)。即ち、津山盆地西半部を眼前に展望させ、作州最大の前方後圓墳・円墳を有する二宮・院庄を指揮の間に望み、又、更に芦出北東部の重巒たる中嶺山脈のバツクボーンを、透かに遠望する素晴らしい位置であり、佐良山古墳群中、最も美しい眺望を持つものの一つを占めている。その行政的な位置

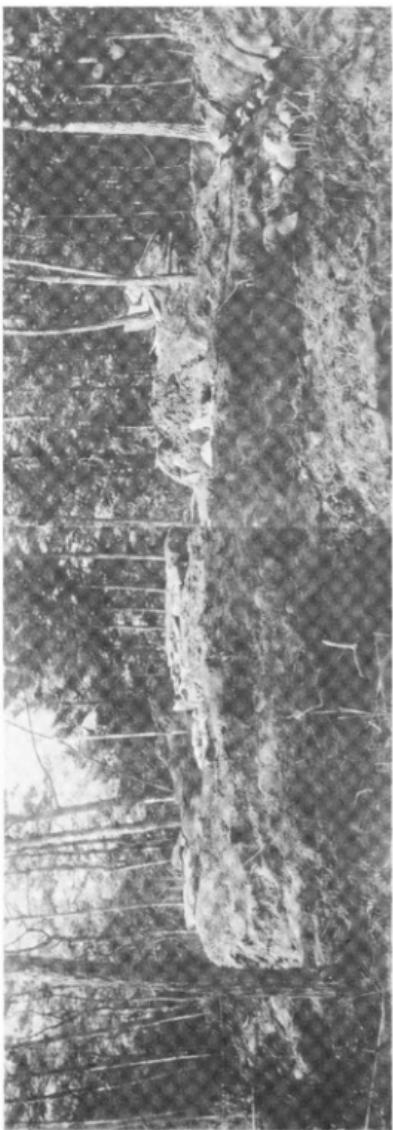
は、津山市平福向山二七七番地の十一で、その所有者は、同平福の津高伸江氏である。附近古墳群については、第二章で概観した所であるが、何れも相似た大きさ・高さを有する低小な小円墳で、その一部は被壊跡呈している部分の状態からして、後述する本古墳の内部主体と同じ、所謂組合せ長方形箱形石棺をその内部主体としていることが、想像される点を一言して置く。

本古墳は、上記のように下降傾斜度が、やや急に大となりはじめた個所に、营造されている関係か、長年月の間に可成りの被土が堆積し、必ずしも原形を充分に示していないかった(このことは、次項においてやや詳しく述べるそ)。のほか、調査開始時、主として墳下北辺に、人頭大の河原石が、若干散見されたことが、やや注意を引いた程度であった。しかし、人力による窓詰的な破壊乃至攪乱を示すような痕跡は、全く認めるることは出来なかつた。墳丘上には、若干の松と、矮小な灌木・下草とが寄生し、全くの處女古墳が想像されていた。(第8圖版)



上 発掘開始直前西側

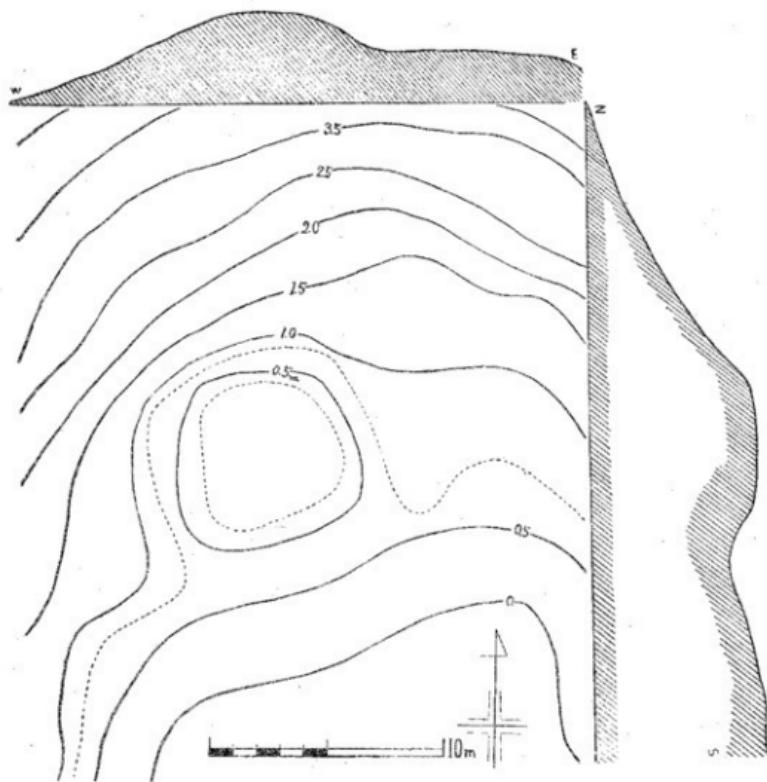
下 発掘終了後南側から望む



## 墳丘及び外部施設

以上のような状態にあつた古墳は、一見したところ、円墳のように考えられたが、実測の結果は、第35圖に見るような「方墳」の墳

形を示した。即ち大体において一辺の長さ約10mの開丸方形の平面形を有つており、墳頂は、約5m四方に亘って平坦となつてい



第35図 古墳地形測量図 (Fig. 35)

た。それが斜面に營造されているため、その高さの算定を著しく困難にしているが、第35圖の断面図によつて、その状態を示したからそれによつて理解されたい。

このような古墳の形態は、前項に一寸觸れたように、長年月の被土に基く変形の結果によるものであり、発掘の結果、我々が見出した葺石列の存在によつて、原形態は可成りに

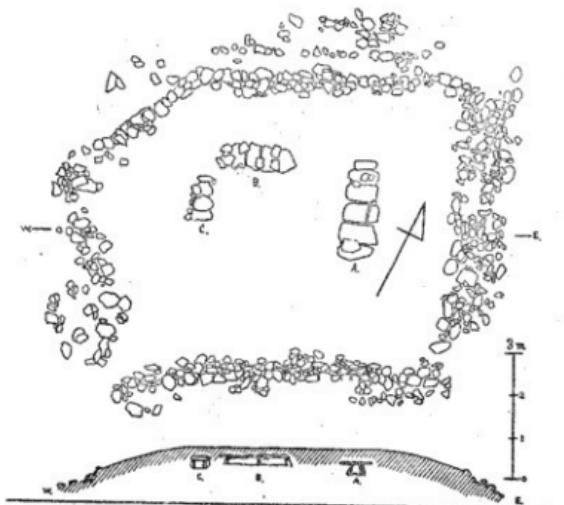
異つていたものであることが判明した。被上は、部分的に可成りその厚さを異にするが、南側及び西側に於いて最も厚く堆積し、約20cm～40cmの厚さを示した。葺石は、既に発掘前から墳頂・墳下の一部に、人頭大の河原石が散見していたことから、注意を引いて

異なり、野球のベースを想像させる五角形を示す位置であつた。部分的に、可成りの脱落移動が認められたけれども、この五角形の配置が、原形であることは疑う餘地のないところである(第36図)。その五角形は各角ともに均等な角度を持つ五角形ではなく、正方形に近い四角形の一辺が、張り出して余分の角を作つた五角形であつて、その一辺が、本古墳においては西側に當つている。

従つて、全体として東西に長く、その長径約11m、南北に短く、その徑約8mを測つた。葺石は脱落移動に基く可成りの変形が認められ、その下端及び上端を明確に決定出来難い部分が多いが、墳頂には全く存在せず、約0.7m～約1.8mの巾をもつて、墳斜面に、帯状にめぐらされていた。又

その石材は、大小不揃いの河原石を主とするものであつたけれども保、存のよい部分を観察してみれば、比較的整然と、密な配列を行つたものであることが判る。

それが墳丘との関係、石棺の関係傾斜角度等々について第36図を参照されたい。



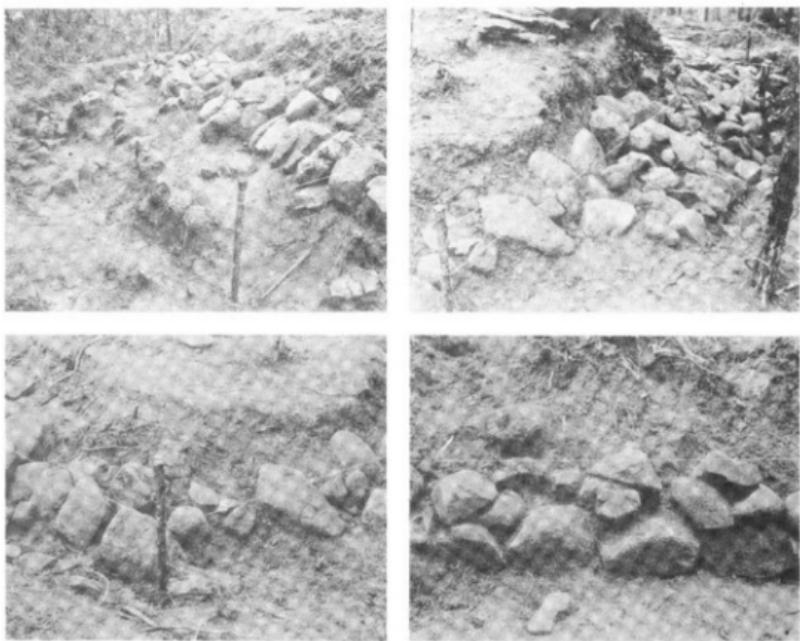
第36図 補石及石棺配置図

(Fig. 36)

いたが、封土の南北に亘つて、トレンチを入れた結果、その存在を確認することができた(第9圖版)。人頭大乃至その二倍程の大きさの、河原石を主とした石から成る葺石は、古墳周囲全体を回繞・配置されていたが、驚いたことには、堀の前に見られた墳丘の形と



石棺配置状態 (手前) A 棺 (右側) B 棺 (人物の下) C 棺



中左 北側 中右 東側 下左 西側と南側の交点 下右 南側の一部

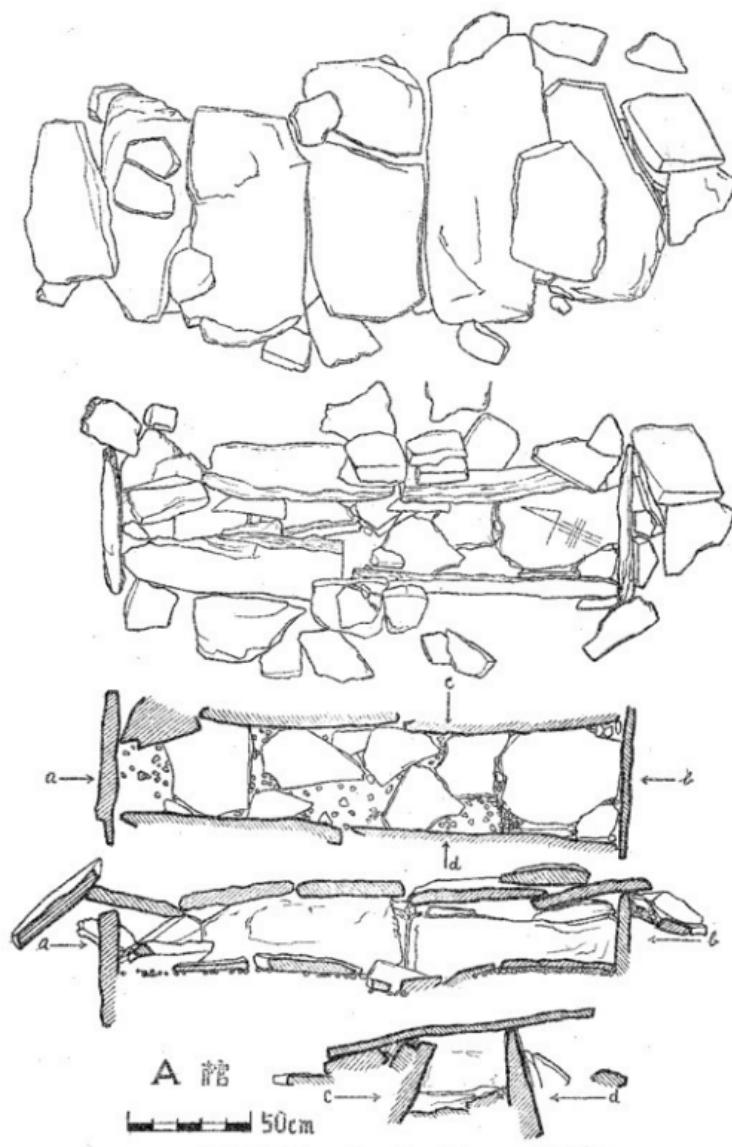
## 内 部 主 体

三箇の内部主体は、すべて、墳頂において発見された。何れも、組合せ式長方形箱形石棺=cistの制をとり、墳頂下、極めて深い個所に、設置されていた。設置位置の相互間の関係は、第36図及第9図版上に示したように中心部よりやや北側にあたる墳頂の東側に、南北を長軸とする大形のA石棺が置かれ、それと略々併行に約4m程はなれた同じ西側に南北を長軸とする小形のC石棺が安置され、更に兩者間の北側に、東西を主軸とする、中形のB石棺が配されるという具合で、恰も、假名のコの字のような配置を示している。先づ各石棺の構造を、A・B・Cの順序で、概記して見よう。

A石棺。（第37図及び第10図版上段）三つの石棺の内で、最も大形である。その長軸は、南北に（北がやや東にあれている）即ち封土の東側に併行して營造されている。蓋石は、五枚の偏平な比較的大形の割石、及びそれに配するに、大小各種の數個の同様偏平な割石を以つて構造されており、一部の自然的な変形と考えられる個所（例えば、中央の蓋石は二枚に割っていた）を除いては、後世における擾乱の痕跡は、認めることが出来ない状態であった。側壁は、大小七枚の板状の割り石で、構成されているが、前後壁は各々同形の一枚の石で作られ、東壁は二枚の比較的大きな石に、一枚の小形の割り石を配して作られ、西壁は二枚の割り石から成っている。その他、その外側の一面に、主として板状であるが、雜然とした割石が配置されている。これらの側壁の内、東西兩壁の北側にあたる部分は、若干の変形を蒙っているようで、そ

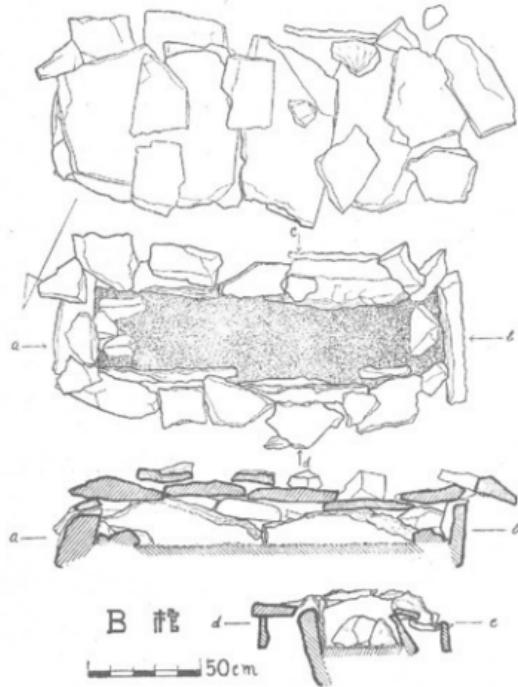
の上部が室内の方向へ向つて、可成りの傾斜で傾むいていた。これも恐らく築造後の反時間にわたる自然の變形と考えられた。発掘時この内部には、流上が充満していたが、排土の結果、底面に以下のような設備が施されていることが判つた。即ち、先づ底面に一重に小砂利が置かれ（しかし、この小砂利は、底面全面に及ぶことなく、南半に主として、敷きつめられ、中央邊及び北半の部分では、極めてまばらに置かれたに過ぎないが）更にその上に、板状の不整形な割石が、置かれていた。これも、その南半では比較的整然としていることが注意され、遺体の埋葬方向を暗示していた。石棺内から、はつきりした骨は勿論のこと、副葬品の一片も発見されなかつたことは、発掘の経過の項で、述べた所であるが、排土中、先に中宮第一号塚後円部横穴式石室玄室左側において、認められたような粉状を呈した白色の物質が、南半部において認められた。恐らく、遺骨の隕骸ではないかと推定される。床石の上記の状態などからして、南にその頭部を向けて埋葬されたものであろう。尚、底面は平面を呈しておらず、断面圖で判るように、可成り不整然であることが注意される。石室内面における長径約2m 07cm、巾は南邊に於いてやや廣く約50cm、中央附近で約40cm、底石上から蓋石下面までの高さ30cm～40cmを測つた。尚、現墳頂から底面までの距離は、約30cm～約70cm前後を算えた。

B石棺。（第38図及び第10図版中段）主軸を、東西に（東をやや北にあつている）むけ、北側蓋石に併行して、營造されたこの石



棺は、三者の内中形の大きさである。蓋石は四枚の板状の割石から成つているが、その上部及び東側に若干の小さな板状割石を配している。A石室に比べて、整然と原形を保つてゐるよう見えた。壁は六枚の畳々同大の板状割石で構成されているが南北の兩側壁においては、更に、小形の割り石が補填されている。東西兩壁が一枚石であることは云うまでもない。壁の外周には、A石室で見たと同様に、不整形な割り石が、不規則に置かれていた。底面には砂利が全面に亘って、一重に敷き詰められていたほか、枕石と推定される無加工の石が、東側には、三個一組となつて、西側には一個だけが見出された。発掘時、この石棺内にも土が充満していたが、特に、その土の中に、小砂利が可成り含まれていたことが、注意された。通常の流土にしては變であると思ひ、盗掘乃至擾乱の形跡を示すものかとも疑つてみたが、上記の様な封土や、蓋石の状態からして、その痕跡を認めるには困難であつた。強いて想像を逞しくすれば、底面に敷いた小砂利の餘剰の分を、蓋石又は側壁間間に配置した結果、流土と共に漸次落ち込んだものであろうかとも考えられるが、今は、疑問のものとして置きたい。枕石と考えられるものが、東西兩端に、施設されていることは、

恐らく、岡山県赤磐郡西山村唐白山古墳で見たと同様、たがいちがいに、埋葬された二体の被葬者の存在を示すものであろう。石棺内長径約1.60m前後、東邊における巾約40cm、西邊における巾約30cm、底面から蓋石下面



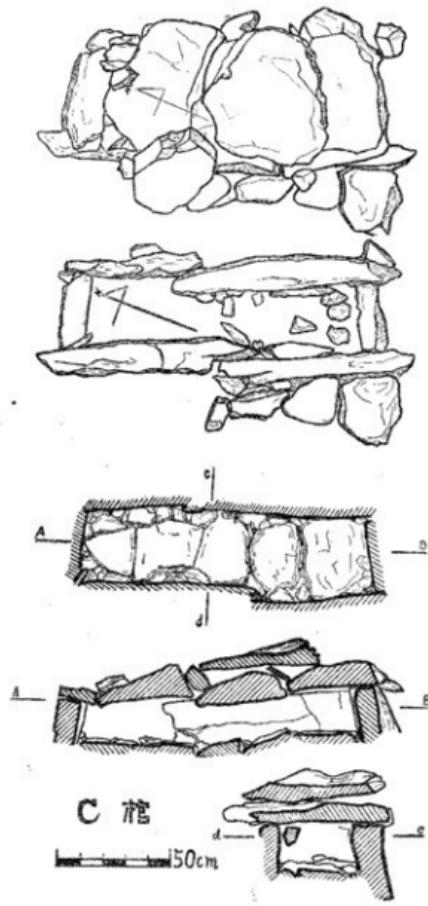
第38図 B石棺 (Fig. 38)

までの高さは、東邊において約15cm、西邊において約22.3cm、頂部から底面までの距離約40~50cmを、それぞれ測つた。

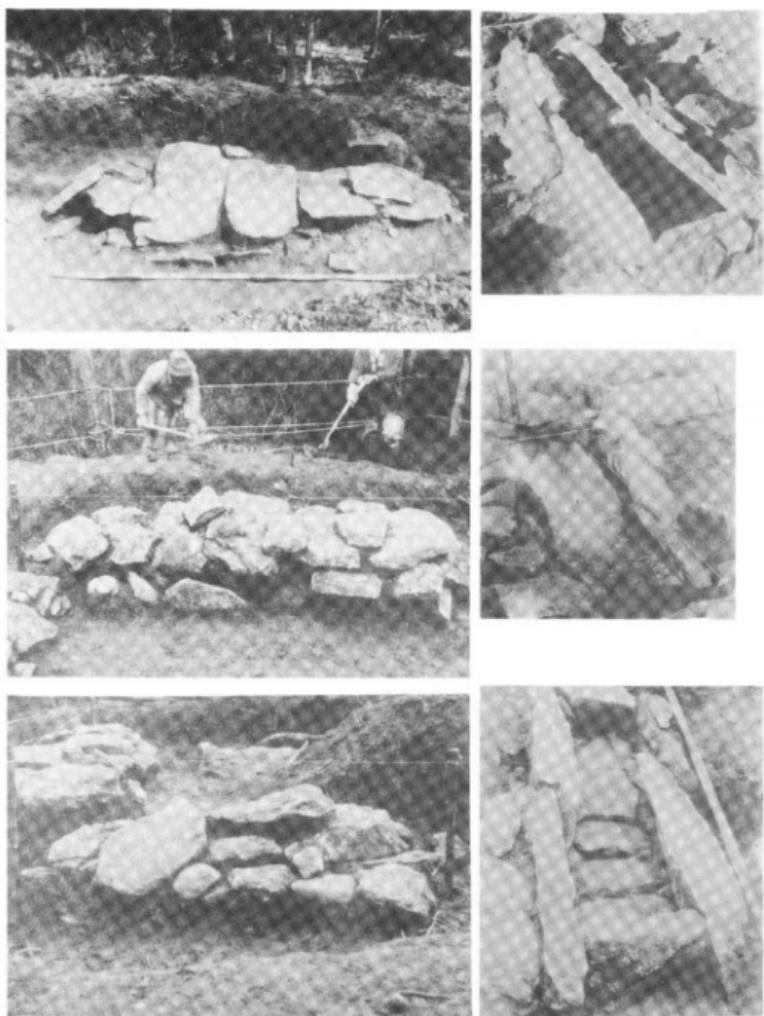
C石棺。(第39図及び第10図版下段)最も小形の石棺でA石棺と併行して、墳丘西側に設けられたもので、最も整然とした作りを有つている。蓋石は4枚の板状割石から成つてゐるが、内1枚は、若干の小割石と共に、

三枚の苔石間に間隙を填める目的を以つて、その上部に置かれている。側壁は、A・B兩石棺と略々同じ構造で、6枚の割り石及びその周縁に配置した若干の小割石によつて構成されている。それらの状態は、原形を殆ど完全に保存しているようく推定される。底面には、A石室でみたような板状割石が、A石室よりも、はるかに整然と置かれている。但し、その板石の下部に、移動の歴史は認められない。明確に枕石と推定されるものは、存在していないが、沿邊に尋常の割石が数個見出された。石棺内の長径 1m25cm 前後、巾は約 35cm 前後、底石面上から、苔石下面までの、高さ約 22cm、墳頂から底石面上までの距離約 30cm をそれぞれ測つた。

以上のように、同一墳頂に設けられた此等三つの石棺は、何れも、その形制が相等しく、所謂「箱形石棺」の制を、とつている。その脛部においても、形の大小、底面敷石の構造、枕石の存否などの若干の相違を除いて、殆んど同一の構造を示している。此等の内、何れの一棺が先づ最初に、墳頂に築成されたかの問題は、最も興味ある事柄の一つであるが、現在のところ、墳頂から最も低い個所にその底面を作つてゐるのが、A石室で、又、最も大形な構造を、持つものも、A石室であるということを、指摘することが出来るのみである。



第 36 図 C 石 棺 (Fig. 39)



上左右 A棺, 中左右 B棺, 下左右 C棺

第 10 図 版 門の山第 1 号墳発見石棺

## 發見の遺物

石棺の何れからも、副葬品の一片すら見出されなかつたことは、先に述べたところである。これに対して盗掘による遺物の消失の結果となす考え方は、前項にも一寸ふれたように、封土、石棺の保存状況からして、贅成し難いところで、むしろ副葬された品物が、長年月の間に、自然的消失を遂げたか、又は当初から鉢製品のような副葬品を、置かなかつたかの結果と、解したほうが、妥当と思われる。この種の組合式箱形石棺の多くが、殆ど遺物を出土していないことは、從来からも注意されていたところであつて、例えば、筆者等の調査にかかる岡山県赤磐郡西山村安ヶ丘古墳においても、完全處女石棺で、且つ、遺骨が、極めてよく保存されているにも拘らず、副葬遺物を、何一つとして認めることが出来なかつたなどの如くである。ともかく、僅小な盛土ではあるが、可成り立派な葺石をしかも五角形という珍らしい形に、配置したこの古墳で、しかも、盗掘の痕跡のないままに、三棺からの出土遺物が皆無であつたことは、今後の研究を進める上に、充分考慮してよい事柄であると思われる。

さて、石棺内の副葬品に関しては、上述のようにいべきことはないが、先に「発掘の経過」の項で示したように、数ヶ所から、土師器又は壺生式土器と考えられる、褐色乃至赤褐色の螺旋の土器片が、検出されている。何れも小破片で、全形を観察することの出来るようなものは、全く存在せず、わずかに西北隅の葺石上から、検出された底部半欠破片を、図示することが出来るのみである(第40図)。それは、褐色を呈し砂粒を含み、甚しく崩落し、粗面を見せており、明らかに中央部に貫孔を有つ平底の器形(=瓶)を示している。土師器というより、むしろ壺生式土器に、普通見出される類に近いことが、考えられる。この種に酷似した土質、色を有つ破小片は、他に二、三片封土中から発見されている。他の数片は、明褐色～黄褐色を呈し、器壁も薄く、土質もやや砂粒の含有量が少く通常土師器と称されているものに、同定され得るものであろう。しかし何分、極小破片であるため、確断することは出来ない。



第40図 土器片 (Fig. 40)



## 第五章

### 祇園畠第1号及び第2号墳調査報告

中 島 駿 雄

#### 【内 容】

位 横・墳丘及び調査当時の状態

石 室 の 繕 造

棺その他の遺物発見の状況

遺 物 に つ い て

### 位置、墳丘及び調査當時の状態

中宮及び門ノ山古墳群のある丘陵と相対して、皿川の西岸に廻帆山がそびえ、その山麓は、現在水田になつてゐる同河畔の沖積地に到るまで、西から東へ下る緩やかな斜面をなしている。南北に長くこの緩斜面は、東西に平行した数條の谷によつて開削され、數條の尾根となつて東に延びているが、そのうち津

山市平野の平佐

部落に延してい

る一本の尾根の

中頃に、廻帆故

と呼ばれる、特

に平坦な所があ

り、標題の二古

墳は、その南斜

面にある（第2

図）。そのうち

東なるを1号墳

それより西30度

北方え17m、且



第41図 地形断面図 (Fig. 41)

つ2m程より高所にあるのを2号墳と呼ぶことにする（第41図）。附近の標高は凡そ190m、皿川附近よりの比高は約90cmであり、畠境のある斜面の傾斜は $\frac{1}{5}$ で、附近の地類は草本及び小灌木のみ生じている未耕地であつて、現在共有地となつてゐる。廻帆故の近隣には皿川西岸だけについてても、西北方300mの所に、著名的な「三ツ塚」、南方600mの所に高尾の古墳群がある（第2図）。

（第41図）の等高線（間隔は1m）の形によつても、うかがえる如く、2号墳では墳丘の形

態が明瞭に残つてあり、現状で徑6~7m、高さ60~70cmの極めて低い小円墳である。之に反して1号墳では現状では墳丘の存在が分明でなく、周囲よりこころも小高くなつてゐるに過ぎない。附近斜面に岩盤の露出するまで、土塊の流失した所が僅々見られるところから、これらの墳において土塊の多かつ

たろうとも想像できるが、特に多量の封土を盛つたものか否かは、断定し難く、むしろ石室を築くために、地表をうがつた際の堆土を盛り上げただけに過ぎないのではないかと思われ

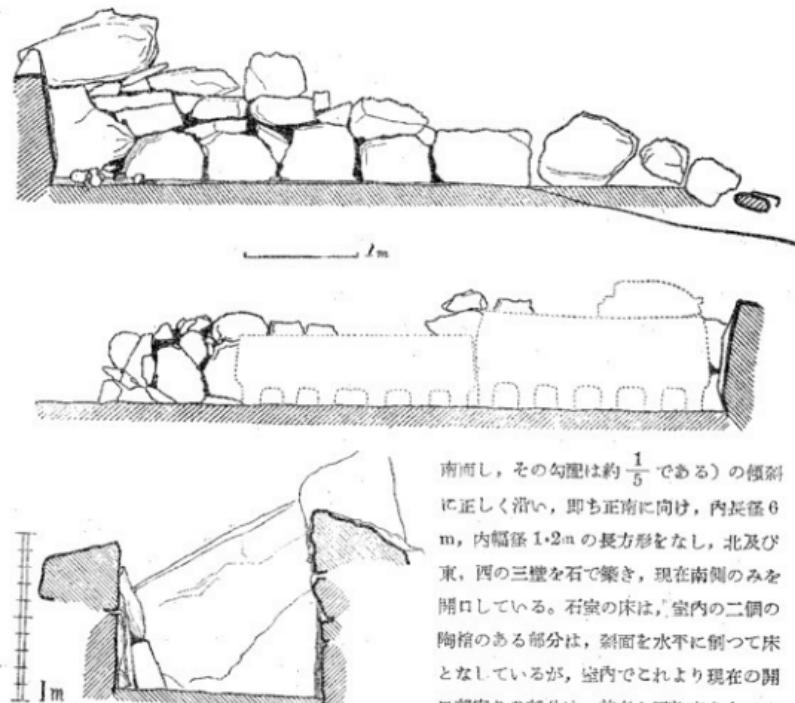
る。

本墳は何れも中宮及び門ノ山古墳発掘調査當時までに、既に前次の大掘被り、破壊著しく、1号墳では陶棺の蓋が少量粉々になつて附近に散乱し身もこわれており、2号墳では陶棺内が全くさらわれていて、しかも附近住民の來り觸るゝもの益々多く、之を放置すれば日ならずして潰滅に歸するおそれがあつたので、大半が破壊し去られたものとはい、僅かに残る部分なりとも記録保存する必要を認めて、ことさらに發掘することなく残された部分のみを實測調査したに過ぎない。

## 石室の構造

1号墳においては、石室の僅かな残骸（第11図版中央）を見るほか、既に蓋部が消失し又身の一部も破壊されている陶棺が一個存在したのみであつたが、これとて、原位置かどうかは不明である。しかしその僅かな残骸から察しても、以下に述べる2号墳と類似した

構造の石室が、同様な操作によつて脅迫されたものである。之れに反して2号墳においては石室の構造が、比較的によく残つていた。本墳においては、細長なる石室内に、床の概ね長軸上に、それらの長軸を一致させる如く二個の陶棺が相接して納められている（第42



第42図 第2号墳石室 (Fig. 42)  
図。)

本石室（第42図及び第12図版中央）は、その長軸を、本墳の存する斜面（この斜面は正

南面し、その勾配は約  $\frac{1}{5}$  である）の傾斜に正しく沿い、即ち正南に向け、内長径 6 m、内幅径 1.2 m の長方形をなし、北及び東、西の三壁を石で築き、現在南側のみを開口している。石室の床は、室内の二個の陶棺のある部分は、斜面を水平に削つて床となしているが、室内でこれより現在の開口部寄りの部分は、前者と同じ高さまで土を斜面に水平に盛つて床としている。北の壁は、底部の幅 1 m、上縁は直線状で西に傾斜し、高さ東端で 1.2 m、西端で 0.6 m、厚さ 30 cm 程の一枚石、及びその西方下部の缺損

を補う1個の石となりなる。東壁は2個の陶棺に充てる部分のみ堅固に作られ、そこでは最下部を6個の幅70cm、高さ40cm程度の石で組み、その上部を何段かにわかつて、稍小型の石を以つて組んでいるが、北壁に向う程、即ち傾斜面の高所に向う程、大きな石を段々多く積んで強固にしてある。二個の陶棺に對する部分より南方では、壁を作る石も小さく、組み方も極めて疎である。西壁は概ね8個の、東壁のよりも稍小型の石を最下段とし、東壁におけるよりも稍南方まで堅固に作られており、又上縁の高さが低いことの他は、東壁と大差はない。唯東壁のみは上方が僅かに内方に向つて、軽い持ち送りを示している。石の組み方から考へて、本石室は横穴式石室に屬するものと考えられる。前記の通り陶棺2個の存する方即ち北方と、現在の開口部寄り、即ち南方とでは、壁、床に破壊された現状から察するのではあるが、若干の差異があり、北が強固にできていたらうことが想像に難くなく、從つて北方が奥、南方現在の開口部が羨道入口であつたと思われる。この入口には遊離した中型の石が3個あつたのみであるが、封緘装置があつたのか、特別のものがなかつたのかは、現在確め難い。

本石室で更に注目すべきことは、之が天井石をもたなかつたのではないかといふ疑いのあることである。天井石の一部と思われる石は、石室内には勿論、墳の近傍にも全く見出されず、附近住民が悉く運び去つたといふともないらしい。後世の破壊を考慮しなければならぬとはいへ、東西両壁の上縁が夫々著

るしく平坦さを缺き、且つ兩縁間に高低差少なくなく、又奥壁上縁も前記の通り甚だ斜めであること等から、天井石は初めより設けられなかつたものとも疑えないではない。因みに創立津山療養所建設の際、同様に石室内に陶棺を有する能万寺古墳群が破壊されたが、その時の近藤義郎の調査によれば、それら殆ど全部の古墳が盗掘をうけていたとはいえ、現状で天井石をもつものは一基もなかつたといふ。さて本石室に便りに天井石がなかつたとしても、天井をあけておいたとか、或は自身に蓋を有する陶棺であるからとて、棺に直接に土を被せたとかいうことは、いかにも考え難く、何れは天井をふさいだものであろうが、その際天井は之をいかにしてふさぎ、又陶棺をいかにして室内に納めたのであろうか。本墳の如く狭小にして、天井石を設けなかつたとも考えられるものにおいては、天井をふさいで室を完成して後に、羨道を通じて棺を室内に納める代りに、大き目な穴をうがつて、そこに陶棺をねぎ、その周囲に石壁を築き、その上に木材等を架して、天井をふさぎ、土を盛つたものとも考えられないことはないが、勿論埴輪に過ぎない。更に南北兩棺を同時に納めたか、或は南棺は後に追加安置されたかも考えられねばならぬが、これらは本墳の如き破壊をこうむつたものについて、その解決の手掛りさえも得られないのは当然で、これまでたゞ、陶棺を有する横穴式石室には、天井石を用いたものもあり得たかも知れないといふ可能性を指摘するに止め、今後の調査に待つことにする。



第 2 号 墳 北 棺



第 2 号 墳 南 棺 及 び 北 棺



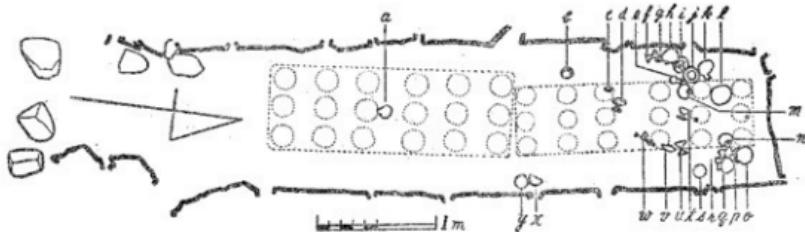
第 1 号 墳 南 棺

### 陶棺その他遺物の発見状況

1号墳陶棺は前記の如く、1棺のみが單獨に発見された。しかも当時既に蓋は完全に破壊失し、身も斜面の低い側に向つていた一端に大きな欠損があり、棺内の土も完全に攪乱をこうむつた跡を示して、蓋の零細な破片が、棺内土中種々の高さの所にあつた。棺外も、脚の下線の高さにおいて、中央列南より第2番目の脚の近くに極めて零細に壊れた一體に屬するらしい、祝部式土器の破片数個

があつたが、棺底の高さの面では遺物を認めなかつた。本陶棺は現状では水平に置かれ方向は正しく南に向つていて、斜面の傾斜よりは僅かに西に偏つている(第41図)。

2号墳陶棺は、(第43図、第11版下右)2個が前記石室内に、縦に南北に接続して列び、いずれも略水平をなす同じ床面上にある。但し南棺は、北棺が室の中軸上に殆ど正しくあるのに対して、室の中軸を僅かに外れ、殊にそ



第43図 2号墳石室平面図

(Fig. 43)

の南端が室の西壁に近接し過ぎてゐる。調査時北棺内部の土は全く排除されており、その殆ど半分以上を亡失しており、南棺内部の土は古く攪乱をうけた跡を示し、殆ど全部を失つてゐる。後記する金環3個(第45図)は北棺内部から出土したものであるといふ。

2号墳における遺物発見の状況は、右表と(第43図)とで明瞭であらう。同一石室内にありながら、南棺に伴う遺物が平瓶1個のみであるのに対して、北棺にはかように多數の遺物が伴つてゐることは、何等かの意義があるかも知れないが、今俄かに決し難い。棺外にある之等の遺物は、必ずしもすべてが石室床面に整然と立ちならんで発見されたわけではないが、石室内えの水や泥の侵入によつて顛倒したうることが充分考えられるし、何れ

にしても棺底底波は底外の石室床面にならべ置いた被葬者えの供物であることは確かである。

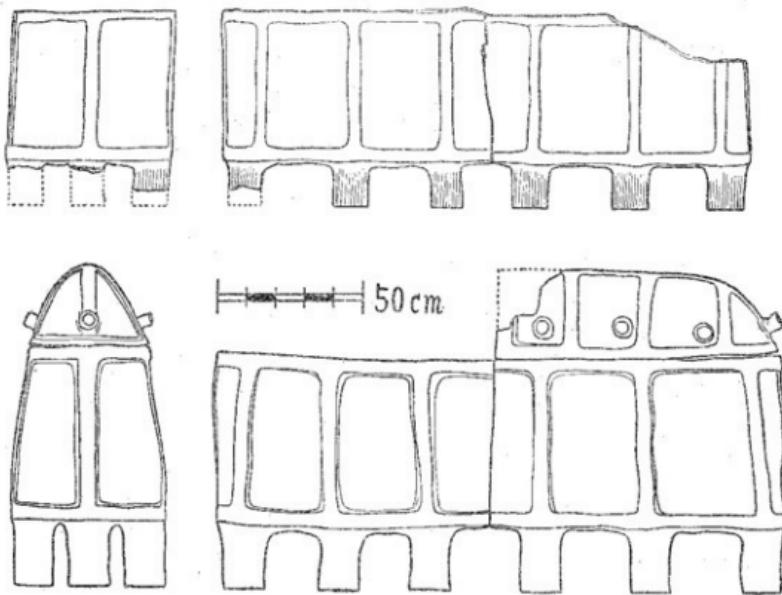
No.	遺物名	No.	遺物名
a	平瓶……(祝部)	o	平瓶……(祝部)
b	脚付壺……(祝部)	p	高壺……(祝部)
c	bの破片……(祝部)	q	平瓶……(祝部)
d	高壺……(祝部)	r	罐……(祝部)
e	罐……(祝部)	s	小形壺(蓋)……(祝部)
f	高壺……(祝部)	t	高壺……(祝部)
g	高壺……(祝部)	u	高壺……(祝部)
h	高壺……(祝部)	v	壺片(身)……(祝部)
i	高壺……(祝部)	w	壺片(身)……(祝部)
j	合付壺……(祝部)	x	壺片(身)……(祝部)
k	平瓶……(祝部)	y	壺(身)……(祝部)
l	壺……(土師)	(遊1)	壺(蓋)……(祝部)
m	平瓶……(祝部)	(遊2)	盤……(祝部)
n	壺……(土師)		

## 遺物について

### 陶棺

1号埴陶棺（第44図上、第11版下左）はその蓋を失して、身についてあるのみであるが、全長1・83m、幅0・59m、棺身の高さ0・69m、そのうち脚だけの高さ0・15m、上縁の隆起帶を含めての厚さ4・3cmで、壁は四面とも

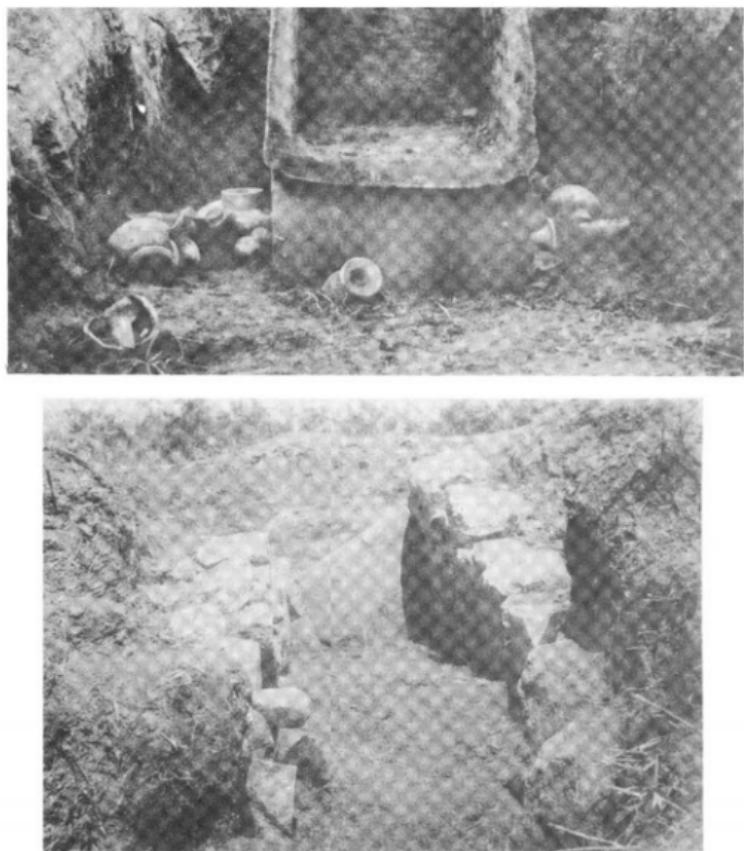
界垂直であるため、脚を除いた部分の棺身は略々直方体をなしている。脚は3行6列、計18本で、中空の円筒形をなし、厚さ2cm、表面に僅かに刷毛目がある。身の外側面には上下兩縁に沿つて全周をとりまく、幅4cm、高さ1cm位の隆起帶がある他、側面中央に



第44図　陶　棺　(Fig. 44)

1本、正面に6本の鉛直の同様な隆起帶があつて先きの上下兩縁の隆起帶間を結び、側面を2個の、正面を7個の区割に分けられている。しかしてこれら鉛直の隆起帶は概ね各脚軸の延長上にあつて、棺身の強さを増すことによつて立つている。身の内面は平坦且つ無文である。身と蓋との接合部は單に一文字で、何等の装置はない。

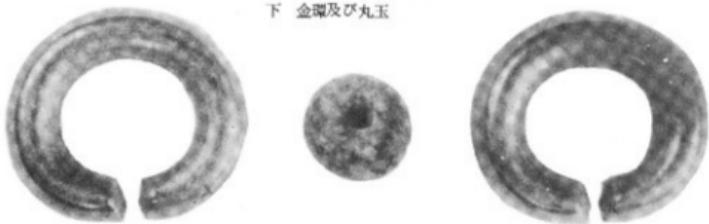
2号埴陶棺（第44図下、第11版上、第12版下）は、蓋の半分及び底の半分のうちの前者に接する部分を若干欠失しているが、畢々全形を復原し得るものであつて、身の平面形の両端は円くはないが、所謂亀甲形の陶棺で、全長1・98m、幅0・55m、高さ1・13mで、身の正面壁は上方にゆく程内方に傾いているので、長軸に直交する横断面では上すぼまり



上. 北棺半身及び附近遺物発見状況

中 石室

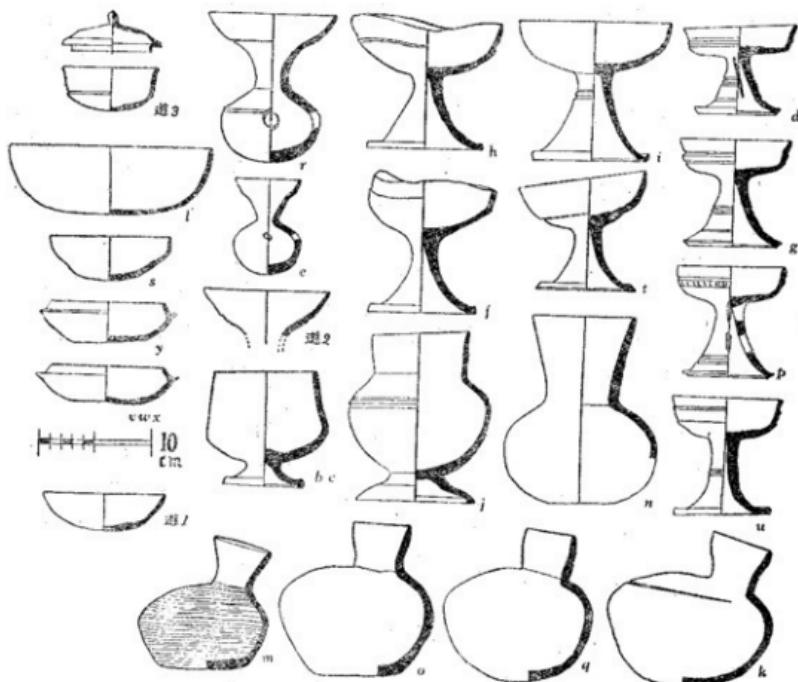
下 金環及び丸玉



第 12 図 版 紙園塚 2 号墳石室・遺物出土状況及び遺物

の形を呈し、身の上縁での幅は0・43mとなつてゐる。身の下底につく中空円筒状の脚は3行6列、計18本、高さ22cm、表面は、へらで整形され、刷毛目は見られない。脚の内面は指又は掌を以て横に撫でて整形した跡がみられる。身の外側は、1号埴棺と同様の、幅5

cm、高さ1cmの脚軸延長上にある縦の隆起帶及び上下兩縁をとりまく隆起帶があつて、棺身の強化を圖つてゐる。縦の厚さは上縁の隆起帶のある所で4・5cm、帶のない所で3・5cmであり、隆起帶に囲まれた區割内は撫でて整形した跡を示している。身の内面は上縁は



第45図 土器類

(Fig. 45)

内方に僅かな隆起をもつてゐる。身の内面は全く無文である。棺身側面上部の中央垂直の隆起帶が、上縁の隆起帶に交わる所に、直径1cmの程の輪形の凹みがあるが、その意義については、未だ考え及ばない。棺蓋は長さ1・95m、幅43cm、高さ29cm、長軸に直交する横断面は僅かに左右相稱を欠いてゐるが、

拋物線状をなし、縦断面は緩やかな低いかまぼこ形をなしてゐる。蓋外面には下縁全周及び縦の相手柄に沿つた隆起帶があり、又蓋の各半分にはその横断面に沿つて4本の隆起帶があつて、前二者の間をつないでいるこの4本の隆起帶は、棺身の場合と異り、脚軸の延長上にあるといふわけではなく、又蓋の兩半

分の接合面に接している縁にも設けられている。竪の右側面に沿つた隆起帶は、側面下縁の隆起帶にまでは達することなく、側面中央にある1個の突起に接して終つてゐる。かゝる突起は側面のみならず、正面においても、隆起帶によつて原まれた各區割に1個宛設けられていて、その位置は該區割内で下方、且つ背の半分毎にその相應の方に偏してゐる。これらの突起は直径4.5cm、高さ5cm程の円筒形をなしてゐる。背の厚さは周辺隆起帶のある所で4.5cmである。蓋と身との接合面は單純な一字文字である。

2号壇南棺は形を欠き、北壇に比して高さ低く、幅廣く、形態は1号北棺に全く酷似しているので、詳細な記述は省略する。

陶棺はその大形なものは一般に身、蓋共に中央にて、反対に對して横に切斷して四つの部分として焼き上げるのが普通であるが、この中央の切斷の方法をなるために、以上三棺の各切斷面を詳細に観察した所、實際に観察できたのは、棺身に限られているが、三棺共明らかに整形後に切斷されたものであつた。切斷面に見られるジグザグがつねに完全に噛み合つても当然のことである。ジグザグは或は意識して之をつけたものかも知れないが、確かにではない。

#### その他の遺物

1号壇 坏(蓋)(第45圖) 観部式、棺外で、棺底より高い面に遊離して発見されたもので、口徑10.7cm、高さ3.3cm、砂粒を多く含み、表面の平滑さを欠ぐが、焼成良好、作りは上等とはいえない。

1号墳鉄製品 前記壇と同様な状態で発見された10個の小鉄片で、何れもその断面が、大は縦9mm、横5mm、小は縦5mm、横4

mm程度の矩形をなす棒状のもので、いずれも小破片であり、且つ接合し得ないため、その全形及び用途を推定し得ないが、破片によつては直なるもの、直角にまがるもの、折り返してあるもの、その先が更に直角にまがるもの等があることは注目すべきである。

以下記載する2号壇出土各遺物に冠したローマ字は、第45圖に附したものと一致している。但し(a)のみは圖を省略してある。

(a) 平瓶 観部式、通高推定12.5cm、体部の長さ13.5cm、体部はその高さに比し、その長さが大きい方である。口の一部に欠損あり。焼成稍良好、無文であり、輪が体部及び口に極めて薄く吹出している。

(b,c) 脚付壺 観部式、通高概ね10.5cm、口径9.7cm、石室床頭上、棺底外にあつた器の大部分Bと、1本の棺脚内にまつたその破片Cとを接合し得たもので、体部は水平をなさず、逆んで傾斜している。体の底部は丸くて浅いが、之に屈曲して接続する上部は真直で、上方に向つてすばまつてゐる。

(d) 高壺 観部式、通高8cm、壺部の径10cm、小型精巧であるが、土質は砂粒を稍多量に含み、焼成もさほどよくない。壺部は焼損したためか水平よりは然かに傾き、2條の沈線を有する。脚には中央に2條、下方に1條の沈線ある他、縱より僅かに斜めに、2cm程の相連つた2本の貫通した切込みが焼成前に施されている。

(e) 瓢 観部式、通高8.7cm、体部の高5.1cm、口縫の縦6.1cm、砂粒を多く含み、表面平滑さを欠ぐが、焼成は良好、口は漏斗状に開いてゐるが、上 $\frac{1}{3}$ 程の所で腹を作り大きく開いてゐる。最も小型の器である。体部上方、肩の部分に貫通している孔の縫は

7 mm であり、孔の方向は器壁に直交せず、器々水平である。

(O) 高壺 観部式、通高12cm、壺部の径11.3cm、稍大型のもの、比較的砂粒を多く含み、平滑でないが、焼きしまつてある。壺部は著しく歪曲し、ために口縁及び1條ある隆起線が甚だ不規則な波状を呈している。

(g) 高壺 観部式、通高9.5cm、壺部の径10cm、脚が大きく、壺部に2條の沈線、壺の中央及び下方に夫々2條及び1條の沈線がある。焼成よく、脚の下部は所々に釉の吹出しがある。

(h) 高壺 観部式、通高約12.5cm、壺部の径13.5cm、稍大型の器で、土質は砂粒を多く含むが、焼成良好、壺部に1條の沈線あり。壺部は著しく歪曲して、口縁は大きな波状のうねりをもつてある。焼成時の失敗によるものであろう。

(i) 高壺 観部式、通高12.5cm、壺部の径13.8cm、本墳発見品中では最も大型の高壺で、砂粒多量に混するも、焼成良好、脚部に変化なく、唯脚の上部に平行2沈線あるのみ。

(j) 台付壺 観部式、通高15cm、体部の径13cm、焼成稍不良、僅かに瑕つた肩をもつ体部に、上方に向い僅かに開き且つ口縁部も極めて僅かに外反する所の、比較的長い筒形の頸がつき、兩者の境界は、明かになつてゐる。体部の肩には、平行した2沈線がみられる。台は比較的大きい。

(k) 平瓶 観部式、通高14cm、体部の長さ15cm、体の高さ小で、長さ大きな器、無文にして、口の附いている方と反対の側の、体の上方の大半に、1條の沈線が施されている。上半は灰白色、下半は観部式特有の色を

もち、焼成良好ではないが、体の上部には吹出した跡の刻離した跡がある。

(l) 壺 土師、口径18cm、高さ6cm、厚さ4mm、大形粗製の器であるが、肉は比較的薄く、斷面は稍平たい、底から口縁に到るまで緩やかな弧を描き、その間に角がない。勿論無文である。

(m) 平瓶 観部式、通高12cm、体部の長さ11.6cm、口縁の作る面が器の左右相称面に対して直交せず、稍傾いている。

(n) 増 土師、本墳発見品中最大の土器で、通高17cm、体径14cm、体は高さ低く、径大で、燕形をなし、之に極めて僅かに外反するが、殆ど真直といつてよい断面をもつ、漏斗状に上方の開いた頭がついている。体と頭の境は器の表面で緩かな移行であるが、内面では屈曲をなしており、体の底面への移行は滑かで角がない。色は赤褐色、全面にひび割れ甚だしく、無文、土質は僅かに砂粒を混えている。

(o) 平瓶 観部式、通高、体長共に13.5cm、体の高さ大きな器で、稍厚手、焼成比較的に良好である。

(p) 高壺 観部式、通高10cm、壺部の径9.7cm、壺部は2條の平行沈線間に、多數の縱に近いが、僅かに斜めの引き抜きを施し、脚の下方にも2條の平行沈線をつけてある。その他腹の前後兩面に上下に2本の、細長な縦の溝線を貫通した孔をあけている。焼成良好。

(q) 平瓶 観部式、通高13.5cm、体部の長さ13.5cm、灰白色、無文で焼成良好、口縁の円形が歪んでいる。

(r) 瓶 観部式、通高13.5cm、体の肩部及び口部に各1條の沈線あり、焼成精良好。

(s) 小形环(上) 視部式，高さ4cm，径11cm，砂粒を多く含み，表面不滑ならず。

(t) 高坏 視部式，通高概ね10cm，环部の径11.5cm，环部それ自身には歪曲がないが，脚との接続に歪みあり，环部は著しく傾斜せり。环部下方に1條の沈線を有す。

(u) 高坏 視部式，通高10.7cm，环の口径9.8cm，环部には上方に平行2沈線，下方に1沈線，环中央部に平行2沈線あり。本高坏の脚は，本校発見の他のすべての高坏の脚が，环部との附着部から直ちに下方に開いているのに対し，該附着部からかなり下方まで筒形を保つてから後に開いている。焼成良好，环部には釉の吹出しが見られ，又若干のひびわれがある。

(x,w,v) 环片(身) 視部式，破片を接合して原形を復原した結果，径13cm，高さ概ね3.5cm，作りはよくない。砂粒を多量に混じて，焼成また不良。

(y) 环(身) 視部式，径12.5cm，高さ3.8cm，砂粒の混入多く，焼成亦不良。

(遊2) 盔 裝部式，2号墳墓内南寄り室の床面より高く，遊離して発見されたもので，蓋を有し，之をかぶせた時の通高6.8cm 径88cm，体部は下方寄りに沈線1條あり，

ここで，浅い丸底が角を作つて，側に移つており，側は上方に僅かに開き，更に外反する口縁に到つてゐる。蓋部は断面が中頸で角を作つて凸出した二段の傾斜をなし，上部中央に乳突状のつまみを附し，口唇の内面から出た張り出しあは，体部口縁に嵌入する如くなつてゐる。

金環及び丸玉 (第46図及び第12圖版下)  
金環は殆ど等しい2個よりなり，外径2.4

cm，内径1.4  
cmにして，  
之等は長径  
9mm，短径  
5mmの 檜  
円形の断面

第46回 金環及丸玉 (Fig.46) を有する棒  
を叩いてまるくしたものらしく，環の一部に  
2mm位の 切目がある。材は金銅に金を薄く  
かぶせたもの様である。丸玉は径1.2cm，  
厚さ1cmの作りのよくないもので，厚さの  
方向に内径2mmの穴を貫通している。穴は  
一方の出口が廣くえぐられてゐる他は，内径  
一定して美しくうがたれています。色は薄茶  
色，石質は群かにしていない。

(附) 中宮第1号墳出土人骨について

中　島　寿　雄

【内　　容】

人骨出土の状況

第1号人骨

性　及　び　年　齢

保　存　状　態

観察及び計測事項

第2号人骨



### (附) 中宮第1号墳出土人骨について

#### 出土の状況

第3章 中宮第1号墳発掘調査報告中、石室内遺物出土状況の項において述べられた如く、該墳後円部横穴式石室内で、一体の人骨が発見された。この人骨は右壁より30cm程度離れて、壁と略々平行に、右の上下肢が整然とおかれ、又発掘作業中は勿論亂かしはしていないが、古く行われた擾乱の形跡を認め、現状では奥壁より1m程の所に下顎骨が見出された(第10図第5図版右上)。既に全身骨格の多くの部分を失っているが、之が仰臥伸展されたものであることは誤まりない。束ねられた刀3口が、その右上肢に添つて置かれ、該上肢はそれを抱く如き形をなしていた。人骨は室内床面の発掘調査の時に、既に他の調査者によつて、界々その全貌を露呈されており、本文の筆者はその後これを取上げたのである。

本人骨水洗中に一見、これと個体を異にする歯牙數本を発見した。従つて、前者を第1号、後者を第2号人骨と稱することにする。

第2号人骨は前記歯牙のみで、他の骨を伴わず、その歯牙は第1号人骨の下顎附近よりの採集包みの中にあつたもので、概ね該下顎骨の附近にあつたものである。1号人骨がその右側上下肢の整然と残つているのに反し、左側上下肢は、これに欠損部多く、且つ位置の乱れが見られたことから考へて、第2号人骨は後から1号人骨の左側に、之に接してその遺骸を安置されたもので、しかもその大部を消失したものと推定し得るであろう。何れにしても、発掘現場において、この歯牙を1号人骨と辨別採集し得なかつたことは、遺憾

であるが、事清止むを得なかつた。

次に本石室における遺物出土の状況を見るに、刀を抱いた1号人骨が右壁に沿つて置かれてあつたのに對して、之に對向する左壁においても、それに沿つて、一方、同様な刀1口及びそれに続く他の1口があり、且つ他方、前者より25cm程の所に、これと界々平行して、別に小さい刀1口及びその続きに、刀子、更にくつわ等があつて、之等兩者の間にには、1・5m程の長さにわたつて、大きな遺物の見られない部分がある(第10図、第5図版右中)。発掘者の言によれば、この部分には点々と白い粉が存在したことを、認めたといふ。これら遺物の配置及びこの白粉から考へて、おそらくこの空所にも人骨が存在したものと想像しても誤りないであろう。従つて実際の骨の遺跡は採取していないが、今假りにこれを第3号人骨と稱しておく。

石室内のその他の部分においては、人骨の存在した形跡は認められないので、本石室には1乃至3号の三体の遺骸が埋葬されたものと想定される。後に詳記する如く、1号人骨は壯年の男性に屬し、2号人骨は性は決し難いが、年齢は12~3才、童年第3期に屬することが認められる。第3号人骨について、直接には勿論知るよしもない。さてこの三者間の関係はいかなるものであろうか。既記の如く、2号人骨は、1号より後に葬られたものと考へられるが、これは兒童のこと故、ことさらに厚く葬ることもなく、便宜室内の空所に置かれたものではなかろうか。従つて重要なことは1号及び3号間の関係であり、3号に實際の遺骸のない爲、確言すべきではない

が、その遺骸を納めた木棺等があつたとして、その周間に置いたろうとも考えられる所の、諸遺物の種類、その整然たる配列、及びその良好なる保存から想像をたくましくするならば、3号は同様に男性で、おそらくは壯年以上のものに屬し、且つ1号より後に葬られたものと推定される。2号の児童を葬り置くに際しては、假りに左壁寄りに充分な空所があるのに、ことさらに1号に觸れる如く、或はこれをこすり知らして証いたことは考え難く、2号は3号よりも後に、1、3号間の空所に便宜安置したものと考えられる。要するに1乃至3号の三者は、第1、第3、第2の順を追つて埋葬されたものであり、しかも何等かの理由で、そのうち最も古い第1号のみが、最もよく保存されたものと推定してよいのではなかろうか。各号人骨は、何れも極めて近親者のものであらうが、3号人骨も男性に屬したとするならば、2号は児童故しばらく論外として、本室に埋葬された二人の大人が共に男性であつたことになる。一般に古墳時代後期における女性の社会的地位については若干の私見があるが、今はそれらに觸ることなく、單に木石室における事實、及びそれが可能ならしめる限りの想定のみを記すに止めよう。尚本墳前方部の堅穴式石室には人骨の残存を認めなかつた。

#### 第1号人骨 男性壯年

性及び特徴 頭骨片の厚さはさほど大ではないが、眉上隆起強く、歯牙粗張大、四肢骨は、骨端欠除して不明であるが、骨体は太くして厚く、筋肉附着の粗面大にして粗粒強く、男性に屬するものと認められる。又歯牙の咬耗は概ねマルテンの2度或は1度で、

検し得た唯一つの結合たる、冠狀及び矢状縫合のブレグマ部に齧痕を全く認めず、壯年に屬するものと認められる。

保存状態 一般に保存甚だ不良であり、腐朽甚だしく、古墳人骨特有的の脆弱さが著るしい。零細な破片のみ多く、頭骨は殆ど復原し得ず、四肢長骨も辛うじて接合し得たのは、骨体に限り、骨端は何れも失われている。色は骨片によつて灰白で、これらは稍堅緻であるが、他のものは、殊に体の右半、刀に沿つていた部分のものは、茶褐色を呈し、脆さ甚だしく、表面に大小の鉄錆が附着して、強いてこれを除こうとすれば骨片自身の剥離するもの多く、又植物体の分泌物によるものであろうか。Dendrite状の褐色の模様が縱横についているものが多い。

頭骨として、その部位の明瞭なものは、前頭骨の中正線に沿つた4片、左頭頂骨前頭角、同頭頂部の一部、左側頭骨翼節結節の近傍、右下頸体の<sup>7</sup>より<sup>4</sup>に到る部分等の各破片で、その他はいずれも1平方厘米未満程度の零細、且つもろき破片少々であり、接合しない。歯列は下に丸を以て固んだものが存している。

8	⑦	⑧	⑤	④	③	2	①	1	2	3	4	5	⑥	⑦	8
8	⑦	⑥	⑥	④	④	2	1	1	2	⑥	④	⑥	6	7	8

脊柱及び胸廓の骨は全くなく、上肢帶を欠き上腕骨は左右共、上下骨端を欠損し、右前腕骨は橈骨尺骨共に上下端を失い、左前腕骨はなく、手骨は全くない。寛骨も存せず、大顎骨は右のみ稍長い骨片のみ、左は短い骨片のみあり、脛骨及び腓骨は左骨体下方の小片のみあり、足骨を全く欠いている。

### 観察及び計測事項

頭骨は前頭縫合及び同鼻上縫合なく、前頭骨前面の厚さ5mm、顎頂骨前頭角の厚さ5.5mm、下頸骨体は稍強く、極めて軽微の下頸隆起あり。歯牙は概ね齒根端が喪失しており

	1	2	3	4	5	6	7	8
咬耗の度	2+	+	2 2	2 2	1 1	2 2	1 2	+
冠長	12	+	10 10	8 8	7 8	6 6	7 7	1
冠幅	9 1	+	7 7	7 7	6 7	12 12	9 10	+
冠厚	8 1	+	8 9	11 11	8 8	12 11	12 12	+
咬頭数						5 4	4 4	+
齒根数			2 1	+	3 3	+	+	

四肢骨。上腕骨は右は鉄錫附着して計測不能、左の骨体破片について、その中央の高さを推定して、骨体中央最大部22mm、同最小部17mm、同断面示数77.4、中央周径60mmの値を辛うじて計測し得た。現代日本人に比し、稍々偏小であるが、石器時代人の筋肉には遅く及ばないものである。

尺骨は右について、前後径12mm、横径16mm、断面示数75を得た。

橈骨は同じく右について、骨体横径18、同矢状径13mm、断面示数は81.3である。

大腿骨は骨体中央を右について推定して、その矢状径28mm 横径24mm、断面示数85.7、中央周径82mm、を測つた。粗麿線強きも、柱状の程度は著しくない。

脛骨及び腓骨の中央諸径は計測不可能で、又特記すべきことはない。

全長を計測し得ない故、箇冠部における計測値のみを掲げる。但し矢長は、同じ表に示す咬耗で明らかな通り、咬耗の結果が表わされている。齒根の数は欠損の爲、知り得ないものが多い。

### 第2参考人骨

骨のみであって、次表中丸を以て囲みたる10本のみが採取された。すべて永久齒で、保存状態は不良、齒根の界々存するものは31のみで、他はいずれも齒根を失い、殊に61, 41, 61, 71は象牙質を全く失つて空洞にエメラル質のみとなつてゐる。全体に小形、纖弱であり、咬耗は殆ど見られず、概ねマルテンの0度であり、僅かに第一大臼歯、犬歯等に軽度の、即ちマルテンの1度のものがみられる。性は決し難いが、年齢は成年第三期、くわしくは十二、三才に属するものと認められる。大臼歯における咬頭数は、左(4, 4, ?)右(?)である。61にはカラベリー氏結節を見ず、又該当の齒がないので臼歯結節、臼歯結節の有無はわからない。歯冠部の計測値は次表の通りである

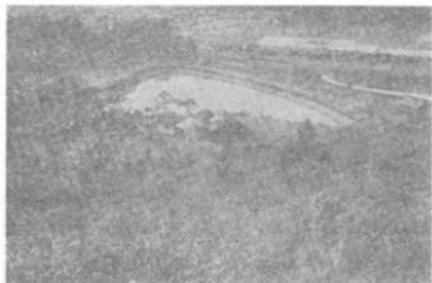
8	7	⑥	5	4	③	②	1	1	2	3	4	5	6	7	8
8	7	⑥	④	3	2	1	1	2	③	4	5	⑥	⑦	8	

2 3 6 | 3 4 | 5 6 | 6 7 | 7

冠長 10 — 7 9 9 7 — 7 6 7

冠幅 7 8 11 — 7 7 (10) 10 10 10

冠厚 — 9 — — 8 8 — 10 10 10



カット 7 滋賀県の中宮1号墳 (Cut 7)

STUDY OF THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA,  
IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

Volume I

*Resume*

TSUYAMA, JAPAN

1952

## P R E F A C E

This report contains the results of our study on the tombs at Sarayama, near Tsuyama City, in the Province of Mimasaka carried on since January, 1951 by members of our school of Okayama University, in compliance with a request of Tsuyama City. All the results, however, have been arranged and systematized by Y. Kondo and T. Nakashima in the present form now published.

Our sincere acknowledgements are due to the authorities of Tsuyama City and also to Mr. S. Narasaki, Mr. H. Fukutake and others for the kind help offered to us during our investigation.

HIROSHI NEGISHI, M. D.

RYOJI URA, M. D.

TOSHIRO NAKASHIMA

YOSHIRO KONDO

Okayama, February, 1952.

STUDY ON THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA CITY,  
IN THE PROVINCE OF MIMASAKA, JAPAN.

---

CONTENTS

- Chapter I — Sarayama Tombs  
Chapter II — A. Nakamiya I Tomb  
                  B. Monnoyama I Tomb  
                  C. Gion-unc I and II Tombs
- 

PLATES

1. General views of Nakamiya I Tomb (photo by M. Uno).
2. Pit type chamber in "square front" and *Haniwa* cylinders as they were found (ditto).
3. Ceiling of the corridor type chamber and the shut-up set of the entrance in Nakamiya I Tomb (ditto).
4. Interior of the corridor chamber in Nakamiya I Tomb (ditto).
5. Remains in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).
6. Sediments of the offerings found in the dishes (*Yuwaibe* potteries) : upper; magnification of the sediments in the middle left dish (photo by M. Yamada).
7. Remains found in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (photo by T. Nakashima).
8. General views of Monnoyama I Tomb, before and after excavation (ditto).
9. Cist type coffins and stone covering of Monnoyama I Tomb as they were unearthened (ditto).
10. Cist type coffins found in the Monnoyama I Tomb (photo by Uno and Nakashima).
11. Earthen coffins both in the Tombs Gion-unc I and II as they were found (Photo by Nakashima).
12. Corridor-type chamber, remains as they were discovered, and a part of remains, in the Tomb Gion-unc II (ditto).

## ILLUSTRATIONS

Page in  
Japanese text

Fig. 1. General map of Tsuyama City and its environs. . . . .	12
Fig. 2. Map of Sarayama showing distribution of the tombs. (Y. Kondo). . . . .	22
Fig. 3. Physiographic environment of Nakamiya I Tomb (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). . . . .	59
Fig. 4. Sections of Nakamiya I Tomb (Y. Kondo). . . . .	59
Fig. 5. Relation between <i>Haniwa</i> cylinders, chambers and mound (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). . . . .	60
Fig. 6. <i>Haniwa</i> cylinders of Nakamiya I Tomb (Y. Kondo). . . . .	61
Fig. 7. Plans and sections of the corridor type chamber in Nakamiya I Tomb (S. Narasaki, H. Fukutake and Y. Kondo). . . . .	63
Fig. 8. Plan and section of the pit type chamber in Nakamiya I Tomb (S. Narasaki and Y. Kondo). . . . .	64
Fig. 9. A set of three pots and one big dish with a strong stand (ditto). . . . .	67
Fig. 10. Plan of the stationing of funeral objects in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	68
Fig. 11. Various types of potteries found in and out the mound (Y. Kondo). . . . .	71
Fig. 12. <i>Haji</i> type potteries found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	72
Fig. 13. <i>Yuwaibe</i> type potteries found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	73
Fig. 14. <i>Yuwaibe</i> type potteries (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	74
Fig. 15. A set of three pots and a big dish with a strong stand (ditto). . . . .	75
Fig. 16. Beads found in the corridor type chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	76
Upper: Small beads made of glass (red, purple, green and yellow). Lower: Globular beads made of clay (black).	
Fig. 17. Iron arrow heads found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	77
Fig. 18. Iron arrow heads (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	77
Fig. 19. Iron arrow heads (III) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto). . . . .	78

Fig. 20.	Iron knives found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	78
Fig. 21.	Iron blades found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	79
Fig. 22.	Stirrup ( <i>Tsubo Abumi</i> ) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	81
Fig. 23.	Stirrup (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	81
Fig. 24.	Iron bit found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	82
Fig. 25.	Iron bit (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	83
Fig. 26.	Iron bit with a pair of ornament ( <i>Kagami-ita</i> ) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	83
Fig. 27.	<i>Uzu</i> (a kind of trappings) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	84
Fig. 28.	<i>Uzu</i> (II) found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	85
Fig. 29.	Iron rivets found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	85
Fig. 30.	Clasp of saddle found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	85
Fig. 31.	Iron ax found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	86
Fig. 32.	Iron chisels with wooden cases found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	86
Fig. 33.	Iron nails found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	87
Fig. 34.	Others found in the corridor chamber of Nakamiya I Tomb (ditto).	88
Fig. 35.	Physiographic map of Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, T. Nakashima and Y. Kondo).	91
Fig. 36.	The stationing of three coffins and stone covering (H. Fukutake, Y. Kamaki, T. Nakashima and Y. Kondo).	92
Fig. 37.	Cist A. in Monnoyama I Tomb (Y. kondo).	94
Fig. 38.	Cist B. in Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, Y. Kamaki and Y. Kondo).	95
Fig. 39.	Cist C. in Monnoyama I Tomb (H. Fukutake, S. Narasaki and Y. Kondo).	96
Fig. 40.	Bottom fragment of <i>Yayoi</i> type pottery found in the mound of Monnoyama I Tomb (Y. Kondo).	97

Fig. 41.	Physiographic environment of Gion-une Tombs (H. Fukutake).	100
Fig. 42.	Section of a chamber in Gion-une II Tomb (H. Fukutake and Y. Kondo).	101
Fig. 43.	Plan of a chamber in Gion-une II Tomb (Y. Kondo).	103
Fig. 44.	Earthen coffins found in Gion-une Tombs (Y. Kondo).	104
Fig. 45.	<i>Haji</i> type and <i>Yuwaibe</i> type potteries found in Gion-une Tombs (Y. Kondo).	105
Fig. 46.	Two golden ear-rings and a bead found in Gion-une II Tomb (Y. Kondo).	108

RESUME OF  
A STUDY OF THE TOMBS AT SARAYAMA, NEAR TSUYAMA  
CITY, IN THE PROVINCE OF MIMASAKA

CHAPTER I SARAYAMA TOMBS

Sarayama tombs which we here treat is a name given to a group of tombs constructed at the foot, on the slopes, and upon the ridges of the mountains rising 300 or 400 metres from the narrow level ground in the south-western part of Tsuyama Basin in the province of Mimasaka (Fig. 1). As a result of our investigations, we have found 168 ancient tombs in this region. According to their features, these tombs may be classified into four groups—Kannabi, Sagayama, Takahachi, and Ōhira—and further subdivided into 13 or 14 smaller groups (Fig. 2). Together with Kawanabe Tombs in the south-western part of the Basin, and with Soja Tombs in the northern part of the basin, Sarayama Tombs constituting "ancient tombs of Tsuyama Basin", are good material for archaeological studies. It is clear that Tsuyama Basin, containing the ruins of Kokubunji Temple (established in the 8th Century A.D.) and the site of Kokufu of Mimasaka Province (office of local government in ancient Japan) as well as the site of Sarayama Tombs, has always been the centre of the province of Mimasaka.

Built in ancient days, when agriculture was the basic production, the structure of the numerous tombs in the mountainous region suggests the characteristics of state authority in ancient Japan and of its succeeding history.

Before the appearance of these tombs, the terraces around Tsuyama Basin must have been used for human habitation since stone implements and potteries belonging to the *Yayoi* age have been discovered there as well as in Sarayama region.

Of the many important aspects of the study of Sarayama Tombs, we here are interested in the constructors of the tombs. What can be told by the presence of numerous tombs in a very confined region? Who were their constructors? It is

easy to say that they were the "aristocracy" or the "powerful families", as many authors have told us. But this answer does not satisfy us. By their arrangement in chronological order, it is known that over 90% of the tombs in Sarayama belong to the late period of ancient tombs, and thought to have been built in and after the 6th Century A. D., and the tombs constructed prior to the 6th Century A. D. constitute within 10% of all extant. We think that the Sarayama Tombs and those in other part of "Tsuyama Basin" do not show the decrease and the increase in population or the changes in social customs, but they indicate the process through which the political society had been formed and the changes in the constitution of communities.

The late period in the chronology of Japanese ancient tombs has been supposed to be between the 6th Century and the 1st half of the 8th Century A. D. Accordingly, in Sarayama, 140 or 150 tombs were constructed during these 200 or 250 years. The constructions were very frequent. Besides, we must not forget that usually 2 or 3 bodies were buried in a tomb or a chamber. One corridor chamber of ordinary size in Sarayama, however, contained seven earthen coffins. Thus, it can be reasonably estimated that 300 or 450 persons of positions high enough to be buried in mound tombs died during about 200 years or 250 years. A remarkable number of "aristocrats" or "powerfuls" were inhabitants of Sarayama.

The ancient communities in Japan, since the adoption of agriculture in the 2nd or the 3rd Century, B. C., rapidly developed political and social class characteristics. The facts in Sarayama above mentioned reflect the historical process of constitutional development in the communities. In the step of the development of communities (before the late period) when the whole society was not put down under the perfect control of the slavery, the first social relation of classes, in spite of the appearance of the opposition of classes; individualism was not a characteristic of the people: individualism was embodied in "heroes" as representatives or "chieftains" at the head of the communities. During and after the 6th Century A. D. each community (house community) disintegrated into several family communities with patriarchs as powerful leaders. It is right and proper that through this process of disintegration, difference in rank resulted among the patriarchal communities. Such patriarchal communities as grew in Sarayama, must have arised in this historical pattern. The fact that tombs during the late period are small in size and of similar type, compared with the tombs belonging to the earlier period which are generally great in size and of strong individuality, may be a result of the patriarchal social pattern described here. The sudden increase in number and the general reduction in size will be understood, if

we think it to be a phenomenon reflecting the above conditions.

Finally, we can follow the right path of studies on the tombs only through a comprehension of the changing social characteristics of their constructors.

## CHAPTER II

### A. NAKAMIYA I TOMB

Situated on the northwestern slope in a section known as Fukuda, south of Sarayama, Nakamiya I Tomb has retained nearly its original form. The shape belongs to the characteristic mound type in Japan known as "Square front and Round back". But the "Square front" radiating from the "Round back" in the south direction is so flat and little that people often call this the scallop-like type with the base, as measured from the extreme end of "Square front" to the "Round back", being about 23 metres long, and the height of the round part about 5 metres, this tomb is the one of the largest in the whole group of Sarayama (Pl. 1 and Fig. 3, 4, 5).

A number of *Haniwa* cylinders (mortuary objects of the drain pipe-like type) were discovered 20 or 30 cm. under ground around the circular mound. These are identical to those found in many other parts of Japan, but rather small in size (Pl. 2 and Fig. 6). Two stone chambers, one at the middle of the "Round back" and the other at the "Square front", were found; the former is the large and massive one of corridor type with its bottom at the depth of 330 cm. or 340 cm. below the surface and the latter, the small, shallow pit type (Pls. 3, 4 and Figs. 7, 8).

In contrast to the discovery of only two dish type earthenwares in the pit type stone chamber, we found varieties of precious funeral objects in the corridor type chamber — many earthenwares (*Yuwabe* potteries and *Haji* potteries), iron objects, beads and so forth (Pl. 5 and Fig. 10). Among the earthenwares which occupied half of the finds, we found two things of particular interest: the grand dish with long and firm stand upon which were placed three pots one over another, discovered at the northwestern corner of the chief chamber (Fig. 9), and the remains of the offering to the dead found in dishes with lids (Pl. 6).

The appearance of the former is unparalleled in Japan, but similar items have been found in ancient tombs in the southern part of Korea. The latter may be important material for the study the offering to the dead in ancient Japan. We should like to add that horse equipment and trapings, weapons of war, an iron ax, big and square nails, chisels, bijou and others were discovered, showing the instructive arrangement. (Pl. 7 and Figs. 11—34).

Finally this tomb was presumed to have been constructed in about the 6th Century A. D. judging from the shape of mounds, the structure of chambers, and the remains.

#### B. MONNOYAMA I TOMB

Situated near the extremity of the ligulate terrace west of Mt. Kannabi, which fronts on the Basin of Tsuyama, is Monnoyama I Tomb, actually a collection of neighbouring tombs. This tomb is small and flat in the structure, and curiously pentagonal in shape (Pl. 8 and Figs. 35, 36). By unearthing, we discovered the stone covering, lying about 20 to 50 cm. below the surface, on the slope of the mound and three stone coffins of simple make on the flat top; the former consisting of numerous cobble- and split-stones (Pls. 9, 10). The three coffins commonly named "cist" vary in size, but are almost similar in structure (Figs. 37, 38, 39).

Contrary to expectation, no funeral objects as well as no ashes were found in them except several small fragments of unglazed potteries on its outside (Fig. 40).

#### C. GION-UNE I AND II TOMBS

These are situated on the gently sloping southern side of Mt. Sagayama, commanding a very fine view (Fig. 41). Both Gion-une I and Gion-une II, with 17 metres between them, had already been demolished before we surveyed. Especially, in Gion-une I tomb the demolition was exhaustive, so the insignificant ruins of the corridor chamber, the destroyed unglazed earthen coffin, and dish type earthenware were all we found (Pl. 11).

In Gion-une II Tomb we unearthed a semi-destroyed stone chamber in the

middle and two unglazed earthen coffins in it, at the foot of which many earthenwares were found (Pls. 11, 12, and Figs. 42, 43, 45). Of the two coffins, the southern one had been demolished in to fragments, and the northern was partly destroyed. All the coffins, both in I and II, are unglazed and orange colored of the so-called tortoise carapace type, similar to those which have been generally found in the tombs of Sarayama and other parts of the Province of Mimasaka (Fig. 44). In addition, golden ear-rings and a bead shown in Pl. 12 and Fig. 46 were the finds before our investigation.

The tombs containing the earthen coffin of this kind are concluded to be new in chronological order of the ancient tombs in Japan. Accordingly, we may here presume that these tombs belong to the second half of the 7th Century A. D.

resumed by *Yoshiro KONDO*

Anthropological and Archaeological Seminar,  
Department of Anatomy, Medical School,  
Okayama University.

昭和二十七年三月二十日印刷  
昭和二十七年三月三十日発行

編集者 近藤義郎  
発行者 中島琢之

津山市田町38番地  
印刷所 津山朝日新聞社印刷部  
印刷者 福田卓也

昭和五十二年三月十五日複刻

津山市教育委員会

津山市川崎168  
印刷者 有限会社 弘文社